老梅居雜著

本間文庫
文庫 14
D 132

宮城縣図書館

老梅居雜著

內藤鳴雪著

俳書堂

文庫14
P132

例言

本書は雑誌「ホトヽキス」に載りたる余が俳句以外の論説談話等を摘抜して一冊となせるものなり。書肆の主人が書名を求めらるゝに方り、一方に蕪雑の意も取りて、之を老梅居雑著と名づく。

「ホトヽキス」隨問隨答の欄も子規居士爾後余が解説を受持ち居れど是は別に「老梅居俳句問答」の名を以て既に發刊されたり。又同書中の試問選評は、四方太、碧梧桐、虚子氏のと共に、是も別に一冊として發刊さるゝ筈なり。故に此二種の雑著は此雑著中に加へず。

丁未五月　　鳴雪自記

老梅居雜著

目次

獺祭書屋俳句帖抄……一
追懷雜記……四
ホトヽギス六卷一號のはじめに……二〇
虛子君の連句論……二一
俳句の俳の字……二〇
芭蕉と能樂……三三
電車の飛乘……三五
狂詩半可山人集……三七
失考の正誤……四一
正誤の正誤……四四

歴史の俳句……四四
夢……四八
言志集……四九
明治座伊賀越等の評……六六
「ハタ、キ」の稲青氏が説に就て……七七
小説の主人公……八二
維摩經……八五
犬の糞の元日……九〇
文藝協會の發會式……九三
本郷座野火の評……九九
舊劇談片……一〇九
野火の餘論……一一一
板櫛雜記……一一四
江戸繁昌記等……一二八
俳句と理論……一三三
中川氏の俳諧審美學……一三三
懸葵の四明氏が説に就て……一二五
本郷座無名氏の評……一三八
俳諧三十六歌仙及行脚俳人芭蕉……一四二
櫻井中尉の肉彈……一五〇
我俳句と日本新聞との關係……一五二
趣味句風の異同……一五五
僕の多忙と自筆文……一六〇
神式婚禮の媒妁人……一六三
……一六四

田舍源氏に就て……一七一
田舍源氏餘論……二〇一

老梅居翁著

獺祭書屋俳句帖抄

內藤鳴雪著

子規子の俳句帖抄は紅綾子が先づ評せられたが、其評は俳句其物よりは兩君間歷史的の感懷が多いやうである。僕も斯書に就ては紅綾子と同樣で、一たび之を開けば歷史的の感懷に堪へぬのである。僕は子規子に對して、年齡と經歷とに於ては鄕里の長者先輩である。寄宿生としては監督したこともある。又其漢詩を評して添削したこともある。是が今以て子規子より翁又は先生の稱呼を甘受せねばならぬ所以である。併し、人も知る如く俳句に於ては僕は子規子の徒弟である。子規子は僕の師である。先達である。兎も角も僕が今日俳人、否、俳人らしく一部の人に云はるゝやうになつたのは全く子規子の賜である。子規子なかりせば僕は勃繹たる理窟的の一漢で終はるのであつた。故に內藤素行を生んだのは僕の父母で、內藤鳴雪を造つたのは子規子である。尤も其敎を受けたと云ふも、諄々然として講明し、倪焉として聽從したと云ふでもない。每々團欒して句作したり、又句の批評を受けなどして屢々蒙を啓いたことは勿論であるけれども、此外に多くは意見が衝突して議論をしたのである、

甚しきは喧嘩に近き爭ひをしたこともある。而して其當時僕は何處までも自ら信ずる所があつて、少しも屈せなかつた。然るに早きは一箇月遲きは一箇年も立つた時分に十の八九は子規子の說に服して來る。最「俳句を學んが明治廿五年より今日まで滿十年間此の如き敎化を受けたことは實に幾度であるか分らぬ。尤も其時々子規子に向つて自白し降參したことも多いが、まだ明言する機會を得ぬのもあるやうだ。要するに講說批評等で注入せられたよりは、斯く討論の末自ら悟つた方が明瞭である。堅固である。併しこゝに今以て一致の出來ぬものがある。夫は戀と滑稽と歷史とに關する詩的感想の範圍で、是も固より僕のが僻して居るには相違ないが、何分自ら捨てられぬ。恐くは終身此儘で濟むであらう。將又右の加く子規子の敎化を受けたとは云ふものゝ其句作上は決して碧梧桐虛子四方太露月紅綠青々格堂等諸子の如き造詣を得たのではない。非常に負けて貰つた所で「既に堂に昇れり、未だ室に入らず」と云ふのが極言である、が是も怪しい。尙ほ此他僕と子規子と一の因緣談がある。夫は僕の少年の時鄕里で漢文を修めた時分、數多の儒官中で最畏敬し最信賴して居たのは大原觀山翁である。翁は經書歷史詩文等の諸科總て他の儒官より勝れて居られた。夫故僕は一も二もなく翁の指揮を以て方向として居て、就中漢詩の批評を受くることを常とし、翁も亦僕が作を特に推奬して呉れられた。而して其詩作の標準は如何であるかと云ふに、專ら倫理道德的の感懷を叙するのが宜いので、殊に其頃は天下多事尊王攘夷や開國鎖港の議論など紛々たる時であつた故、此種の感懷を述べる時は最翁の賞讃を得たので、其他單に山水花鳥風月を詠じた作は殆ど嘲笑に附るものとして居た。そこで僕が詩作の標準は自然に翁の賞讃の在る處にのみ赴き、殆ど詩賦と云ふものは全くなかつた。是が僕の俳句を始めるまでの詩賦に於ける標準と嗜好とである。然るに右觀山翁の長女が正岡氏へ嫁がれて一男子を擧げられた、夫が卽ち子規子である。而して其子規子から僕は前述の如く俳句上の敎化を受けたので、僕が詩賦上に於ける標準と嗜好とは遂に一大變更を來たして、是までの標準は全く文學以外のものであると云ふことを合點した。して見ると、祖父に鑄込まれた詩賦ト理窟的の頭を更に孫に依りて改鑄を受け、且つ祖父に依りて養成せられた文字の力が更に孫の前に別樣の發達を遂げたのである。なんと一の因緣談ではあるまいか。尤も右觀山翁は僕等の如き後生に向てこそ倫理道德的の詩賦を奬勵されたれ、自己の作品は今よゝ見ると文學的のものが頗る多い。決して僕の如き徹頭徹尾理窟的の漢詩ではない。蓋し翁は經世家であつた故後生少年に對しては務めて浮華輕佻を戒めて實用實行を勸められた。其結果として詩賦をも道德養成の方便に轉用せられたのであらう。而して文學的の作は、緖餘の技として自己のみ娛み、人には態と敎授せられなかつたのであらう。右の如く觀山翁は漢學上普く諸科に通じ、殊に詩文は文學的の趣味をも兼ね有して居られたのであるから、子規子が今日の才德技藝も一は遺傳性に出たと云つて好い。且つ遺傳性がある上に人も知る如く非常の忍耐と勉强と又抱負を有して居られる。是れ今日の成功を致した所以である。僕等の如き同鄕人に在つては一面に之を畏敬すると共に、又一面には我が土地の名產として愛し且誇らねばならぬ。併し子規子の性癖は己れと異なるものを容るゝの量に乏しい。是は些細の問題に對しても同樣で、少しの假借もない。僕が俳句上時々衝突して喧嘩に近き爭ひをしたと云ふも全く此場合である。又嘗て其論說上日蓮上人を非常に稱歎せられたこ

とがあつたが、子規子自己が夙に文學上の日蓮を以て期せられて居たので、彼法師が二句の憎まれ口に類した論鋒は子規子も亦平生文學諸方面へ用捨なく與へられて居るやうである。併しつくづく考へると、子規子は其實文學一邊の人ではない。隨分機會があらば政事經濟又は社會等の方面に雄飛せんとの大野心があるかも知れぬ。否、時々幾微を洩らされたことがある。又今日でも時事世態等に就て隨分技癢に堪へぬが如き評論が出る。畢竟子規子は多方面に慾望のある人なので、又之に應ずる夫々の準備が出來る人なのである。夫が僅に俳句專門（其他和歌新體詩小說等もあるが）の師表として世上にもてはやされ、又後世に傳へらるゝのだと云ふことは自己に取りては頗る不滿足なのである。喰ひ足らぬのである。嗚呼天は何故に子規子に病氣を與へて斯くも志業を妨げ、之に充分の滿足をなさしめぬのである歟。傍人であつてさへ遺憾悲憤に堪へぬ。況て子規子自己に於てをや、實に想像に忍びぬのである。併し子規子今日の事業は殆ど皆發病以後の拮据になつたもので、卽ち病氣療養の片手間であると云はゞ何人も之に驚かぬものはなからう。

追懷雜記

○子規居士は美と同郷で、又美が漢學の師大原觀山翁の外孫で、旁々緣故の淺からぬ間柄であつた、此事は既に

詩は祖父に俳句は孫に春の風　破蕉

と十七文字を綴つて、居士から「春の風」では何の事か少しく分らぬと笑はれたこともある。

○僕と居士とは年齡では二十年違ふので、居士が幼少の時の事は一切知らぬ。僕が同鄕の友人に藤野漸氏といふは卽ち古白氏の父で、此人の妻女は居士の叔母であつたから、藤野家宴會の時などに一族の子供が集つて居た其中には定めて居士の幼顏も目に觸れたであらう。が神ならぬ身の、他日の大文學者殊に僕のお師匠樣が居ることは知る筈もなく、何の氣もつかなかつた。

○僕は明治十三年東京に移つたが、同十八年松山の書生がよく漢詩の添削を乞ひに來ることがあつて、居士も其中の一人であつた。流石に居士の作は縱橫奔放才氣が溢れて居て八島懷古の長篇などは別して働いて居たので僕も始て注意することゝなつた。又此才氣は劣つて居たが文字は居士より練れて居る一人があつた。それは竹村黃塔氏で、卽ち碧梧桐氏の兄人である。

○明治二十年舊藩主久松家より同鄕書生の爲め常盤會寄宿舍といふを建てられ、其監督は服部嘉陳氏といつて藤野古白氏の伯父であつた。そこで居士も此寄宿舍に入ることゝなつたが、時々服部の娘に文章軌範の講釋をして居たのを僕も服部訪問の際傍聽して、如何にも明辯で條理がよく立つて居るのに驚歎した。

○明治二十二年には僕が服部氏に代つて右寄宿舍を管理することゝなつたので、居士とも朝夕に出合ひ段々と心易くなつた居士は少しも身形を構はぬ方で、寒い時などは松山木綿のゴツ〳〵した綿入を重ねて脊中をまん圓く

ふくらかし、ゴヨリ〳〵とふるまつて居た。且入湯嫌ひだから色は小白い方であつたのに垢はいつも付いて居て、隨分むさくるしい風體であつた。のみならず、起縛將張に背いて兎角蒲團を敷き流しにすることが多く、其周圍はいつも反古が山の如く堆くなつて居るので一室三人詰の八疊敷を居士に三分の二まで占領せられ、他の同室生は片隅に小さくなつて居らねばならぬ次第となる。夫故時々苦情が出て僕から居士へ忠告したこともあつたが、又一面には居士のやうな驗足は多少自由を與へねば伸びぬといふことも僕は知つて居るので、内々は同情々寄せねばならず、つまり監督の職分上双方より板挾みの苦みを受けたことである。

○此頃舍中に茶話會といふものがあつて、舍生思ひ〳〵の演説をして居たが、居士のがいつも趣味ある文學問題で、且辯舌も一番勝れて居た。餘の舍生のは多く理學問題や政治法律などであつたが、其時になると居士はいつも欠びをして居た。

○或る時居士は一枚の番附を作り、舍中人々の演説題だと稱して各姓名の上に居士自選の題目を記入したものが出來たが、其實は人々の月旦評なものでありし、それを明言せず各自の演説題とした處は人の怒りを招かぬ用心、一種の狡猾手段である。中央行司の座は内藤南塘先生で、其上に「雅中の俗々中の雅」とあつた。此月旦は實によく當はまつて居る。僕は終身半雅半俗の間を彷徨して居るので、後年にも度々此事を言ひ出して居士と笑つた。而して番附の勸進元は居士自身で、題目は「ボール」とばかり記して居た。平生の抱負を隱してヒヨウゲて居る處中々横着者であつた。尤も其頃ベースボールなども適分好きで勉强して居たのは事實だ。

○又舍生から監督場に對して意見を申出ることがある。其時は大抵居士が總代で、少しも忌憚なく主張するので時としては僕の癪に障はることもあつた。一日居士より僕が舍主に對して說諭の口上があまり冗長であるから成るべく簡短にして貰いたいとの申出もあつた。是は恐らく夫子自らの請求で、瑣々たる通俗的理窟をだまつて聞いて居るのが面倒であつたからのことであらう。呵々。

○居士の咯血は卽ち此年で、夜中吐き通したといふことで、翌朝それを聞いたから僕も見舞つたが常の如く平然と構へて居た。尤も前夜は自らも不治の病に罹かつたことを知つたので悲憤交々至り、遂に啼血といふ因みよりほとゝぎす若干句を作つて、それから子規の號を得たのである。

○此前後居士は餘多の號を持つて居たが、其内に盜化盜花の二つがある。盜化は造化の秘を盜むの意で哲學的の事に用ひ、盜花は藻芗の妙を盜むの意で文學的の事業に用ひて居るといつて居た。是れで當時居士が双手に此の兩學を究めやうと期して居た志も見える。が、不幸にして不治の病に罹つたので文學の一方のみを專攻し、哲學の方は斷念してしまつたのである。殊に後年は殆ど哲理嫌ひといふ程で、文學と關係ある美學さへ調べるのがいやだといつて、叔父子の加藤恒忠氏が態々佛國から送つた「ハルトマン」の原書さへ少々計り讀んで拋つてしまつたと、或時自らいつて居たこともある。

○居士が俳句に就ての來歷は居士自身も又同人諸氏も既に度々語つて居るから省せぬ。卽ち此常盤會寄宿舍が其發端地なので、五百木飄亭新海非風藤野古白の諸氏と頻りに遣つて居たのが服部監督の頃より僕の監督時代へ引

續いてのことである。而して僕は此頃未だ此仲間入をする氣にならなかつた。唯居士が水戸紀行と七草集とは批評したことがあつた。

○此年の冬頃竹村黄塔氏が入舍したので、遂に氏と居士と僕と三人で文字の友垣を結ぶことになつた。それからといふものは一層居士と親密になつて、毎日曜には小集をするか、又は野外の散歩に出掛けるのを例として、散歩の途中はおもに滑稽的の連句を作つた。其連句は漢詩めいたのもあり、又七五調の和文もある此外出合つた度に出來た漢詩や俳句等を集めて互に回評をしたものを言志集と名づけて十冊ばかりになつたが今以て僕の手許に存して居る。是れは翌廿三年の冬頃までの事である。連句の風は

今夜復聯句　（南塘）　椚筆費工夫　（松窓）　苦吟無言行　（子親）　親交忘形娛　（南）
麥湯沸々煮　（松）　鹽鮭徐々屠　（子）　奇語互競吐　（南）　妙篇不嫌模　（松）
船山跣足逃　（子）　李白降參呼　（南）　筆力亦烈矣　（松）　胃量何洪乎　（子）
佳作笑中就　（南）　美味腹内徂　（松）　詩仙傾冷酒　（子）　病子戀暖爐　（南）
如喧又如靜　（松）　似賢或似愚　（子）　坐豈知其久　（南）　人應謂之迂　（松）
談與首共捻　（子）　才學身既枯　（南）　無暗勿勞腦　（松）　威張欲鬚　（子）

雖然御暖之　（松）　頭剛小斯迂　（子）　左樣御屋隅　（子）

といふやうなので、何の價値もないものだが唯今昔の感までに一首を掲出して見た。南塘は僕、松窓は黄塔氏の舊號である。又俳句といつた處で僕のは一番物になつて居なかつたが、居士もまだ隨分ひどいのがある。一興まで に少々示さう。

春よりも嬉し小春の歸り咲　子規
菊も菜の色に咲きたる小春哉　同
賤が家に置くも笑ふや福壽草　同
春風をかたちに見せる柳哉　同

○二十三年の末居士は退舍した。是れは大學の修行を止めて愈文學一遍に從事しやうといふ準備なので、此後僕と居士との交遊は益々頻數になつた。それは監督と被監督者との間柄ではあまり親密にすると他の舍生のおもはくもあるから自然控かへ目にして居たが、モーこれからは天下晴れての、道樂交際が出來るやうになつたからである。

○僕が居士の誘掖に依つて眞に俳句に志したのはまだ是から一年後即ち二十五年春頃のことである。此頃末は既にホトヽギス二卷十號「碧子の俳句評釋」といふ僕の文中に述て置いた右にも云つた如く。僕も段々俳句の趣味が分かりかけて來たので頗る熱心になつた。居士と日光行や武州高尾行をして居士に紀行の出來たのは此年の末

である。

○吾々運座の口切りは翌二十六年一月の事で、其頃居士は伊藤松宇氏と懇意になり、其誘引で石山桂山氏の宅へ行き、片山桃雨森猿男石井得中諸氏と共に運座をして、其夜は夜通し遣つたとの事、それから直き僕の所へ來て昨夜は斯く〳〵で運座は極めて面白いものだとの話し、そこで僕も興が動いて遂に右松宇氏等の仲間入をすることになつた。此一團は推の友と稱して居て、其後俳諧といふ機關雜誌を發行したが、一向に賣れぬので書肆の拒絶に逢ひ、殘念ながら二號限りで廢止した。其頃吾々の俳句が世間へ對する勢力の如何に微弱であつたかは此一事でも知れる。

○其後は此仲間の頭數も段々と多くなつて、五百木驅亭藤野古白氏が加つたのみならず、土居藪鶯二宮素香孤松の兄弟櫻井靜堂の諸氏も這入る、又大野洒竹藤井紫影田岡爛腸の諸氏も前後仲間となつた。此頃は少くとも一月一回若くは二回各人の宅で輪番に會した。其上飛入りの人もあつたので中々盛んに又各々熱心であつた。

○今日に行つて居る運座で銘々の句を箋に誌め狀袋へ入れて廻し合ふ方法は此頃藪鶯氏が牛込の宗匠岡本半翠氏の運座へ出席して見て來たのが起因で、右の法は半翠氏門の發明ださうで、夫故袋組と自ら稱して居た。僕も藪鶯氏に連れられて此袋組へ出席したこともある。此外同人中にも隨分舊派俳家の運座へ出掛けることもあつて居士も上根岸岡倉某老人の運坐へ出て、頗る高點を得たと笑つての話しもあつた。

○若し居士が存命老人の法を居らずして一人の名聲者を定め其批評に依て勝敗を決するの事(見ぶて居る。)を衆評に付することに改めたのは松宇氏等の推の友であるとの事。又運座以前の我々仲間はどんな風にして居たかといふに、單に題を定めて各々それを作り、作り了れば又題を出す、一題に就ては一句づゝとすることもあり、又何句でも作り次第と定めることもある、其各人の句を便宜紙に認めて置て、それを一坐が回評して好いとか惡いとかいつて居たばかり。又せり吟といふのは或る時間を定めて其時間に一題若くは數題を作れるだけ作り、其最澤山作り得た人が誇り顔をするといふ位の事に止つたのである。今の席上の一題十句とか又は宿題十句集を隔地へ廻送して互に評をするといふやうなことは遙か後年に始まつた事なのだ。

○斯くする内にも居士は抱負が抱負である故獨り潛心に俳句を研究し、年一年に自得の境を得たのである。尤も居士とても最初は殆ど月並的の句も作り、進んで眞の俳句を作り出した曉も、着想が兎角纖細に傾き雄大の作が出來ぬに困ると自らもいつて、態と大の字を入れた句を餘多連ねて見たりしてそれを練習した事もある。且主觀的の句は其頃殆ど嫌ひで作らない。作るのは概ね客觀的の句で、其爲め同人一般も之に倣つて矢張客觀的の句を尙んで居た。尤も居士が我々仲間との交際は聊かも大將顏をするでもなく、席上で先生々々といはるゝのは却て老人だけに僕の事であつたのだけれども、自然の力量は爭はれぬ者で、年齡や履歷の如何に拘はらず、衆人が暗に居士を以て中心點として何事もそれに引き廻はされて居たやうだ。

○居士が俳句の類題と各家々集の編纂に着手したのはなんでも廿三四年の頃で、是れは日課として居て、如何な

る多忙疲勞の日も決して缺かさず、或は夜遲く歸宅することがあつても是非從事し、夜の二時三時までも起きて居ることは珍しからぬとの事。其他此事件を調べて見やうとか〻樣な句を作らうとか思ひ付いた時は、徹夜しても必ず果さねば止まぬので、昨夜も又徹夜して調べ物をしたとの話しは毎度の事となり、什舞には僕等もフン左樣かといつて、居士の事としては別段驚かぬやうになつた。

○明治廿五年日本新聞に關係したのが居士が文字を以て世上へ打つて出た初陣で、遂に此堅塁に據つて此の如き事業を仕遂げたのであるから、所謂日本派俳句の稱も勿論其新聞から來たのであるが、此名稱を始めて唱へたのは岡野知十氏である。知十氏は始終居士と交際はなかつたやうだがいつも居士を推奬し、居士を公平に批評し、又居士及我同人の俳風を世間に紹介することに務めて居た。故に居士も知十氏の或る論評に對しては中々穿つて居る知己だといつて我々に話したこともある。

○知己といへば居士終身の恩人は陸羯南氏であらう。先づ日本新聞に招聘して、未だ居士が若年であつたにも拘はらず特にそれを優待し、又新聞の第一面を割て俳風表出の地を與へられたことなどは誰れも知る所であるが、其他居士が家計に注意しそれを隣家に引き寄せて親戚も及ばぬ世話をなし、就中日清戰爭從軍前後の配慮、又發病後の療養に至るまで非常なる保護を加へ、十數年の久しき間いつも間接直接に庇蔭を與へられて居たのである。是れは吾々同人は長く心に銘記し、私には親友居士の大恩人とし、公には斯道興隆の援助者として大いに之を謝

○又居士が出身した帝大學修業中の學塾はもゝに舊藩主久松家の下賜せられた所で、此恩誼も實に大なることである。然るに中途廢學したので一時は多少如何の議を來たした人もあつたらうが、遂に後年此の如き大樹立をなして名聲藉甚、世人をして松山に個樣な人もあつたかと驚かしめた上は、居士が舊主に對し奉るの報効は是れて十分に盡したといつて宜しい。

○明治三十年頃に至つては居士が聲望幷俳風の勢力も愈々隆盛を致したので、居士が自信や抱負も隨て一層大なることになつた。これと同時に僕が居士との交遊上は自然前日ほどに頻數ならぬやうになり行いた。其譯は僕は從來おもに俗人の生活をなして居て、俳句はホンの一時の娛樂に過ぎぬといふきめで居たのであるから、居士の文學も未だ小範圍に在つた頃は總て臭味が合つて居たけれども、段々居士は專門家の地歩を占め、文學も社會の爲めに貢献するといふことになつては其勢僕等ばかりに合はしては居られぬ。折々故人の足を腹上に加へしむることはあつても常には儼然として俳國へ君臨せねばならぬのだ。のみならず、碧梧桐虚子兩氏の如き人々が鄕里より出で來つて、居士薫陶の下に長足の大進歩をなし、居士が左右に立つて相共に俳國を開拓經營するといふことになつたので、僕等に其勢ひ上自ら羊裘を着て釣を垂れねばならぬ位地となつてしまつた。

○それでも碧虚二氏が一旦のやうに變調を主張し、根底より俳句を改革しやうと勇往した頃などは、僕も隨分居士の前に二氏と厲しい議論をしたこともあつたが、居士は双方をなだめ、且僕に向つては俳事進運の前途は是非少壯者に託して種々の研究を試みしめねばならぬことを說き、莞爾として二氏が爲る所を見て居られた。

○明治三十一年ホトヽギスが東京に移つたのは居士が第二の成業の紀元で、愈々此機關に依つて羽翼を四方に展ばしたことがある。此ホトヽギスは最初松山で柳原極堂氏が獨力を以て居士俳風の普及の爲めに始めた所であつたが、地方での發行は兎角不便が多いので虚子氏と打合せて遂に東京へ移すことゝなつた。尤も當時虚子氏は素漢貧の一書生であつたのだから其實居士も大に危ぶみ、此一事は我を死地に陷れるのであるとまで云つて居た。が、虚子氏は鋭意に主張し、資金萬端一身の責任として引受けてとう〳〵今日の如き立派な雜誌を打ち立てた。併し愈々石を遣るとなつたは、居士が盡力提撕したことは非常なもので、其内容は勿論外形まで絶えず新趣味を出だし新工夫を凝らし、讀者が倦きないで知らずの間に斯道に歸向するやう計らひ、愈々斯道を全國に普及せしめた。且世間の文學雜誌までが往々其體裁萬端を模倣することになつたのも自ある者は知つて居よう。

○此ホトヽギス移轉發行と俱に僕も又々俳國に還俗せねばならぬことゝなり、其片隅で椅子の一脚を貰つた。するといつの間にか僕も俳事を以前の如く一己の獨樂とばかり極めて居ることも出來ず、いでや世間の才子達と一軍して見ようといふ氣にもなり、年寄の冷水を飲んで喘ぎ〳〵今以て遣つて居る次第である。

○或時芝居役者の比擬をして、差向親玉の團州は子規君、左團次のテキハキして居る處は碧梧桐、しまつた中に艶氣のあるのは菊五郎で虚子君、そこで僕は丁度モーぼれの來て時々ファー〳〵聲を出す芝翫か、それがまた借越なら駄洒落の方面から喜知六でもあらうなどといつて大笑をしたこともある。

○藥高砂屋麻耶が露伴君で物あらう等又美男の方面から紅緑君は岩井半四郎では如何であらうか。「母ばかり古い役者の贔負する」と川柳でいつた通り、役者の話しでも鳴雪のは二十年も以前の景況の外知らない。呵々。

○拙居士の人物は事業と共に次第〳〵に大立物となり、世間の尊重も益々加はり、學者文士の訪問出入する者日夜絶え間ない位になつた。されども僕は舊交でもあり年長者でもある處から、文字問題の外は居士が僕に對する恭遜辭讓の態度は始終一貫していつも變はらなかつた。尤も文字の議論になると居士も中〳〵傲然と構へ僕を睥睨して來る。僕も所謂莫逆でどんなことをいつても構はぬと思ふから蟷斧を揮つて抵抗する。居士も激する、僕も激する、隨分長時間啾々して鶯横町通行人の足を止めたことも少なからぬ。けれども、少々時刻が立つとモー互に霽月光風。唯少し殘つて居る感じは言ひ過ぎて氣毒なことをしたといふ一點位だ。然るに三十二年の秋であつたか、或る夜蕪村輪講中雁の別れの感じといふことに就き互に衝突して非常な激論になつたことがある。其翌朝居士から書簡が到達した。

拜啓今夜散會の後内の者申候には「外の人ならまだしもの事内藤先生へあつかむやうな言葉甚だよろしからず」といたくたしなめられ候に付て驚きかしてみ謹て御詫申上候次第に御座候私事生來癇癪强く候處病氣以來殊に劇敷相成自分にては可成押へる積りなれど他人より見れば常に圭角を露はす事に可有之候加之當夜も例の如く發熱中にて發熱の苦痛紛れに大聲を發し思はずあつかみつけるやうに相成候事と存じ候自分は一切夢中にて何も存不申候へども自分に分らずとて失禮の段は罪逭るべきにあらず如何に發熱中とは云へ先生へ對して侵した

る無禮は偏に御海容を祈る外無御座候今後を謹み可申候右御わび迄如此候謹言

九月二十二日輪講當夜認

鳴雪先生函丈　　常規

追伸近來私より虚子其他に對して頻に義務（無論俗界の方面）の怠慢を責め候事有之候處へ今夜却て家内の者に氣付られ候に付甚だ大打擊を被りたるやう感じ申候尤私の我儘にして横着な言葉を使ひ候抔は昔よりにて曾て同宿せし友は皆承知致居候それは父親なしにて育ち候故ならんと申者も有之其後は多少謹むつもりなれど實際は無効と相見え今に至つて依然舊態を存居候事慙愧に堪へず候

自　態

蘭の花吾に鄙吝の心あり
蕃椒廣長舌をちぐめけり
十年の狂態今にかゝし哉

僕は箇樣な意外の挨拶を受けて却て驚き、且氣の毒でたまらず、直に返書を出し僕よりも失態を挨拶し且大いに居士を慰めて置いた。此事はホトヽギス三卷一號蕪村句集講義の條中に於て居士が自記にも一寸見えて居る。右如何の事事柄を重ぐ事柄を重ぐ事柄かも知られるも且どこかに又初心であどけなく可哀らしいといふ點も見えるではなしか。

○又三十四年十月伊藤左千夫君が好意の發議が居士を駿州興津邊へ轉地療養せしめたいといひ出し、居士も非常に乘り氣になつて、早やも飛んで行きたいといふ鹽梅、處が碧梧桐虚子氏を始め僕等は第一に途中汽車の動搖、次には往つてから後に病氣が重つた其時醫療や介抱人萬端の不便からまだ取留めの出來る命も取留め得ない殘念があらうといふ心配で、どうしても轉地がさせたくないから代る〳〵留めた。或る夜僕も出掛けて往つて或は人情或は道理、樣々の方面から説いたけれども居士は一切聞き入れない。愈々留めれば愈々激して來るから僕もてあまして、尚徐々に御考なさいといつて歸つた。歸つたけれども甚だ氣になるのは、一體僕の話は平生でも議論張つて居て耳やかましく病苦の居士に感せられて居る處だから、若しや今夜の諫爭が一層居士の反動力を起さしめ、たゞ隨分思ひ留まるのであつたものも決斷を早めて愈々往つてしまひはせぬかと思ひ出し、どうも氣になつてならぬ、遂に一書を發して縷々挨拶をして、若し是で興津行をせらるゝと僕が議論で激成したごとゝなり、居士を誤つた僕が罪は居士のみならず他人へも申譯がなく、僕は自身の立場がないやうになるとの意までいつて遣つた。すると返簡に、

拜啓昨夜は又例の暴言を發し後悔一方ならず今朝御詫狀差上可申と存候處に却て御手紙に接し恐縮之至候來客謝絶の件は私の心持丁度曾子易簀と同じやうに存候曾子は簀に對して心を安んぜず私は客に對して心を安んぜ

すと申す事に御座候私は轉居の方に定めて此上は叔父の認可不認可によつて決定可仕候若し興津へ參り候はゞ御高話を聽くことも難出來其代り例の暴言を吐て御わび狀を出すやうの事もなかるべく候わざと簡單に御返事旁々御わび迄一書差上候御厚意の程は十分銘肝罷在候謹言

十月五日　　常規

内藤老先生玉几下

文中に來客絶謝とあるは、居士は興津行を以て來客を避くるの一手段だとし、此地に居て客を門前拂ひにするには何分忍びぬといひ、僕は來客は元々好意で來るのだから、病苦に障はるといふ譯で之を斷るのに聊か心配は入らぬと辯じた、其件である。此件に就き居士が曾子の易簀に比したのは、つまり僕等が說は恰も曾元の父を愛するの情と同樣で、姑息である、居士自身はどこまでも「得正而斃焉」といふ君子の操を執つて居る、といふことをほのめかしたので、其興津行の當否は兎も角、居士が自信と地步を占めて居る處とは此手紙でも明確で、大いに畏敬すべき點である。

又文中の叔父はは加藤恒忠氏なので、氏は既に興津行反對論者であるから、此人の意見に任かすといふのは思ひ止まつたといふのも同樣だから、僕もそれで安心したのである。

○居士は一體理性に富んで居たと共に感情も非常に强い。且文學的趣味は居士朝夕の業務で又其娛樂であるからきで、人に對して二言三言モー勃窣たる理窟談となる。故に居士の病床では十分此邊に注意し自ら戒めて居るは居るけれども、何か問題になると直ぐ議論になる、居士も健康時の分は又此方面も隨分好物で散々僕と遣つたのだけれども、病苦の進むに隨ひ自然とモー厭ふ鹽梅で、殊に僕が癖の高聲は頗る居士の耳を苦めるとのことで、僕の屢々居士を見舞ふのは善し惡しゝで僕自身も段々と斟酌をして來た。今一つは居士の美德として飽くまで長者を尊敬し、如何なる苦悶中でも僕が往くと忽ち態度を改め、忍んでも相當の應接をするといふことで、一例を擧ぐれば、蕪村輪講に往つた時でも、濟み際になると居士が苦悶の聲ながら「酒があろうがな、なぜ先生にお上げんのぞ」と、母人などに注意するといふ仕合せ。だから、しまひには僕はあまり度々見舞はぬ方が却つて病氣の爲めだとの氣もつき、自然遠ざかるやうなことにもなつた

○病床六尺で僕等のホトゝギスの選句や選者吟を居士が攻擊したから、僕も病氣の慰め旁からかつて答辯をした處が、居士は今一度再駁して見たいと思つて居たらしく、一九月十日の蕪村輪講は居士が水腫を發し一層の苦悶で中途から殆んど無言であつたにも拘はらず、輪講が濟むと直きに右の問題に移り、「西の京」を西京卽京都のことだと答辯したけれども、現在奈良の一部を西の京といふ故「の」の字を加へては其方になつてしまつて、京都とは聞こえまいといふこと、又「京都の西部」を「右京大夫」といつたのは太祇の句に類似の詞があつて手柄でないといふこと、などであつて、一々尤な再駁であつた。其言葉も吐息をついでよう〳〵切れ〳〵に出る位で、如何にも

苦しさうであつたから、僕は成程さうだとばかりで成るべく居士に物を言はせぬことにし、兎角して暇乞を述べて歸つて來た。嗚呼「西の京」「右京太夫」是れが居士と最終の議論、又言葉の聞き納めであつた。

ホトヽギス六卷一號のはじめに

本誌第五卷までは子規子といふ統督者があつたに此卷からはそれが居ない。頗る索寞悲颯の感に堪へない。が、よく思ふと、子規子は決して死なぬ。死んだのは身體であつて、其精神は依然として存して居る。それは何處にか、卽ち四方太君の身體である。碧梧桐君の身體である。虛子君の身體である。紅綠君の身體である。乃至我が同人一般の身體である。蓋し子規子が既往十數年來斯の道斯の事業に熱心盡瘁したことは今更喋々を要せぬ。何人も驚歎懾服した所である。斯かる熱心なる精神がなんで身體と共に消散しやう、必らず永刼未代事業の存する所に存せなければならぬ。而して斯の事業を繼續して居るものは諸君ではないか、さすれば子規子の精神は存して諸君の身體にあるといふことに何も怪しいことはない。よしや諸君がそれを否やだといつても子規子の方から離れぬから仕方がない。追つ拂へば遣つて來る。逃げれば附いて來る。而して朝々暮々時々刻々一文を草すれば之を親和せしめて、其精神の存在を安固にせねば止むまい。而して斯の事業をして益々振起發達せしめ千歲に光輝あらしめねば止むまい。昔し耶蘇基督は其身を十字架に懸けられても中々死ないで、其精神を十二使徒及び其他の人々の上に復活せしめ、以て益々其宗教を發達擴張し、遂に今日の隆盛を致したではないか。今や諸君は子規子の事業の繼續者であつて、卽ち彼の十二使徒の位地に在るのである。前途の望みは洋々として太平洋の如し、何も索寞悲颯を歎ずるには及ばぬ。嗚呼子規子は生きて居る、生きて此ホトヽギス第六卷の統督者となつて居る。

虛子君の連句論

虛子君の連句論はホトヽギス八卷一號の附錄を以て發表されたが併せて拙著「俳句獨習」中の說にも論難を賜はつて居る。就てはこゝ一番大いに答辯もし又連句論をも批評すべきであるが、僕の目下の境遇は何分諸書を涉獵して數日の思考を盡くし因て長文を草するといふやうな暇がないから、殘念ながら唯個條書體を以て其要點丈を述べて、聊か君に告ぐることゝした。

○先づ君が選定せられたる連句の名稱、是れは極めて至當である。自今我が同人は一般に遵奉せずばなるまい。

○君の此論の出たのは僕に在つては最喜ぶ所である。なぜなれば、彼の子規居士の或問及び僕の「俳句獨習」の連句說の如きは、其主意專ら連句が古來文學界の一物と看做され、殊に俳界中では其王者の如く押し立てられて居たのを不當だと思ひ、之を擊退して彼と俳句との位地を判明せんと望んだのであるから、其勢連句の短所を擧ぐるに偏することを免れなかつた。就ては連句にして若し少しでも文學上の生命が殘つて居るならば、又一面には公平眼を以てそれを救ひ取らねばならぬ譯である。而して今や君は其救ひ取りの役を擔當されて、僕等が至らざる所を補はれた次第であるから、僕は何條喜ばずに居られやう。泉下の子規居士も定めて莞爾として笑はれて居ることであらう。

○併し僕も右を喜ぶと同時に、又君の說に對して多少の意見がないでもない。隨て又それを告げねばならぬ。是れ君の勞に酬ふる所以であるからだ。

○盧子君が連句論は大要二端に分かれて居る。

（甲）連句の全體が文學として價値ありとせられ、尙進んで此二句を獨立せしめんとせらるゝこと。

（乙）連句中の二句宛が文學として價値ありとせらるゝこと。

○右の二問題は君が說中判然と區別があつて、（甲）に認められた文學上の價値と（乙）に認められた文學上の價

○連句の全體が文學として價値ありとの理由は、主として變化を巧にして人に面白味を與たふるといふにあるやうだ

○此說明は所々に散見するけれども、重もには十八葉上欄四行目から十九葉上欄廿行目までにあるやうで、概ね空論よりは實物を說き、殊に譬喩を以て人の認識せんことを望まれて居る。

○第一の譬喩は、神武天皇武內宿禰安部仲麻呂紫式部及び承久の亂四條河原のお國歌舞伎函館の戰遼陽の戰等を同一地上に羅列せしめ、それを觀たのが一卷の連句だといはれて居る。僕を以て考ふるに、此の如き局面は成程變化は變化である。けれども君がいはるゝ如く時間を徹し空間を徹してあるのだから、個々の人物個々の事件、いづれも肝心の歷史の續きと立場の關係とを沒却して居る。故に唯譯もなく儼めしき姿閑雅なる容歌管の聲叫喚の響などが此處にも立ち彼處にも現はれたといふのみで、耳は駭き眼は眩するであらうけれども、さらばとて其意味上に相互の關係を解し、統一を認め、而して纏まつた詩感を吾人に與ふるといふことは出來ぬ。蓋し文學といふものは從來種々の異說はあらうけれども、歸する所は一の纏まつた詩感を人に與ふべく構成せねばならぬ。然るに連句の觀が以上譬喩の如きものであつては、一の纏まつた詩感を構成することが出來ぬから、隨て君が望まるゝ如く文學上の價値を認むることが出來まい。卽ち文學の作品とすることが出來まい。

○第二の譬喩は、連句一卷は植物學に於ける草木の橫斷面を觀たやうなものであるとせられ、而して植物學に斯樣の品物を有する上は文學上にも連句の如き品物を容るゝことを許すべきであるといはる。然るに植物學は智識

の研究に屬する科學であるから、研究上如何に無趣味にして不統一なる品物をも製作し集收することがあるべきだが、文學は詩感を歌ふものである上は唯漫然として眼口鼻も分らぬやうな品物を容受することは出來ぬ。殊に右の横斷面と雖も一本の草一本の木であるから矢張個物としての關係は保持して居て、膚理もあり中心點もあり一の統一體たることは認め得らるゝのである。決して君がいはるゝ秩序もなく一貫もせぬ彼の連句一卷とは比されぬ。若し强ひて似た物を求めば各種の草木の横斷面を一束してそれが連句だといふが好からう而して此の如きものは植物の研究にも不用である。(比較する場合の外) 況んや文學に於てをや。故に此譬喩も君が望まるゝ如く文學上連句の價値を認むることが出來まい。

○此外君は廿葉下欄十二行目に於て、畫室中變化の巧を盡して陳列された數幅の圖畫を以て連句一卷に譬喩して居らるゝ。是れは前の横斷面よりは頗る趣味上に訴へて類似の點が多い。けれども、左すれば愈々以て君は連句一卷を以て纏まつた吾人の詩感を構成されぬものと自證されるのである。なせなれば、數幅の圖畫は個々互の間には毫も意味的の關係がなく、其變化の巧を盡すといふも單に陳列上の變化を指していふのであるから、畫室陳列の變化が畫具物の變化でないといひ得ると同時に、それに譬喩されたる連句一卷排列の變化も亦詩其物の變化でなく、單に各種の詩の排列の變化に過ぎぬといひ得る。意味は內容だ。排列は外形だ。外形ばかりの無意味なもので、なんで纏まつた吾人の詩感が構成されやう。是れが其自證といつた所以である。尤も連句中二句宛の關係は卽ち意味の關係であつて、一圖畫の三幅位にやゝ似て遠い雅の畫でも歌の歌風を持つて行く作用のあるのも、畫室の全部連句の一卷に對しては何等意味上の統一となり得ぬことは勿論である。

○又君は十一葉上欄十九行目十二葉上欄十行目等に於て、二句宛相互の關係を解釋さるゝ場合に、其前の句は忘れてしまふのだと敎へて居らるゝ。

斯樣に一句宛前を前をと忘れて行く結果は、連句中最首の二句と最尾の二句との外は各句互に忘られてしまふことになる。互に忘られてしまつた連句の各句が一卷に通じて意味を有せぬのは勿論のことで、意味がなければ詩感が構成されぬ。而して是れも君の自證である。

○併し箇程の理窟が虛子君に分かつて居ぬ筈はない。分かつて居て猶連句の全體を以て文學上の物だとし文學上の價値ありといはるゝのは何故である歟。斯く問うて來て、傍ら連句論中所々の消息を窺つて見ると、最早左の如く推定する外はない。

虛子君は一般の人が認めて居る如き一の纏まつた詩感を與ふる文字を文學の作品とするの外、更に一の纏まつた詩感を與へざる或る文字をも文學の作品とせらるゝので、換言すれば、君は文學の作品てふものゝ定義を擴張して、(第一種) 一の纏まつた詩感を與ふる文字、(第二種) 一の纏まつた詩感を與へざる或る文字の二種を包含すべし、と新たに規定されたのである。

○此說の當否は暫く後に讓り、して見れば虛子君と僕等とは最初より文學の作品てふものゝ定義が違つて居たの

で、僕等は元來纏まつた詩感を與ふる文字を文學作品唯一の資格と心得、それに據て連句を批判したのであるから、其結果は此の如くめちや〳〵に連句を攻擊し打潰したのである。處が君は之に反して別に（第二種）の資格を文學作品の上に追加し、それに據て連句を復活せしめんとせられつゝあるのである。

○左すれば君の主張は今回新に起つた問題であつて、僕等が最前の說とは聊かも關係を持つて居ぬ。卽ち肝心の的が違つて居る。のみならず君と雖も僕等の如く（第一種）の資格のみに據て連句を批判されたならば、矢張僕等の如く連句をめちや〳〵に攻擊し打潰されねばなるまい。少くとも僕等が攻擊し打潰したのに異議を挿まるゝことは出來まい。

○拙又君が新定の（第二種）資格に就ては如何と考ふるに、成程君が譬喩に取られたる畫室に在つても、それが巧を盡して圖畫を陳列する時は、個々別意味の畫だとはいへ、其陳列の變化は人をして面白く感せしむるに相違ない。然らば連句一卷が巧を盡して句を排列する時は、個々別意味の句だとはいへ、其排列の變化は人をして面白く感せしむる譯である。否、僕等も實際連句を讀めば面白いのである。左すれば此陳列排列といふことも一種の技藝であつて、研究もすべく、製作もすべく、又其研究製作した事物は各々關係して居る畫ならば美術、詩ならば文學に屬せしめて好からう。就ては連句を以て虛子君が文學の作品だと唱へらるゝことも左程突飛な言とも思はれぬ。

這あるものを一緒に文學の作品といふのは卽ち此旨趣に負くものである。就ては連句の方は自今文學の附屬作品とか又は文學の準作品とかいつて區別して貰いたい。斯くいふと君はそれでは連句の品位が下がつて聞えると怒らるゝかも知れぬけれど、元來連句の價値（二句宛獨立の場合は別段）と他の文學作品とは性質も相違し、又文學に於ける本末主從の差もあることであるから、さうさう僭上はさゝれぬのである。なせなれば、前にも述べた如く、畫室は唯陳列の變化を技倆とするのみで、畫其物と關係がないと同樣、連句一卷も唯排列を技倆とするのみで、詩其物と關係がないのだから（二句宛の關係は別段）詩を主とする文學に對しては到底彼は主たり此は從たることは免かれぬ。而してそれを如何に新定の意義が加はつたからとて同一名稱でなくてはならぬといふのは僭上ではあるまいか。況んや紛はしくないといふことも一の要件であるをや。虛子君と雖もまさか詩的と非詩的との兩主君を文學國に擁立せねばならぬとまで思はるゝでもあるまい。

○以上で僕が君の（甲）の問題に對する賛否の程度は略ぼ告げ了はつた。而して是れだけでは君が連句を押し立てられる力も文學上に於て左程効果を奏して居ぬやうである。さらば連句論は總て斯樣な薄弱な主張かといふに否々決して然らず。連句論の大主張は（乙）の問題の方に在る。殊に其二句宛を獨立せしめんといはるゝ處に在るのだ。此說こそ虛子君の一大創見で、獨り僕の注意を喚起したのみならず、一般に我が同人をして連句に向て眼を注がしめ、隨て之を研究し製作せんと思ひ立たしめたのである

○僕等の連句攻擊は連句一卷を通じたものへ向つての攻擊で、それを文學の正作品（君の第二種品と區別して正

といふ）に混合せしめまいとの目的であつたから（古來混合して居たから）自然連句の部分たる二句宛の關係などは輕視して居た。其輕視の結果は主として元祿以外に於て多き無趣味の附方、卽ち子規居士が「兩首の間に同一の上半句若しくは下半句を有するのみ」といはれた如き附方のみを、全體攻擊の序に攻擊して置いたので、其他君が今回擧示された如き有趣味の附方には眼を及ぼさなかつたのである。而して今回擧示された兩歌仙では唯繪歌仙の十二句ノ十三句との附方に湯屋の膏藥と干葉との如き一部關係のものがあるのみで、其他は君が解釋に依つて概ね兩句の間に全部關係が認め得らるゝ。（一々論じたら多少の異同はあらんも）斯かる全部關係として有趣味なる附方を提出された上は、僕が最前他の連句の沒趣味なる附方に向けた矢は、君の陣に對しては忽ち刎ね返つて、僕の方へアベコベに中つたことである。敗北々々。

○併し僕等が本意たる連句一卷を文學の正作品でないといふことは君もそれを爭はれぬ所の自證が前述の如くである上は、此二句宛附方に對する枝葉攻擊の敗北は僕少しも恨みはない。のみならず、自今僕も此（乙）の問題に就いては君に賛成して共々御味方をする心得である。

○そこで君が此（乙）の問題たる連句二句宛を以て文學として價値ありとせらるゝ其理由は如何といふに、主として一事の兩面を關係的に面白く言ひ表はし和歌にも俳句にも絶えてない一種特別の性質を具して居るといふにあるやうだ。

○兎角に有ゆる觀多は實形實現の迫倉よりも得られたもので、論よりも證據、其通りの實物が多々あるのだ尤も從來は發句と脇句との附方のみは他の諸句の附方と異にして特に和歌の上の句と下の句との如くするものだとの說もあるが、虛子君は總て最首より最尾まで附方は同じものと看做されて居るやうだ。而して是れも實物を證しての說である

○兎角君の此（乙）問題の說は僕も概ね賛成である。唯斯樣な二句宛の關係の趣味が如何程に僕を感せしむるかと自省するに、恐らくは虛子君が感せらるゝ程には面白く思はぬかも知れぬ。それは自分で發見し自分で主張せらるゝ其人と、それを聞いて今より咀嚼しつゝある傍人との差である。

○僕が文字鎖りの譬喩に就き君は丁寧に辯駁されたが、前にもいふ如く、一部附方の沒趣味なるものを攻擊する爲めの譬喩だから、今回擧示された如き有趣味なる附方に對して當てはまらぬのは勿論である。但し僕が總てを攻擊する如き言葉であつたのは恐縮の外なし。又此譬喩に最相似たる聯珠吟を敎へられたのは多謝。

○返すがゝも君が二句獨立論には實に敬服する。連句論では是れが餘論になつて居るやうだが、（四十葉上欄二十行目）此二句獨立論こそ本論の大骨子なれ。

○又連句論を讀んで最も感ずるのは、君の行文の妙、殊に譬喩を縱橫に取り來つて人を鼓舞作興さるゝ處に在る。就中十八葉下欄の時の流れが知るべからざる過去より云々一段の如き、變幻奇怪人をして唯恍惚として其境に接觸するかの感あらしむ。要するに君の論は往々詩的手段を以て意思を人に訴て居らるゝやうだ。併し詩であり感

興であるから、冷靜に考ふると論理上には透徹せぬやうな點も見える。卽ち（甲）の問題にはそれが多い。是れ所謂長所の短所といふものであらう。

○終りに臨んで一言するのは、君が爲めに謀るに今後は連句論をせらるゝに方つて斷然（甲）の問題を割愛し打ち捨てられ、單に（乙）の問題、殊に二句獨立論を極力主張せらるゝ方が得策であらうと思ふ。連句の一卷を玩ぶの勸誘の如きは必ずしも文學の作品として押し立てずとも濟む譯である。文學作品の名を得たからとて連句それ以下の趣味に落ることはない。寧ろ（乙）の主張と共に此の如きものを併せて主張せらるゝは、恰も平治の亂に義朝が信賴と相並で大將となつた如く甚だ荷厄介となるであらう。僕は君が旗幟の精明を望むの心よりして甚だ口惜しく思ふのである。

附言　虛子君は拙著「俳句獨習」に就ては「活動之日本」に於ても別に論難せられた事項が多々あるから是れも他日多少の御答辯を申上ぐる心得である。

俳句の俳の字

だけれども僕も少々意見を云つて見やう。俳諧は最初誹諧と書いたので、ソレは「古今集」の誹諧歌とあるに基づくと云ふのだが、誹は誹俳は俳で全く別字である。然るに俳諧と書けばソレはどこまでも誤謬と云はねばならぬ。一の辯護者は、誹諧歌の誹は「隋書」の侯伯傳（陸爽の附傳）に好爲誹諧雜說とあるに倣つたものだと云ふけれども、俳句に俳の字を用ひたるは史記の滑稽傳にも見ゆるのみならず、同じ「隋書」でも經籍志には俳句文集とあり又唐書鄭綮傳にも其語多俳諧とあるのだから、是等より見ても誹諧は稀有の字面と云はねばならぬ。其稀有の字面を「古今集」が態々搜し出してソレに倣つたと云ふのは如何にも窮した說である。又一の辯護者は俳と誹とは古音が通じて居たらうと云ふのであるが、俳は佳の韻、誹の微の韻、此兩韻が隋唐頃混同して使用されて居たと云ふは未だ聞かぬ事實だ。殊に日本の延喜年間に正當の俳の字あるにも拘はらず態々誹の字を通音として使用したと云ふは愈々以て有り得まじき事柄である。又辯護でなく打ち破る說の側では、言扁の草體は人扁に似て居るから同一視して誹と書いたのだらうと云ふのもあるが、勅を奉じて撰修もする程の紀貫之等がマサカ後世御家流の祐筆輩の如く文盲な字畫違ひをする筈はない。或は貫之等以後の誤字だとせんにも門系傳授を重んずる和歌者流の書籍、殊に其寶典たる「古今集」に就て中途斯かる疎忽があらうとも思はれぬ。況して文字の本家たる支那の「隋書」に人扁と同一視して言扁に書くが如き文盲は斷々乎としてあるべきでない。然らば何故に誹諧と云ふ字面が個樣に存在して居るかと云ふに、今一つ說がある。ソレは俳諧の諧が言扁だから其筆移りでツヒ

く誹となつたらうと云ふのである。是れは一寸頓狂な說だが、比較的理ありとして僕は此說に左袒する。ナゼなれば筆移りと云ふは全く不用意の過失だ、不用意の過失は如何なる人如何なる場合にも免れぬことで、「古今集」は勿論「隋書」と雖もソレがあつたとして聊か不思議はない。蓋し同じ人間が書く同じ文字の關係は同じ過失を東西暗合して犯すと云ふことは有り得べき事柄なのだ。尙此外にも支那の書で「世說新語補」の註文にも誹諧の字面があると云ふが、是れ以て同じ譯合である。要するに誹諧の字面に關する推斷は先づ此位の處で差置いて好からう。而してドッチ途俳諧と云ふことに誹諧と書くのは誤謬と見るが妥當である。然るに聞けば貞德系の俳人は今日と雖も猶誹諧の字を固執して居るとやら、ソレは何共以て驚く次第だ。又芭蕉系の方は如何と云ふに支考が「十論」に芭蕉家の書法には人扁の俳諧を用ふべしと云つて居れど、翁が生前嚴しき監督の下に出來た「猿蓑」の其角の序に麗々と誹諧と書いてある上は、支考も餘り威張つた口は利けまい。一體蕉翁を始め其門人達も文字上に於ては多くは暗く若くは無頓着であつたやうに思はれる。其一例は是れも「猿蓑」に

むざんやな甲の下のきりぐす　芭蕉

冑を甲と書く俗習に陷てソレで安心して居る處を見ても思ひ半に過ぎるではないか。此連中が「古今集」以來の誹諧の字面に疑ひを挿まぬのは固より當然である。併し流石支考は議論家丈に舊習を破つて人扁を主張した丈は多とすべきである。

レニ準じて此說も立たぬことはなからう。併し此場合は其音もハイカイでなくてヒカイとなるから、隨て吾々俳人も誹人となつて誹會を催し誹句を作るのであるが、ナンダカ小人仲間の仕事らしくも聞えるから、先づ此案は撤去するのが吾々の爲めであらう。呵々。

芭蕉と能樂

近來碧梧桐君や虛子君は能樂に熱心で、自ら脇方を勸めらるゝ位だが、俳句と能樂とは多少趣味の通ふ處でもあるか元祖の芭蕉翁も隨分能樂には嗜好があつたやうに思はれる。僕が嘗て翁の句集の評釋をした時目に留まつたもの丈でも左の通り。

毘沙門堂の花盛四天王の榮花もこれにはいかでまさるべきうへなる黑谷下河原むかし遍昭僧正

のうき世をいとひし花頂山わしのみやまの花の色枯にし鶴の林まで思ひしられてあはれ也

觀音の甍見やりつはなの雲

はやこなたへといふ露の葉のやどはうれたくとも袖をかたしきておとまりあれやたび人

旅人と我名よばれん初時雨

右前句の前書きは「西行櫻」、後句の前書きは「梅ヶ枝」、いづれも謠ひの文章を其儘取つてある。個様に當坐の卽興とてし自在に引用することの出來るは、常々ソレを口に謠つて暗記して居た證據だ。

みちのくの一見の桑門同行二人那須のしのはらを尋てなを殺生石見んといそぎ侍るほどに雨降出ければ先此處にとゞまり候

落來るや高久の宿のほとゝきす

是れは謠ひの文章ではなく、其眞似をして一寸戯れたのだが、翁の面目が躍然とあらはれて居て可笑い。

花のかけ謠に似たる寢旅かな

扇にて酒酌むかげやちる櫻

コンな句も平生能樂に趣味を持つて居たから思ひ寄せることが出來たのだ。尙又一證は翁が能樂師と交際して居たことで、

古將監か古實を語りて

月やその鉢の木の日の下おもて

本間主馬か亭にまねかれしに太夫か家名を稱して

本間主馬か宅に髑骨共の笛鼓をかまへて能する所を畫て舞臺の壁に掛たり誠に生前の戯なとか

此遊ひに異らんやかの髑髏を枕として終に夢うつゝをわかさる者も只此生前を示さるゝもの也

いなづまやかほの處がすゝきの穗

右將監も本間主馬も其頃の能樂師である。前書きを見ると中々親密の間柄でありさうで、或る時は彼れに先生も一番お附けなさいと云はれ、サラばと紙子の膝に扇を構へた扇の姿勢なども目に浮ぶやうだ。

宗因の俳句は多く謠ひのもぢりだから、談林の盛時には苟も俳句を作れば謠ひの文句を知つて居ねばならぬと云ふ傾向があつたに相違なく、蕉翁も自然ソレに靡かれた處もあらうが、今一つは翁が少年時分藤堂家に仕へて居て、當時の大名大臣は專ら能樂を玩んだから、其御相手としても高砂や位は學んで居ねばならぬ筈だ。兎角翁が能樂に嗜好のあつたことは以上で略ぼ推知せらるゝのである。

電車の飛び乘り

電車の進行を始めて後飛び乘りをするは規則の禁ずる所であるけれども實際は黙許されて居る、ソコデ其飛び乘

りをする樣を車中から見て居ると人物に依つて感じの違ふのが一寸可笑しい。先づ股引紺繩で突つかけ草履の職人肌が飛び乘るのは、實に意氣で江戸ッ兒輕捷の態度を現はして居る。パナマ帽背廣服の八字髯がシガーを銜へながら靴を一列ね列ねて飛びつくのは、同じ輕捷は輕捷でも巴里倫敦の都人はカウだと云はぬ許りの顏つきが甚だ憎い。又例の赤毛布をはをり大荷物小荷物を肩に引つ掛けた田舍者が、此電車に乘り後れては永劫未代乘ることは出來ぬと云ふ考へで、鬼界が島の俊寛然と取り縋るのを見ると如何にも惻怛の心が生じて自分も手を出して助けたくなる。之に反して同じ旅人でも剛謾さうな田紳や地方の代議士辯護士風の人物が車掌ナゼ止めぬぞと云はぬばかりに其威張り返つた容體をして乘るのは、殆ど突き落してもやりたいやうだ。軍人の飛び乘つてサーベルの憂として鳴るのは實に勇ましいもので是でこそ旅順の堅壘も乘り取れたのだと尊敬する。又袈裟衣の出家の身が喘ぎ〳〵馳せ來て縋りつくのは最も見苦しい。是れでは衆生濟度の弘誓の舟を棹さすことも覺束ないやうだ。五十六十の婆樣のよろぼひながら乘らうとするのもあるが、年甲斐もない今少し落ついて居て次のを待てば好いと思はれる。又若い女で殊に美人なのが長い袖をひらつかせ駒下駄をカラ〳〵と鳴らして來て、チヨット待つて頂戴と飛びつくのは如何にも婀娜で、ソレを危ぶないと抱へる車掌さへも嬉しさうである。が、同じ美人でも蝦茶式部となると、平素體操の修練コヽだと云ふ振りで、乙鳥の翩たる景致は好からぬにもあらねど、他日此人を愛するに夫の生涯を想像するとナンダか少し淋しさうな感じがする。

狂詩半可山人集

我が邦の狂詩と稱するのは明和の頃彼の狂歌で有名なる江戸の蜀山人が寐惚の別號を以て作つたのを先づ開祖と云つて好からう。當時太平無事に困む人情は狂歌と共に非常にソレを歡迎し、所々に風を聞いて起る先生達を出したが就中京都の銅脈と云ふが名を博し、其集太平樂府は寐惚先生集と共に最も世に賞讃せられ且兩人間にも交際があつたと見え、其唱和集と云ふものも出版された。是れが先づ當時狂詩の兩大關であらう。尙今一人大阪に天所と云ふがあつて、浪華獅子と稱する狂詩集を出し、三大都會と云ふ關係上寐惚銅脈と鼎足の位地を取る積りであつたらしいが、此人の名は存外世に知られずに濟んだ。蓋し稍々後起のやうでもあるし、その諸作亦兩大關の糟粕に近いから、世人の注目を引かなかつたのも無理でない。僕は嘗てこの浪華獅子も見たが、「裏兼表」と云ふ題で、

木火土金水。立春大吉門。天王太平樂。古今同一言。

と云ふのがある。成程此二十の文字は左右字畫が同一で、（隸書以上で云ふ）裏から見ても表から見ても同じ樣に讀めるのだ。是れ固より趣味には乏しいが、一寸奇拔で人の頤を解く處は先づ狂詩中異色あるものと云つて好か

ら う。

ソコで詩趣と云へば、當時流行の狂詩なるものを通觀するに、如何にも滑稽で、輕口で、一讀すれば隨分可笑しく噴き出すやうなのもあつて、半日の消閑には適當な玩物であるが、サラば狂詩と云ふから果して漢詩との關係は如何と云ふに、纔かに五言七言の字數は並べてあれど、其措辭は概ね無法散漫なる俗語で、俗語を強ひて字數へあてはめたと云ふばかり、漢詩たる組織漢詩たる格調は先づないと云つて好い。卽ち唯五言七言の詩形を借りたる洒落の一口噺に過ぎぬのである。此風は兩大關の寐惚銅脈先生既に然りだから、其他の末輩は云ふまでもなかつたのだ。

サラば眞に狂詩の狂詩たる作者は遂になかつたかと云ふに、否らず、半可山人は卽ち其人である。此人も固より寐惚等の風を聞て起つた後輩で、集中で見れば寐惚の門弟かとも思はるゝやうだが、其狂詩の品位に至つては全く出藍で、縱橫の才力、溢るゝ如き滑稽、之に十分なる漢詩の素養を持ち來つて居るから、其取材と云ひ格調と云ひ、夐かに師の上に出で、且古今の狂詩諸家一般の壘を摩して居る。慶應年間僕は友人が此集を持つて居るのを始めて見て、此の如き絕妙なる狂詩もありしよと驚喜し、直ちに寫し取つて反復愛誦して居たが、同時に又寐惚銅脈等が名聲の嘖々たるに拘はらず、此半可山人の奇才は何故世に聞えぬかと、ソレが不平でたまらなかつた然るに明治十年に至り成島柳北氏が花月新誌と云ふを發行し、朝野新聞以外に絢爛の詩文を世に示すことゝなり、

けて天日を見るが如く、半可山人の爲め千歲の屈を伸べた上に、僕も亦世に一大知己を得た感がした。而して此半可山人集は世に知られなかつた爲め、其版本は極めて乏しいので、僕は明治十三年東京へ出た後は、絕えずソレを各書肆に尋ねた結果、今日までに二部丈手に入れた。而して其一部は福田靜處氏に與へ、一部は自から秘藏して居る。因つて此談話の序に其古今體若干首を拔萃して諸君の鑑賞を乞はうと思つたに、生憎他へ貸したものか手元に見えぬ。左に掲ぐるものは辛うじて記臆に探つたので、元と十一首だけれども完全に覺えて居るのは一半しかない。且此十一首に限り或る狂詩集へも採取されて居たやうだから、存外遠東の冢かも知れぬが、

忠臣藏初段

當社造營全事終。萬民如レ草太平風。新田乍レ敵清和末。足利將軍尊氏公。奉納誰爭五枚冑。代參共仰八幡宮。唯因二桃井能堪忍一。師直運强還御中。

同二段

管領屋形馳走儀。判官使者人來時。娘傳二口上一胸頻踊。母押二脊中一療未レ披。短慮何思奥方歎。誓言難レ背主人詞。本藏心底全如レ此。切落椽先松一枝。

同四段

檢使悠々切腹場。判官覺悟既尋常。無紋請見最期式。羽織休レ嘲當世長。不二獨御臺迫一悲歎一。並居諸

士共愁傷。祇當下早渡二屋敷一去上。何用更迎二討手一防。

同六段

三十可レ憐成不レ成。勘平切腹奈何情。賣レ身長使二女房一苦上。殺レ舅誰言天道明。金爲二石碑一難二用立一。
疵非二鐵砲一始疑晴。應知武運未二全盡一。連判新加一味名。

同八段

浮世誰言飛鳥川。淵飜成レ瀬々成レ淵。大津未レ泊土山雨。薩埵猶迷富士煙。浪々住家犀何在。遙々旅路
母爲連。上京如使二祝言整一。行末何違妹背縁。

他の狂詩は兎角俗語が勝つて居るに反し、是れは俗語と漢語とを錯綜して最も加減が好い。他の狂詩は散漫なる洒落の一口噺たるに反し、是れは句々漢詩的の組織で且格調を持つて居る。他の狂詩は今體五七言に於ても平仄メチヤ〳〵なるに反し、是れは一々法則を守つて居る。他の狂詩は押韵にも無理がありコヂつけ讀みがあるに反し、是れは韵脚皆振つて且穩妥である。殊に此各句の文字は皆忠臣藏十一段中の文句にソレゾレ根據を有して居て、一語も苟もせぬと云ふに至つては、何等の巧思ぞ、何等の才力ぞ、唯驚くの外はない。諸君若し忠臣藏の丸本を一閲せられて置いて此諸律を讀まれたなら、眉一層其味の深かるべきを保證するのである。而して右は忠臣藏の詠だから比較的眞面目な叙事叙情であるが、中には祈介怪(引)とか友人の女郎を連れて駈落した者に寄する獨れす雪不雪梅の身狂なるに反應して益々其格調の高きを覺ゆる位である。

之を要すに狂詩は元來最も作り難いもので、單に漢詩の造詣があるのみで滑稽の才を缺かんか、格調組織は整つても狂趣味がない。又單に滑稽の才あるのみで漢詩の造詣に不足あらんか、狂趣味は唯無法散漫なる洒落の一口噺になつてしまふのである。而して此兩面の資格を兼ね備へたのが半可山人の成功した所以、又一面のみを有して他の一面を缺いだのが古今多くの狂詩家の失敗に終つた所以である。

寢惚先生本名太田南畝は漢字もあり漢詩の心得もあつたに相違ないが、其狂詩の上より觀察すると其造詣は迚も半可山人と競べものでない。銅脈天所に至つては猶ソレより以下であることは勿論だ。

半可山人は未だ其本名を聞いて居ぬが、集中に江戸から京都へ勤番に往く事などもあるから、矢張太田と同じく幕府の御家人邊であつたらうと思はれる。

失考の正誤

僕が「芦蕉俳句評釋」夏の部、

鼓子花の短夜眠る晝間哉

の解釋に就き中山稻青氏は「浮城」第五號に於て、

「鼓子花はッヽミ草で、小さい白い花のさく草」とある。「ッヽミ草」とはどう云ふ字を書くのであらう。若し鼓草とすれは蒲公英の一名で春季に屬して居る。旁々變だ。鼓子花は云ふまでもなく晝顔である。恐らく評者も一時の感違ひに相違ない云云

と申された。右は全く御察しの通り一時の感違ひである。が、解釋の砌りは鼠骨氏に對しシカツベらしく講義する氏はソレを筆記する。氏も訝らず、僕も疑はず、眞面目な顔二つ、若し側に稻青氏其人が居たら如何に笑止であつたらうと、今更汗背の至りである。且世間へ頒布された書物で或は後世を惑はす恐れもあるが、誤りが誤りで餘りに淺薄だから、大抵誰も一笑して看過されることであらうと思ふ。此外稻青氏が該評釋に與へられたる批評は數十條もあつて、僕の考への到らぬ處を指導開發された事も少くない。イヅレ機會を待つて此等も披露する積りであるが、今は最も大失錯、否殆ど滑稽な一條を報じて置く。

右に就て思ひ出したが、モー十年も前の事で、愛媛縣の某氏より句評を乞はれた中に紫金牛と云ふことがよみ込んであつたが、僕はソレが分からず、矢張牛の種類であらうと、其積りで加筆して返して置いた。處が一年も立つて後或る新聞紙を讀み行く內、紫金牛の振り假名にオモトとしてあつたので、ビックリ仰天。俄に最前の加筆が懸念を生じ、若し吼えるとか起つて歩むとか云つて置きはしなかつたらうか、幸に動植物イヅレにも通ずる文

以てするのである。

ソレカラ又一つ、「ホトヽギス」第八卷一號「蕪村遺稿講義」

篠かけや露に聲あるかけはづし

此篠かけの解釋に就き安田木母庵氏より、

鳴雪氏の「篠かけ」は「すゞかけて」で、例の山伏の胸に懸て居るもの(中略)篠がけは前にも後にも丸い房々したものが附いて居る云云と云はれたが、貞丈雜記に記する所は丸で違ふやうだ。

と云つて「貞丈雜記」の文を引かけて、すゞかけと云ふ物は袈裟の事にあらず、衣の名であると云ふ例證を明瞭に示された。勿論僕は此事を知らないから袈裟と解した譯であるが。尙「言海」を見るに、

すゝかけ、修驗者ノ服ノ上ニ被フ衣、麻ニテ作ル、深山ニ入レバ篠茂レルガ故ニ其露ヲ防グモノナリト云フ(俗誤リテ袈裟ノ名トス)

とある。而して句中かけはづしと云ふのは矢張袈裟に適するやうにも思へど、右「言海」に露を防ぐ爲めの衣としてある上は、蕪村も其關係より此露の句に採取したものであるから、到底木母庵氏の是正に從はねばならぬ。而して同時に僕等は「言海」の所謂俗人となつたのは甚だ標致の惡い次第である。呵々。

正誤の正誤

前回の此雜話中「失考の正誤」と云ふ條に紫金牛をオモトとして置いたのは又候誤りで、アレはヤブカウジであつた。思ひ違ひも斯う度々では可笑味さへなくなる。紫金牛めはよく〳〵僕に崇り居ると見える。今回右に關して教示を煩はされたのは福原雨六松田竹嶺及鹿蹄生の諸氏で深く感謝する所である。

歴史の俳句

我が古い日記を閲し、我が子供時分のお玩具書籍などに接する時は、自ら一種特別の感がする。是れ何が故であるか、我が昔がなつかしいのである。久しく旅に住んで居て適々郷里に歸る時は、山川草木乃至人類牛馬雞犬までも、之に接して自ら一種特別の感がする。是れ何が故であるか、我は昔の住地がなつかしいのである。或は其

なか、我が父母主君に關係ある土地がなつかしいのである、而してソレは土地に限らず、父母主君の事蹟を聞く

としても亦同じ感がする。尚右より一歩を擴げて、我が父母主君の祖先に關係ある土地や事蹟に對する時は如何と云ふに、矢張一種特別の感がして、而してソレも我が父母主君の祖先の昔がなつかしいのである。左すれば尚大いに右を推し擴げて、我が同國民乃至我が同人類の住する土地の過去の變迁や我が同國民乃至我が同人類の祖先が遭遇したる過去の出來事、即ち治亂盛衰等の事蹟に對する時、矢張一種特別の感がして、而してソレがなつかしみを持つと云ふことも、聊か不思議はない。隨つて夫等の時代々々の制度文物もなつかしい。言語文法もなつかしい。且其なつかしいのは必ずしも善惡得失大小輕重等に拘はるのでなく、單に其昔がなつかしいのである昔とは實に奇妙なものである哉。けれど、吾人一生の昔が善惡得失大小輕重等に拘はるのでなくしてなつかしいと云ふことを中心點として、ソレより段々と圏を擴げて行つてコヽへ歸したのであるから、此感即ち此なつかしみは人間性情の自然的傾向にして且吾人共通のものであるのだ。若しも昔がなつかしからぬと云ふ人あらば、ソレは何かの事情に抑制されて人間性情の一部を失つたものと見る外はない。

右の如き昔のなつかしみは即ち文學藝術に於ける歴史美の生命を托する根本である。尤も汎く歴史美と云へば、卓越奇異なる人物や出來事其他種々なる思想風俗等を偉とし珍とし、(此感は現代に於ても同じ事)又は今昔の異同を對照する上などより、更に趣味を感ずる點もあるべきだが、是等を除き去つて赤裸々としても、猶一種特別の感は殘存するのである。此感の殘存する證據は即ち前に云つた自己のむかしをなつかしむと云ふ點より、ソレ

を推し擴げて行けば、何人も自覺さるゝであらうと思ふ。

して見れば、我が俳句に於ても汎く歴史美を採取して資料と爲すべきは勿論、歴史美生命の根本たる昔のなつかしみと云ふ人間性情の自然的傾向に就ても、大いに研究玩味して且ソレを汎き歴史美と共に利用すべきである。即ち古き事蹟を其儘に叙すること、古き事蹟を轉化し飜案すること、古き事蹟の俤をほのめかすこと、其他古き時代の思想を假り、古き時代の言語文法を使用する等、あらゆる手段方法を盡くして此歴史美方面の趣味をも發揮し利用せねばならぬのである。若しも此方面を捨てゝ顧みざることあらば、それこそ人間性情の一部に達せずあたら句作の好資料を放棄するの笑ひを取つて、我が俳人の不面目である。

併しコゝに一言して置くべきは、詩賦は創作を尚ぶと云ふ點より、自ら斬新を競ひ陳腐を嫌ふことになる。陳腐を嫌ふの餘り、或は昔とか歴史典故とか云へば、何となく古臭い即ち陳腐だと感ずる者があるかも知れぬが、是れ非常なる疎見である。元々斬新と陳腐とは材料の固有性でない。今一の材料あらんに、未だ一度も使用されぬ時は之を斬新と云ふ。既に屢々且同じやうに使用さるゝ時は之を陳腐と云ふ。即ち斬新と陳腐とは材料に由つて分かるゝに非ず、其使用上に於て定まるものたることは明瞭でないか。就ては今日現在の事物に於て斬新の外陳腐もあると同時に、古い歴史典故に於て陳腐の外斬新もあるべきは、爭ふべからざる道理又事實でないか。隨つて其斬新なるものを擇取することは創作に何等の障礙なきのみならず、寧ろ資料を豐富にする譯だと云ふことも合

点て資料を求むることを知らぬ人がありとせば、ソレは俳人として甚だ手抜けである。疎見と云ふ譏りのみではない。

或は又歴史典故は其書籍などに通ずる一部の人の解するのみで、全般の人には感じを與へぬことゝなる。故に俳句の資料とするには適當せぬと云ふ人あらんか、左らば其全般とは如何なる範圍を以て云ふか、無學無識なる平民連でも合點し易き言語や書物を採取する所の俳句には、既に月並家と云ふがある。而して吾人は從來彼等以上の立ち場に立つて句作しつゝあるのである。詞を更へて云はゞ、即ち學者的俳句を作つて居る者である。專門的俳句を作つて居る者である。就ては吾人たる者は同好相助けて互に智識を交換し、知らざる事物はドコまでも知り、解せざる味はドコまでも解して行かねばならぬ。單に既往の智識に止まつて其範圍内に句作せんとするは臭屈も亦甚しい。且假りに範圍を立つることゝしても、ソレは中學の學力を標準とすべきか、高等學校の學力を標準とすべきか、帝國大學の學力を標準とすべきか、人々の學歴異なるほど其智識も樣々であるに、ソレへ一定の範圍を立つることは元々不可能の事である。左れば吾人が句作の心得は、各々自己に知つた限りの資料を以て遺酌なくソレを歌ひ出すことである。而して同一智識の者は即座に解るすであらう。智識足らざる者は質して後に解するであらう。又質すを面倒と思ふ者は解せずにしまふであらう。何も同人の總てに解されねば俳句が成り立たぬと云ふでもなく、同人の總てが解するを待つて始て名句となるべき理窟もない。だが、成り丈は互に討論質問して智識の範圍を弘むべき等、ソコが學者的專門的俳句を作る者の度量であつて、又月並家と吾人との區別さ

るゝ一要件であるのだ。尙一歩を進めて云はゞ、全般に知らぬ事件を一人が唱ふれば、其唱へた事件は同時に又全般の智識となるべきである。此の如くにして各々が他の知らぬ事件を提出してこそ、同人全般の知識は絶えず弘まるのであれ。之に反して全般に通せぬと云ふを絆柄として歴史典故を排斥せんとする者あらば、ソレは自棄と云はんか臭屈と云はんか、僕は名くる辭を知らぬのである。

夢

今立つて居るのは幅一尺に足らぬ道、右と左は底知れぬ斷崖、見おろすと目が暈ふ、足も身體もブル〳〵と震へる、ナゼコンな處へ來たのか、コレからドッちへ行かうか、歩るくと直きに石が轉がる、土が崩れる、ア、、モー踏み外づした、身體がフワリ、スウーと落ちて行く、氣持の惡るさ、ひやいさ、……目が覺めても胸先がドキ〳〵〳〵。

敵は雲衝く如き大男、長刀を眞向にかざして來た、モー死物狂ひだ、防げる丈防がう、ヤ、、ナゼコンナに腕がすくむのか、チッとも刀が揮へぬ、齒痒い、悔しい、仕舞つた、肩先へ切り込まれた、總身が冷や〳〵するが存上つて見やう、甘まい、存外身體が高く上つた、木の枝へでも取りつきたい、ヤ、、又落ち下る、足が狼の口へ屆きさうだ、耐まらぬ、又少し飛び上がれた、又落ちて來た、苦しい、せつない、ウムーと唸ると、あなた〳〵と呼び起すのは細君の聲。

小便がひりたい、洩るやうだ。耐へられぬ、儘ヨ、コ、は疊の上だけれども窃に遣つゝけやう、エ、、生憎く人の足音がする、ソンならコ、へ來れば庭だ、コレならゆつくりひれる、ひつても〳〵も出ぬ、ナゼであらう、下腹は益々脹つて來た、もどかしい、もどかしい、……、ア、夢であつたか、先づ蒲團を濡らさずに濟んでお目出たう。

言志集

本月は子規忌に相當して例會の催しもあつた爲め、自然故人の偲ばしく、關係書類を取り出した中に言志集と云ふが九冊あつた。是れは子規氏と竹村黄塔氏（碧梧桐氏の實兄）と僕と三人の韻事を以て出合つた毎回の稿本で、明治廿二年十一月より同廿四年三月に渉る著作なのだ。披閲の際感々として起る今昔の感は我が同人諸君にも告

げたいやうな氣になり、遂に集中の一部分を抜抄し、尙ほ僕か今日の眼からの批評をも加へて左に掲ぐることゝした。要するに其初心さと無邪氣さが少くともお笑い艸になるであらうと思ふ。

南塘　破蕉　僕の稱號。
常規　子規　盜花　は子規氏の稱號
鍛　松窓　其十　は黃塔氏の稱號。

十一月七日夜與竹村正岡二子共賦。用寧靜閣集中詩韻。　南　塘

江湖何處養天眞。性癖由來少所親。時與靑衿品新句。不追紅袖醉芳醇。一觴一詠永今夕。不暖不寒方小春。初月半痕照叢菊。個中況味可吾人。
世道陵遲假衒眞。偶逢知己最相親。才疵已矣吾方萎。詩味勉旃君太醇。汪々　於水。融々和氣與如春。顧憐多少衣冠侶。解此風流無幾人。

十一月初七夜與南塘先生正岡子規共賦。用盤溪集中詩韻。　鍛

笑談握手吐天眞。是主是賓情自親。詞海君先鈎麗藻。道源誰克酌芳醇。窓間老竹月移影。瓶裏狂花坐釀春。當此良宵會佳友。且欣共作太平人。

是レが第一回目の緒上の作だが。子規氏には出來て居ぬ。僕の詩の理窟ッぽく且原稿さ加減は全く俳句の道であ

不爲相公呈一笑。當年淸操與氷爭。却憐形管弄遊戲。寫出攀花折柳情。
果然大士是前身。慾海濟人智慧圓。艶語綺言寓因果。五十四帖盡方便。

讀源語　常　規

紫禁春暖玉玲瓏。曾侍門院立韶風。太液池淸水如鏡。櫻花浸影波潮紅。」遯世靑山黃葉外。芸窓不復抹翠黛。琵湖秋深畫不如。明月落水玉欲碎。」平生經歷說來明。彩筆落處珠璣生。不恠源語五十帖。寫出鏡花水月情。

紫式部　鍛

漫弄新詞品花柳。風情却似泥中藕。秋晴澹月映湖波。夜冷佛燈穿竹牖。一卷果然冠古今。千年宜矣仰山斗。憐他淸女衒才華。聲譽到頭落王後。

僕の岩はのやうな理窟談の上に意匠も古人の糟粕で、且孤平が多く、方便の便が仄用失韻となつてしまつた處なぞ、實にメチヤクチヤだ。流石に子規氏のは才華爛熳で且調も好い。尤も水月の湊合に痕跡の見えるのは僕が監督する舍中に居た傳染であらう。呵々。黃塔氏の詩の穩雅で締まりのある處は前首と共にどこまでも氏の個性が見はれて居る。個性と云へば僕のゴツゴツした處も其個性であつたのだ。

光　氏　と　云　は　ね　ば　下　女　は　合　點　せ　ず　　南　塘

大味晩成桃栗の五年後　同

前のは矢張源語の題、後のは柿の題で、是れが川柳の積りださうな。

持村へまで甘干の續き　鳧（製舊）　常規

甘干にしたし浮世の人心（同）　同

柿の實の火と燃え出て寒さ哉（同）　同

柿の實や嬉しさうなる鴉鳴き　同

澁柿のとり殘されて哀れなり　同

前の三句は舊製であるから、多分三津濱の其戎宗匠の高點でも取つた句であらう。尤も火と燃え出ての句は他日の光明が螢ほど見はれて居る。

源氏物語を讀みて

かねて見し大内山の月影を鴉てる海にうつしてしかな　常規

門外の塞さや如何に夜蕎麥賣　南塘

夜や寒き霜や置くらん犬の聲　同

右二句が僕の初ての俳句。

川柳としても平凡な着想だ。

炭屋まで先づ一走り今朝の雪　鍛

煙筒の空くすぼらす寒さ哉　同

夕暮に紅葉の下を百歩かな　同

北窓の破れ知らずや初時雨　同

大粒の雨は紅葉を一葉づゝ　同

氏のがまだしもやゝ詩的だ。

菊人形

今となりてなせ娼賣るや作り菊　鍛

しぶいのが見所なるに作り菊　同

こゝへ來るとイヤハヤ。

演劇

浮世をば縮めて見せる芝居かな　常規

世の中の世の中見せる芝居かな　同

氏が他日の豹變も亦芝居かな。

積みあまる富士の雪降る都かな　常規

風入れた代り雪見や破れ窓　同

初雪に様まで移す巨燵かな　同

初雪や窓あけてしめあけてしめ　同

雑題次韻

南塘

毎遇佳辰想駟驂。吟遊興到寸陰貪。『先生公事詩千句。童子職銜瓢一擔。輸雪雁翎來越北。洩春梅意動江南、明朝又有與僧約。欲賞紅楓叩古藍。

常規

歳暮作。次船山詩韻。狂體。

如織來車與去驂。狂奔歳晩利何貪。小廁携至券千葉。行商賣過柑半擔。寒氣烈邊此風北。清香發處一枝南。書生々計冬籠策。鹽鮭凝紅菘秀藍。

僕のは第一句が甚だ窮して居るのみあらず、末句の古藍は古き伽藍と云ふ意であらが個樂な熟語はない。第五句も巧を弄して厭味、第六句は陳套、前聯丈が聊か無難かも知れぬ。子規氏のは狂體とは云へ、中々振つて、後聯の押韻は殊に出だ。通篇の語例に反して第七句の冬籠のみ倭習を用ひた處は、後年氏が漢詩の熟語を重んずる風

元日や門松に照る朝日影　同

元日何も思はで暮らしけり　同

即ち明治廿三年の元日だが、新歳と共に大分方角が立つて來た。けれども、

どこ向けて見てもやさしや福壽草　常規

賤が家に置くも笑ふや福壽草　同

まだこんなのも咲きまじつて居る。

書懐。次浦屋雲林先生韻。

子規

繫將生命細如絲。啼血三句號子規。益厭紅塵衣帶積。猶期青史姓名垂。廿年人事幾甘苦。五尺病軀多盛衰。遮莫東風釀春去。且陪諸友共傾巵。

嗚呼愈々子規の號の始まらねばならぬことになつた。此詩は此年二月の集中にあるのだ。詩としての價値は暫く措き、句々皆實際實情で、遂に是れが一生の言志錄となり、又一部の子規小傳ともなつたのである。併し此後と雖も時々は血を吐きつゝ、舍中の運動は勿論、外出遠足等も平氣で遣つて居た。

言志社席上聯句。狂體。

依例催詩會。(南塘)夕刻集此堂。煎餅山程盛。(鍛)爛火月樣光。吐句時爲語。(常規)忘題或成章。

喋喋口塗膏。(塘)兀々肩如岡。話多交洒落。(鍛)席末到亂妨。十時柏木響。(塘)三人聯句忙。菓子盆殆空。(規)手爐火猶强。折骨有何益。(塘)此邊止爲良。(鍛)

是れが發端で、其後は三人で郊外の散歩をする度毎に個樣な聯句とも何ともつかぬものを必ず遺つたことで、長いのは六七十句も續いたのがある。而して又時としては柔いのもある。

千住の驛を立ち出でゝ(子規)共に辿らん雪の道(南塘)玉の檐端に銀の垣(松窓)枯木に花を咲かせつゝ(規)寒さも知らぬ洒落男(塘)行く〳〵笑ひ慰みて(窓)都の方へ歸るなり(規)早や坂本の里近く(塘)上野の鐘のから〳〵と(窓)響きゞ氷る雪空の(規)けしきにいとゞ氣も勇み(塘)玉を蹴立て急ぎ行く(窓)袖なる雪を打ち拂ひ(規)見えも所體も何のその(塘)たゞ麗しき雪にのみ(窓)氣も魂も奪はれて(規)巡査にはたと行き當り(塘)こりや何物と叱られて(窓)消えも入りたき雪の中(規)これも何故風雅故(塘)俗骨ばらのとやかうと(窓)譏るも知らぬそぶりにて(規)のんてのしやあとすましたり(塘)雪は益々降りしきり(窓)行くてもわかぬ根岸村(規)まだ音を立てぬ鶯谷(塘)博物館のこなたより(窓)辿り〳〵て行き給ふ(規)小便せんも手は凍え(塘)何とせん方なくばかり(窓)その儘こらえてのばしけり(規)向ふより來る雪見客(塘)彼れも我等の仲間かと(窓)疑ふ中に雪女郎(規)凄みはあれど愛らしゝ(塘)是れぞ誠の美しき(窓)國の美術の手本哉(規)暫し茶店に腰かけて(塘)煙を吹て眺め見ん(窓)辨天宮は模糊と[illegible](規)山王臺へと急ぎ行く(窓)

抑々これは本郷の(規)炭團の坂の片邊り(塘)具砂の町に住居する(窓)のらくら者に候ふが(規)けふしも梅の花見んと(塘)共に出でしが雪降りて(窓)松の花とぞ眺めける(規)洒落も漸く盡きかけて(塘)話の種もあらばこそ(窓)たゞ一筋に本郷に(規)歸りて夕餉たうべなん(塘)黃昏時の薄明り(窓)湯島の坂を上りつつ(規)靴も氷らん雪の汁(塘)上着に落つる鼻水の(窓)涙と共に打ちまじり(規)一九を泣かす膝栗毛(塘)めでたくこゝに洒落をさむ(窓)

子規氏の發病後も中々元氣であつたことは此(何と名づけて好いものか)一篇を見ても分かる。

二月中監督室に於ての連歌

きさらぎに櫻驚く暑哉盜花
　質屋へ又も寢さす綿入破蕉
春雨に米代急に騰貴して
　見慣れし乞食顏の痩たり其十
月影も淋しく照らす橋の下花蕉
　淀川下る乘り合ひの船十
法師ばら田舍娘と膝並べ花

嬲と書きし文字の譯問ふ　蕉

下宿屋の破窓の下に寒書生　十

相撲の勝負しるす新聞　花

賭事が當つて花見思ひつき　蕉

梅屋敷にて碁打つ折しも　十

同じ折に

夜のふけて興を添へけり梅に月　蕉

さぞ寒からん鶯のいめ　盜花

春風は閨の簾を動かして　其十

乳房含みし赤子泣き止む　蕉

清正の譽れは遠く轟きて　十

雲と水とのはしに富士山　花

ドクトルに不老の藥ねだりけり　蕉

榮耀極めし漢の皇帝　十

ものをいふ花もありけり柳橋　十

かたい親父が閉ぢし通ひ路　花

是れを連歌と稱して居るのも妙だ。又此際三人共號が改まつた。盜花は子規氏で、其文學側の號である。哲學側になると盜花と云つた。破蕉は芭蕉の洒落で僕。其十を子規氏の舊師の其戎の地口でもあるまいが黄塔氏だ。

「地獄の釜の音が聞える」といふ句に

文月の十六夜も早やあけそめて　破蕉

ひそ〳〵と米櫃息子ひき込んで　同

かな山の底を千尋も堀りければ　其十

人の物始て盜む其時は　同

五右衛門の仕置を見れば此世から　鐵面

松山の石手の橋を打ち渡り　非凡

十津川に沈みし人の數知れず　鐵山

まゝ焚かぬ内の曲突火が消えて　盜花

立山の劍の峯を攀ぢ行けば　同

隨分いろ〳〵なことをもして居る。此非凡とあるのは新海正行氏で、後に非風と云つたのは此非凡を氏が筆癖で幅ひろく書く所より、人が非風と讀み違へたのを、自分も面白いと云つて遂に改めてしまつたのだ。恰も四方山人の蜀山人と同一例である。鐵面鐵山は誰だか忘れた。

文　王　　南塘

手握三分二天下。甘爲姜里一囚人。豈期乃子違先志。狂擧叛旗過孟津。
天子聖明臣有罪。昌黎忖度旨深哉。當日黃泉鬼當怒。載將木主陣頭來。
牧野鷹揚暴易暴。血流漂杵慘如何。不圖渭水載歸客。辜負乃公仁德多。
博愛如春養諸老。他年四海大倫淪。誰明遺志致臣節。唯有西山採蕨人。

全く韻を踏んだ論文に外ならぬ。毎首踏落しも鹵莽と云ふべしだ。

林家の細君趙郎と密通し　破蕉
月の梅人力で來る美人あり　同

又しても柳樽の腐つたの。

春風のかをりはいとゞまさるなり柳櫻をくゞり來しかば　鍛
カなく吹くに似たれど春風は柳靡かすものにこそあれ　同

鳥舞はし花笑はすや春の風　同
そつと來て顏を撫でるや春の風　同

文　王

雲のごと從ふ人はありとてもいかで隱さん天津日影を　子規
春風の姿やさしき柳かな　子規
春風の油斷も見えぬ柳かな　同
春風やおとづれそむる風　同
春風や手柄見せけり桃柳　同

血は吐いたが俳句はまだ〳〵こゝ位であつた。

數字前句附　　破蕉

數々に見せたる酒の醉ひさめて
一つのものが一つとなりけり
子の爲めに縫ひ直したる母の衣
一つのものが二つとなりけり

有りがたや二十六夜に見る月は
一つのものが三つとなりけり
人の性仁義禮智と分けくれば
一つのものが四つとなりけり
北條の巧みに分けし攝家衆
一つのものが五つとなりけり
信玄はいつも影武者召し具して
一つのものが六つとなりけり
三角のガラスに透す日の光り
一つのものが七つとなりけり
誅戮は同じことゝて奪ふ國
一つのものが八つとなりけり
細川の紋の星々切り取れば
一つのものが九つとなりけり

三重にまはる帶が二重もまはり兼ね
一つのものが二つとぞなる
化學者が水を分析して見れば
一つのものが三つとぞなる
たひらなる富士の頂近づけば
一つのものが三つとなりけり
渾沌の中に世界が湧き出でゝ
一つのものが四つとなりけり
咽を出る母音も口のあけ樣で
一つのものが五つとぞなる
變るとは知りつゝ袈を振り出せば
一つのものが六つとなりけり
愛惡欲喜怒哀樂と分けくれば

一つのものが七つとぞなる
伏羲氏が易に天下の理をこめて
一つのものが八つとなりける
千年を經れば狐の尾もふえて
一つのものが九つとなる
寫眞をば眼鏡の箱に入れ見れば
二つのものが一つとぞなる
足利の兵が新田に降參し
二つのものが一つとぞなる

清少納言　　南塘

名噪繡腸兼錦心。一篇枕艸使人欽。當日紫姬纔媲美。他年吉叟是知音。簾捲香峰雪遥白。鷄鳴函谷夜猶深。老臥栽荆沽馬骨。果然警句亦千金。

在原業平　　鍛

欲抑權門志不成。天涯放浪老斯生。任他群犬吠虛事。笑受多情薄倖名。

その昔かゝる男もありはらの遊んでばかり暮らすなり平在五中將

狂歌も中々輕い。

明智光秀　　同

ときは今天が下しる五月雨のみだれの糸を猶みだす君

蕨狩り笑ふ後に雉の聲　破蕉

山々の笑ふ谷間に雉の聲　同

笑の字結びであらうが、其不調和さも笑ふべしだ。

書感示竹村正岡二子　　南塘

孔叟當年畏後生。果然今日見諸兄。國言論法一生業。美學究竟千古情。嗟矣英雄已垂老。恨令豎子狂成名。夜窓惆悵且回首。天外奎星欺月明。

僕も大分氣焔を吐いた。此頃黄塔氏は我が國語を論定するの志を起し、子規氏は哲學を止めて專ら美學の研究を思ひ立つて居たからそれを云つたのだ。

紀貫之　　子規

雅流我賞紀朝臣。看得扶桑男子眞。手抹風雲天地感。筆驅雷雨鬼神馴。詞林之下空千載。歌聖以來唯

一人。況又文章別成體。國言紀事至今新。

是れで見ると子規氏も一時は古今集が神樣のやうに貴かつたと見える。

十一月二日遊武州高尾山。山距八王子驛二里餘。溪間幽邃多楓樹。得二律。鍛

山勢西奔連甲東。峰々矗立欲摩穹。千章黃葉埋溪口。十丈飛湍落澗中。雲載蚊龍帶腥氣。林栖虎豹起凄風。岩頭傑閣知何寺。彫桷華楹映日紅。

回首茫々極海東。絕巔眞訝突蒼穹。萬家封邑收鞋底。八國山川開眼中。遺世唯宜嘯清氣。登仙眞欲駕長風。朗吟酌酒未降嶺。擬見虞淵落日紅。

黃塔氏も個樣な場合には覇氣勃々である。扨此抄錄も餘り長くなつて本誌のページも費へたから是れで止めるとゝせう。

明治座伊賀越等の評

僕は近頃芝居道樂が少々再發して本月二十六日も明治座を見物した。因て角壺二氏の向ふを張る譯ではないが、

緑線」の所作事。役者は時藏小團次女寶玉未團太郎團升歌舞其他多くは高島屋門下の人々である。元來此伊賀越

仇討の事實は渡部數馬と云ふが弟某の仇たる河合又五郎と云ふを討つたので、伊賀の上野邊で舊くより賣つて居る仇討事件の印刷物なども此の如く明記してあるのだに、何故か汎く世上に傳說されて且小說本に物された筋では、數馬は其親靱負の仇を復したのだとして居る。隨つて芝居に演ずる淨瑠璃の諸本も矢張此筋を以て書いて居るので、其淨瑠璃本の著名なものでは「伊賀越乘掛合羽」と「伊賀越道中双六」との二種がある。而して「乘掛合羽」は前半に好所があり、「道中双六」は後半に好所があるやうに見えるが、其爲めだか芝居では多く此二種を前後あへませに演ずることゝなつて居る。乃ち今回の芝居も例に依つて二種のあへませで、都合六幕の內二幕は「乘掛合羽」を演じ、三幕は「道中双六」を演じ、一幕は「乘掛合羽」と「道中双六」とを同じ幕中に於てあへませに演じて居るが、取捨配合上別に不都合の點もないやうだ。されど此六幕が總て淨瑠璃物であるに拘はらず、其三幕はチョボを抜いて全く活歷式を用ひ、他の三幕はチョボ丈は存したれと、沼津一幕の外、亦概ね活歷式を用ひて居るのは僕甚だ不賛成である。尤も此の如き事は既に久しき以前よりの傾向で、幕毎にチョボが入り、其他も餘りに時代盡しでは、濃厚に失し且つ實際に遠かり過ぎて、一觀客の厭きが來ると云ふ考へより遂に奇怪なる變的演奏をすることに至つたらしいが、抑々是れが大間違ひである。なせなれば、淨瑠璃物卽ち時代的舊芝居は元々一種の理想的美であつて、必ずしも實際にのみ合はさうとして作爲したものでない。隨つて之を演ずる方式も皆此旨趣に當てはめて、出來て居るのであるから、舊芝居の演奏はどこまでも舊芝居式を用ひねば其美を發揮し

能はぬと云ふことは覩易い道理である。然るに今や其筋は淨瑠璃本の儘で置いて、演奏式丈活歴式に改め、甚しきはチヨボまでを拔き、頭が猿足は虎尾は蛇で候ふと云ふやうなものと爲し、それで調和を感じて改良の實を擧げたと思つて居る、其演者も演者、觀客も觀客、何たる沒曉漢のお揃ひであるか、尙此鵺的演奏の不都合な事例は下に段々分かるであらうが、兎角僕が大間違ひと云つたのは此點である。が、個樣に小言ばかり云つて居ては批評が出來ぬから、先づそれはそれとして、是れより一幕づゝに於ける所感を述べう。一幕と云へば彼の沼津の場は芝居中の芝居物、淨瑠璃物中の淨瑠璃物であつて、久しく世間にも熟知され、現今寄席這入りの書生連でも「燈火の消えしよりあの妙藥をどうがなと」位は背で唸る位だから、流石に此幕丈はチヨボも入り、概ね淨瑠璃本通りに演奏され、殊に斯道の遺老たる時藏が出勤して、近頃珍しい舊芝居を見せて貰つたのは、一日中の大愉快であつた。猶遺憾を云ふと「道中双六」では岡崎の場も沼津の場と匹敵して舊芝居の佳所であるに、今回はそれを演せなかつたことで、是れ莚升の政右衛門では煙草切りが迚も駄目だからと云ふのであらうが、若し時藏を今一幕煩はして幸兵衛を勤めさせ、女寅のお谷小團次の政右衛門とすれば、隨分遣れぬことはない。併しさうなると又座頭たる莚升の顏が潰ぶれるから矢張出來ない相談、且つ僕に於ても高島屋の遺孤の爲めに忍びぬ所である。

序幕靱負屋敷の場（「乘掛合羽」二段目）、此幕はチヨボなし。小半次と左升との使者は僕が遲刻して來た爲め見落

無藥で、莚升の佐々木丹左衛門と並べて優るとも劣らなかつたのは此人として手柄だ。元と此樣切りは淨瑠璃本には刀の背打としてあり、以前は多く其通り演じたものだが、今日は扇子を用ひて、舊芝居式から見ても隨分極端であつた。尤も此方が手奇麗と云へば手奇麗である。又此靱負の扇子のも股五郎の刀のも松を切る時は椽端へ後ろ向きになつて遣つたが、あれは正面に向かねば見榮えがない。今回は舞臺の庭の造りが大分活歴的であつたから自然こんな結果にもなるのであらう。團升の丹左衛門は粧りが白ろ過ぎて仕ぐさまでが爲めに若か〳〵しく見えたのは損だ。今回は圓覺寺の場がないが、彼の場などは殊に今少し矯健で骨節のある方に見せねばなるまい。歌昇の志津馬は頗る神妙に勤めて居た。衣服はまだ少々華手でも好いのだが、活歴的の麻上下でない丈が先づ以て大仕合せ。小團次の澤井股五郎は近來此人の老成上達ではと思つた豫期が餘り大き過ぎたのか聊か物足らぬ感もしたが、他の相手が相手だから其仕にくい處は十分察して遣らねばならぬ。殊に周圍の活歴渦中卓然として獨り時代的地歩を保つて居た處は十分賞美すべきである。幕切殺しの跡で身を地上に偃せて相手の樣子を闇中に窺ひ又身を起して刀を左右へ打揮り、遂に肩に擔いで花道の引込みは大々舊芝居式でゾッとする程嬉しかつた。

二幕目政右衛門屋敷の場（「道中双六」五段目）、此幕はチヨボ丈はあつたやうだが、人々の仕ぐさ萬端が殆ど全く活歴的であつたので、ロク〳〵耳へも入らなかつた。こゝで又々小言を再演するが、一體此政右衛門と云ふは眞面目な武士である。然るにそれがたとひ名分上妻を取替へねばならぬ時宜に至つたにせよ、譯も語らずに突然とお谷を離別し、剩さへ事々しく新妻を娶ると稱して芥子坊主の子供を駕に隱して連れ込み、散々お谷と假親の五

右衛門とを疑はせ、二人の憤恨絶頂に達する頃忽ち本心を明かして二度悔つくりさすると云ふは、是れ何たる惡戯か、何たる無禮か、到底人格論に於ては有り得まじき事柄なのである。されどこゝが卽ち舊芝居的抑揚頓坐なので、お谷と五右衛門との一疑一憤一驚一喜は卽ち觀客の一疑一憤一驚一喜に外ならず、晴天の飛霰、雨後の名月、此中自ら一種の風景興味を伴ひ來るのである。之を知る者は舊芝居を談ずべく、之を知らざる者は舊芝居を談ずべからず。而して此の如き脚色も亦演奏の形式を待つて死活を爲すべきものであるから、古來之が研究の結果としてチョボを始め總ての舊芝居式は出來て居るのであるに、それを捨てゝ態々活歴式に換へ、內容は舊套、外形は新式、此の如き奇態の改良は遂に僕をして鵺的演奏と云はしめたのである。併し鵺の畫にも上手下手はある如く、此の如き演奏に於ても亦巧拙はあるのだ。團升の柘榴武助は柄にはまつた役で、前幕の丹左衛門よりは一等見上げた。荒次郎の宇佐美五右衛門は其怒つて迫き込む時も心釋けて喜ぶ時も今一息と云ふ途端いつも調子が抜けて、やゝ道化じみるのは此人として是非がない。秀調のお谷は顏の粧りが先代其儘で、標致は一等勝つて居る方。仕ぐさは始終愼んで居たれど、花道の出のチョボ「憂きことの思ひの種を身に持つて」を何と聞いたか早や活歴の腹を持つて出て來るのは心得違ひだ。延升の唐木政右衛門は故左團次の遺德餘慶が此地位を與へて、一門のみか他門の先輩までそれを推戴擁護して居ると思へば、僕も其技藝を見る上に於て先づ以て同情眼を加ふるのだ。而して此政右衛門役の如き一虛一實佯狂僞醉の腹藝は多年錬磨の自得より來るべきものであつて、今此

示しつゝあるは勿論で、是れ此子が發奮を繼ぐに熱心勉强なるの効果である。左門次の丹藥塲は詳に及ばず。左

喜松の娘おのちは背丈が少々高か過ぎたやうだ。

三幕目譽田大內記屋形の場（上半分は「道中双六」五段目下半分は「乘掛合羽」六段目）、此幕は二種の淨瑠璃本をあへませにして居るが、武藝の仕合で始まり、武藝の傳授で終る處頗る自然の貫聯を得て居る。而して斯かる新場面故勿論チョボ抜きの活歴式だが、神影流の傳授となつては殆ど皆淨瑠璃の文句通りにした丈まだしも殊勝であつた。そこで又一つ活歴に向つて攻擊を加へるが、此幕に太守の御前でありながら、臣下共が互ひに政右衛門殿林左衛門殿などと殿づけに呼んで居るのは甚だ耳障りである。古禮の君の前には臣名云ふと云ふ法は德川武治の代に於ては嚴重に行はれて居たもので、僕等も昔し藩主の前では家老であれ親であれ皆其名を呼び捨てにしたのである。又君の前では互ひに話しをするにもどうしませいかうしませいと云つて一切敬語を交換せぬことゝなつて居る。實に儼然凜然として且奥床しい景況であつたのだ。此習慣があるから、僕は舊芝居に於てさへ君の前に臣下互ひが殿づけで呼ぶのは興が醒める感を免れぬ。處で活歴式は卽ち活歴史であるのだから、責めては此稱呼や言語丈でも當時の禮法に從つて居たら、僕は聊か慰む所があるのだに、此點は矢張例に依つて例の如しで、舊芝居の改良と云ふ事程情けないものはない。今一つ、活歴式では君の前に臣下は脫刀せしめて居る。是れ一面の事實に合つては居るが、其席の如何を問はず總て脫刀せしめては矢張不都合である。元來君の前に臣下の脫刀する法は內席に限る。卽ち居間とか其他燕居の室で、君公も身を寬げて居る場合に限るのだ。若し表席となると君

臣共に帶刀するが禮法で、脫刀しては却て無禮となる。卽ち書院とか大廣間とか云ふ場合はそれだ。就ては是れも活歷式のは一を知つて二を知らぬもので、甚しきは「御上使の御入り」と觸れ込んでさへ、諸士が丸腰でノコ〳〵と迎へるなど實に見られたざまでない。是れ等は慥かに退步の改良と云ふべきである。扨段々傍徑へ這入つたから再び此幕へ立ち戻つて、荒次郎の櫻井林左衛門は持前の半道が老錬したのと體軀の肥大なのが恰も此役に適當して、此人一日中の出來であつた。花道の引込みに衣服の切れたのを驚く刹那の思入れも態とならずして一寸をかしい。莚升の政右衛門は此場が活歷式になり居る丈それ丈父の專賣物だから、其繼承者たる此子に取つては極めて大切の役又晴れの役である。されば當人も十分注意して勤めて居るらしく、前幕の政右衛門と比して非常の彫變であつた。林左衛門との仕合は事實の上でも拵へた仕合だから、强ひて氣を入れるにも及ばぬが、小團次の譽田大內記と神影流傳授の立合は、一方に義理の叔父御が呼吸を合はしての引立てもあるし、旁々頗る見耐へがした。又餘多の若侍を相手の立廻りに。上手へキッと坐つての見えは亡父も地下に欣然と眉を開いたであらう。小團次の大內記は後に重兵衛と云ふ大役もあり、こゝは主として義理の甥へ花を持たすが勤めだけれども、矢張叔父御は叔父御丈の事はある。但し幕切に政右衛門と君臣訣別の處は少々だれ氣味で、甥子の呼吸の方が寧ろ好かつたやうに思ふが如何。此幕で鯱升が改名と名題入りの披露があつたが、一寸新趣向で少しも廉立たず、其身分に相應して居る丈却て同情があつた。鯱丸の村田右源次は愛すべき少年。

舊芝居であつた。此の如き舊芝居は現今唯此座の此手合ひに於てのみ見るべきもので、他の各座に於ては到底眞似も出來ぬことである。蓋し輓近舊芝居の衰頽は絕頂に達して居るやうだが、是れ固より觀客に舊事物玩味の理想乏しく、殆ど實感的の新事物をのみ好む傾向あることと其主因であらうが、又一方には役者及び興行者共の此好尙に阿合するの結果、己れ自ら舊芝居を破壞しつゝあることも一であつて、此點は大いに彼等を責めねばならぬ譬へば元祿の正風が享保以後漸次衰滅して月並流に赴いたのは、世間に俗人原の多かつた爲めだとは云へ、雪中庵と稱し其角堂と稱する輩が自らよく家法を守つたならば、斯くまで甚しきには至らぬ筈。乃ち今や之に等しき舊役者の名家は何を爲しつゝあるか、成駒屋と稱し紀伊國屋と稱し高麗屋と稱する者にして、活歷式以外殆ど意を用ひず、甚しきは壯士俳優と競爭して所謂新劇を演ずるに至る。是れ何たる不見識不了簡ぞや。又各座興行の狀況を見るに、舊芝居に屬するものゝ採用せらるゝは多く其中幕一幕に止まり、其他稀れにそれが通しを打つも或はチョボを廢し或は活歷式を交ふることゝ卽ち今回の如きものである。(忠臣藏丈は別段)隨つて大部分の時間は他の方向に從事し、少部分の時間のみ舊芝居を演習する結果は、人の慣性上物理の惰力上決して舊芝居式能力の發達すべき筈がない。故に嘗て多少心得のあつた先輩と雖も段々舊芝居式に荒み行くは勿論、若年後進の人々はそれを學び習ひたくても其機會なき有樣に立ち至つて居る。又此の如く舊芝居を以て多く世人に紹介せぬ結果は世人も亦益々舊芝居趣味の感受力を失ふことゝなる。是れ舊芝居の愈々衰頽を極むる所以であらう。然るに此沼津の一幕に於ては幸にして殘存稀有の舊芝居式堪能家三人を集め、他の人々は一も要部に加へず、單に此の三人を

して各々十分に其技倆を發揮せしめたのであるから、卽ち圓滿具足の舊芝居を見せるに至つたのは怪むに足らぬ而して他の各座では眞似の出來ぬと云ふもの、の事である。小團次の呉服屋重兵衛は、此人以前は舊芝居式で兎角と言はるゝ程の株もなく、寧ろ浮はついた調子はそれに適當せなかつたのであれど、年功と工夫とは短所を沒却し、今では舊芝居式屈指の達人となり了うせ、殊に此場は老優琇藏の相手だから一層力一杯に演じて居る樣が見える。而して此役は町人ながらも腹があつて、又時として情癡を持ち、義理と恩愛樣々の變化を表裏二面に仕分けると云ふ難局だけれども、始終拔目なく時藏の平作が曲獨樂を回はす如き細巧の妙技に對してよく其位地を保持したのは大出來である。唯一事小言を云へば、お米を妻に懇望して却て怒りを受けた後の擧動は、淨瑠璃本では既に妹と知つた故の掛引で、それが行はれぬとて聊か不快はなけれど、芝居では變化の劇甚なるを求むる爲め、平作の物語りを後へ廻し、こゝは單に重兵衛の情癡に出づるものとして居るから、隨つて右懇望の外づるゝと同時に悔恨の情態を表はすのは好いが、俄かに家居の汚穢を厭ふ見えとして爪立歩きをするに至つては餘まりに輕薄に失して、重兵衛の重兵衛たる役を忘れ、殆ど色敵道化的の仕ぐさに落ちた。僕の考へでは、此幕の重兵衛は淨瑠璃本其儘が一體に穩當で、最初こゝへ休らふのも道端の爲めとし、泊るのも單に愛敬にほたされた爲めとし、色氣は殆と有るか無きかに極めて薄く畫かれて居る、此方が趣味に於ても元々好いのだ。然るにそれを下手に拔き指しをするから今日のやうな事にもなるので、是れは芝居作者の罪だけれども、小團次たる者も多少注意の足らぬ故、一擧一動時に人をして滑稽感じしむるものがある。殊に印籠と煙草盆を掴んで誇顔の場、今日樣に表

ての振りも故人瀧野屋の暖簾繼承者として光りがあつた。但し振りの終りに多くの人のは泣き崩れて打ち伏すやうに思ふが、此人のは座つた儘で身を背けツンとすねた見えであつた。是れは傾城瀨川の故態が自然に出たと云ふ心持かも知らぬが、「吾孺育ちの張りも拔け」とあるからは、矢張打ち伏して悲ぢ入り、ひたすらに詫びると云ふ方が好かりさうだ。小半次の家主杢兵衛はおなじみの顏で、一寸嬉しかつた。他の商人二人に比して道化の自然なのは爭はれぬ老巧。佐傳次の池添孫八は背丈の高い程愈々技倆の見榮えせぬのはどうしたものか。時藏の雲介平作は唯無類珍品と云ふ外賛辭がない。最初の出に左手に竹杖、右手に煙管、カタ〳〵と叩いた丈で、早や播磨屋が平作か、平作が播磨屋か、僕はもう魅せられてしまつた。尙少しく詳說すれば、此人の技藝は表情其他の擧動何一つ妙ならざるはなきが、其內妙中の妙はチョボと振りとの關係である。元來此振りと云ふはチョボの文句や其節々調子を身體に受けて行動するので、第一心內の情態を形で表はす事、第二心外の事件を形で畫く事、第三此二つの事を離れて其場合〳〵の實際的行動をなす事等で、一口に云へば複雜にして意味多き一種の舞ひ手踊りなのだ。然るに輓近世に沒曉漢が多くなり、舞ひ手踊りと云へば其積りで見ながら、芝居となると總てを寫實的に責むると云ふ變な傾向が生じたので、役者の方でも自然其傾向に循應すべく工夫をなす者を生じ、此チョボに對する振りの如きも、成べく右に云つた第一第二を少くして、主として第三の事を務めるやうになり行いた此隨一は卽ち團十郎で、遂にチョボはソッチ除け、爾は爾たり我は我たりとまで振るまつた。是れは極端の勇斷

で、其他の人々は兩極端中種々に折衷的をするのだ。處で時藏は如何と云ふに、矢張第三に務める傾きは見ゆれど、それがいつも一種特別の態度となり、チョボを外にするが如くにして外にせず、チョボが方形なれば、振りは圓形、其方形と圓形とが互入融合して、一にして二、二にして一、其趣味其態度、實に何とも云はれぬ妙がある。つまり團十郎のはチョボを離れて獨歩の勇斷、時藏のはチョボに對して不卽不離の妙智力、此上から云へば其優劣巧拙は競へものでない。卽ち舊芝居式より云へば團十郎は時藏と同席もかなはぬのだ。尤も僕の願ひは此チョボに對する振に於てもどこ〳〵までも舊式で、矢張第一第二第三を斟酌なく十分に逞うするものを好めども、それはそれ、これはこれ、此時藏式には實に我を折つた。此の如くなれば世の沒暗漢も聊か納得すべく（どうでも好いことなれど）、又舊芝居好きも大に滿足すべく思はれる。卽ち時藏式は新舊間の一大連鎖だ。されど此の如き妙藝は敎へて傳ふべきに非ず、唯自修めて得べきものであるから、此人一たび死せば亦此式も絕滅するの恐れがある。實子吉右衞門は夙に麒麟兒の稱あり、今や名題拔露の榮典を擧げんとす。彼れ果して此衣鉢を受け得るや否や。扨此時藏の平作の妙は右の如くであるが、猶隴を得て蜀を望めば、彼の「子故に迷ふ三惡道」で花道の擧動は今一息かのやうに思はれた。或る人は此日病氣であつたらうと云ふが、佛も魔障と云ふことあれば其れ或は然らん。又末段重兵衞の介錯は、親を切るのは殘虐無道と云ふ新式考へから歟、それを止めて、單に自らの落ち入りとし、お米も池添も駈け出て取りすがることにしたが、僕は矢張淨瑠璃本通りが好い。父子互ひに介錯するは

が樂を打ち其先ゴで親子の顏を見合はすから、拍子も義景を好ゆのだに、今回の如く池添が別に自ら刀を拔き立石を切つては如何にもだれる。又池添はどこまでもお米を止めて出さぬ處に、悲哀中にも義理を見るのだが、それを出しては情に流れて惰弱となる。兎角こんな所謂改良があつた爲め時藏の技も少し妨害を受けたやうで、結末は思つたよりも振はなかつた。

五幕目伏見宿屋の場（「道中双六」九段目）、

六幕目上野敵討の場（「乘掛合羽」十段目）、

此二幕は前幕を餘りに見詰めた爲め眼が疲れて、何だか朦朧の中に終つた。尤も役々の働きに再び眼を醒ます程の見榮えもなかつたからであらう。

大切うつぼ猿、女寅の女大名立田は其舊芝居式が長所程に所作事は長所でないらしい。身體が時々きまらぬ所があつた。小團次の猿曳升太夫は樂なもの、此役では輕妙を盡くし足らぬ憾みがあらう。莚升の奴蔦平は所作事も存外上達。是れで此日はめでたし〳〵。

ハタ、キの稻靑氏が說に就て

老梅居雜話の種もがなと思ふ處へ、「甲矢」の二卷三號が屆いたから、アチコチとあけて見る內、末の六號活字に至ると、サー大變、鳴雪は一大痛棒を加へられたと記してある。老人の僕に棒、殊に一大痛棒では命には拘はると思ひ、其棒は藪からか何處からかとビク〳〵もので尋ねると、卽ち「ハタ、キ」一卷二號の稻靑氏が草双紙觀と稱せらるゝ論說であるとの事。而して「ハタ、キ」は生憎手元にないから、早速俳書堂雜誌部へ駈け付け、ソレを借りて來て、取る手も遲しと讀んで見ると、二度驚いた。右の論說は僕の「田舍源氏」談に對するもので、縷々數條に涉つて居れど、徹頭徹尾一大痛棒どころか棒らしいものも見えぬ。尤も隨分お叱りは受けて、盲目なる鳴雪とまで云はれて居れど、斯かる嚴峻なる結言を與へらるゝには、其前提が十分正確でなければならぬ。然るに其數條を概括して論理法に引き直し、演繹三段の式として見ると、正味の論理は唯左の如きものである。

大前提　總て草双紙の類に好いものはない。

小前提　「田舍源氏」「女房形氣」「吉原十二時」等は草双紙の類である。

結言　故に「田舍源氏」「女房形氣」「吉原十二時」等は好いものでない。

それから、

大前提　總て我が好くないと思ふものを好いと云ふ人は盲目である。

小前提　鳴雪は我が好くないと思ふものを好いと云つた。

是れ丈だ。是れ丈を以て僕に陽口せよと云はるゝは僅かに情けない次第である。僕から見ると、後の大前提の如きは（失敬ながら）若樣の御諚式と云ふもので、お乳の人か三太夫の外は直ちにハイ〳〵とは申されぬ。前の大前提は之に反して、事實が果して事實なら隨分通らぬこともないが、此問題は餘の事と違ひ、人々の趣味に屬するのだから、事實と云ふも多く銘々極めの事實であつて、反對者に向つては聊かも効力がない。殊に僕と稻靑氏との如く、一方は昔嗜き一方は今嗜きと云ふやうな間柄であつては、愈々以て一致は六つかしい。加之稻靑氏は總てを以て純文學上より割り出され、純文學以外の嗜好を持つてはならぬと掟られて居るやうだが、僕は之と反對で、純文學固より結構、又純文學でなく、他の主義の加味された文學でも、乃至は文學と云はるゝほどのものでない雜書でも、苟も僕と關係して興味を與へ、且同情を生ずるものであるなら、一切合切結構と云ふのだ。卽ち草双紙の如きは、ソレを文學と云ひ得るならば、槪して勸善とか敎訓とかの主義の加味された文學である。且內容や外形に於ても殆んど一定の約束があつて、羈絆的美とも云ふべきものである。殊に其文章の如きは、凡て當時の無學なる婦人子供を主として讀者としたのだから、隨分平板で冗漫で、且彫琢を經ぬ書きッ放しである。から、コンナものを律するに今日の純文學に屬する小說の批評眼を以てして、ヤレ文句がドウとか何がドウとか云はるゝのは、少々野暮ではあるまいか。要するに昔の草双紙を讀むには、矢張己れも昔の婦人子供の氣になつて見ねば面白くない。而して日常大人（オトナ）となつて現在油ッ濃い世間と應接する人々は、時々此淡泊無邪氣なる昔の婦人子供となるのも亦妙であらう。殊に僕の如きは、昔に於て此草双紙の嗜好が普通の人より數層深かつたので

あるから、恰もなつかしい故郷へ歸るやうな心持でソレに對し、嘉永安政の舊夢を結びつゝ遠々として自ら樂んで居るのだ。而して夢話しは誰れもよく人に告げる如く、僕もソレを告げたのが卽ち「田舍源氏」談及び其餘談である。又夢話しは夢話しと思つて聞くと一寸興味もあるから、ソコでチツトかソツトか彼の談に同情を下さつた人もあつたのだ。諺に痴人の側に夢を說かずと云へど、「我が同人諸君に痴人はないから、僕は安心して永〳〵と夢を告げたのである。然るに今や稻靑氏の如くヤツキとなつて攻擊せらるゝ人があると、僕も少々思はく違ひがする。尤も捨てゝ置くと僕の說が世を賊するとか云ふので辯を費やされたやうにも見えるが、よく思ふて見給へ、從來陳腐が鳴雪か鳴雪が陳腐がとまで云はれて居る僕が、かてゝ加へて蟲の喰つた草双紙を持ち出して、ドンな大聲で、ソレを賞揚したからとて、寐ても覺めても新奇々々と云つて、且燃ゆるが如く純文學を好まるゝ諸君が、ナンで本氣の耳を貸して下されうぞ。殊に僕が彼の談を仔細に讀んで、感情に激せず、理性に訴へ、冷靜なる判斷を下さるゝ人ならば、彼の談の性質から僕の目的や其立ち場は十分に分かる筈。分かればこそ、同情者のあつたのだ。然るに稻靑氏は其同情者を以て早計にも僕に盲從して善惡の辨へもなきものだと云はれたのは、其人々に對しても頗る無禮であらう。將又僕の列擧したる草双紙は德川文學の粹でないと云ふやうな御入念の辨もあつたが、ソレは勿論のことである。其譯は旣に「田舍源氏」を始めソレ〴〵の條下に云つてあるから、今一度氣を落ちつけて讀でん下さい。尤も京山の「女房形氣」の如きは、僕特別に賞讚を加へたが、是れは賞讚すべき價

に變更することは出來ぬ。尤も非常に公平明晰なる天磨にでも達したら變更せぬにも限らぬが、今回の如きお叱りやお說では、寧ろ益々此書が可哀さうになる。(尙此書愛好の諸點は該條下にも多少云つて置いたが、他日此雜話で詳細に告ぐることゝせう。)ソレから今一つ雅望の「吉原十二時」であるが、是れも該條下に云つてある如く、個樣な俗地の俗事情を雅言で物したと云ふ點が僕大いに氣に入つたので、雅言に就ての趣味は僕と稻靑氏とは正反對であるのだ。氏は兼てより萬葉語の如きは死語として竹の里人一流の歌なども批難され居るし、今回も時好後れの和文として雅望の雅文を擯斥されて居るのだから單に時文を用ひず古文を用ひたと云ふ事丈でも、旣に氏の氣には障つて居るのだ。之に反して僕の如きは古文と聞く丈でも早やゾク〴〵としてなつかしい。且氏の云はるゝ流行最も甚しい遊廓の狀態を生溫るい和文で云々の如きも、僕は却つて其點を別して珍らしく面白く思ふのだ。僕は元々此書に依つて吉原を知らうとは期して居ぬ。寧ろ此書の吉原の實を虛にし、其今を昔にし、一種の夢幻的想化を與へた手柄を愛好するのだ。若し單に吉原の事情を知る爲なら、京傳三馬春水一輩の書の寫實的で切當なることは誰でも心得て得る。扨此外作者や畫工の事に就ても稻靑氏は尙大分に意見を述べて居らるゝが、其論法はイツも同一だから、此上一々答辯する必要はなからう。畢竟するに僕と稻靑氏とは殆んど總てに於て趣味が違つて居る。其の違つた趣味を以て大前提とした結言は、僕に對して何等の關係を持たぬ。關係を持たぬから痛痒もない。痛痒がないから氏の說は棒でも何んでもないのだ。ソレを「甲矢」に一大痛棒とあつたので、僕が一時喫驚して殆んど腰を拔かしかけたのは、返す〴〵も赤面の次第である。呵々。

小説の主人公

進化しては退化し、退化しては進化し、此の如きことを無數に繰り返しつゝあるは宇宙である。而して我が地球は今や其中に於て進化の時だ。否、少くとも我が地球上の吾々人間は進化の時だ。星雲狀の瓦斯が凝結して我が地球の原質を造り、地球は周圍の火燄と共に無機物であつたが、火燄の消滅するに隨つて有機物を分派し、有機物は卽ち生物で、生物から更に有感有情の動物を分派した。此動物は吾々人間と同類であるが更に又此同類中から理性と云ふものを成就した一族があつて、爲めにソレを超出したのが人間である。而して理性は主として是非善惡を辨別して感情を節制するものである。此是非善惡を辨別して感情を節制することがなくば、理性の理性たる本分を失ふ。理性の理性たる本分を失はゞ、單に感情のみに妄動を逞くせしめて殆ど全く元の動物となるのだ。尤も動物中でも蟻や蜂等はやゝ理性あつて卽ち是非善惡を辨別して感情を節制するが如く見える。ソレは彼等の社交的生活の狀態に依て徵せらるゝ。蓋し凡て社交的生活は其社中の理性殊に理性の本分が十分に發動せねば完全に目的を達せられぬ。此推理として吾々人間は社交的生活の狀態であると同時に、必ず理性殊に劑性の本分を

動して眞の人間だ。理性の本分が發動せなくては眞の人間でない。徒に横目竪鼻兩手で働き兩足で歩いてもソレばかりでは矢張元の動物である。且蟻や蜂にも劣つた動物である。

されば今玆に人間なるものを描けと云はゞ、必ず理性を持つた者を描かねばならぬ。殊に理性の本分發動し、卽ち是非善惡を辨別して感情を節制する者を描かねばならぬ。單に横目竪鼻兩手で働き兩足で歩く者を描いては眞の人間でない。ソコで今日の小説界に就き此問題は如何に解決せらるゝかと調ぶるに、慥に横目竪鼻兩手で働き兩足で歩く者は描かれて居る。されどソレが果して理性を持つ者であるか、殊に理性の本分發動したる者であるかと問はゞ、多くの小説の主人公に就ては先づ以て然らずと斷せはねならぬやうだ。而して此れ等の小説は動物を描寫したものかと尋ぬるに、矢張人間を描寫したと云つて居る。のみならず、讀者も亦人事の小説として對し、殊に右等の主人公に同情を持ち涕淚を濺ぐ者さへあるやうだ。是れ豈咄々怪事ならずや。併し尙眼を濶大にして此人間社會の現況を見るに、祖先の一族が既に他の動物群より超出したとは云へ、未だ全くソレを超出したのではない。猶動物時代の蠢々たる妄動は吾々の身内に殘存して、時もあらば特得の理性を妨害せう〳〵として居る。ソコで理性の發動も一進一退中々容易の事でない。故に古今の人間社會に於て一々の人物を檢せば、十分人間になつた人がある。チツとも人間にならぬ人がある。又幾分人間になり幾分人間にならぬ人がある。其階級は無數である。就ては人間を描く目的を以て小説を作る場合にも其撰擇に依つては種々の主人公が出現するのは已むを得ざる結果で、卽ち人間にして人間にならぬ主人公の採取さるゝに至るも、殘念ながら吾々人間社會の實

況的反射である。併し小説と云へば寫眞鏡でない。よしや人間の狀況を寫すとしても、宜きに適へて取捨するは作者の手心にある。卽ち十分人間になつた人を描くのも人間社會の實況だから小説だ。チッとも人間にならぬ人を描くのも人間社會の實況だから小説だ。又幾分人間になり幾分人間にならぬ人を描くのも人間社會の實況だから小説だ。此の如く何れも皆小説の主人公となり得てソレを描かるべきものである上は、折角動物群より超出して、ソレが理性の賜であると云ふ人間社會に於ける小説は、彼れを捨て此を取り、ドコ〳〵までも理性を貴び、其理性に適つた人物を主人公となすべき筈、又ソレを作る人も讀む人も此の如きものにして始て同情も燗なるべき筈である。尤も是れのみに限るとは云はねど、此の如き小説をこそ最多く製作さるべき筈である。然るに今日の事實に於て之と反對するは何ぞや。蓋し是れには又多少の理由があるらしい。卽小説の描寫は總てに於て不自然を避けて自然を貴ぶ。自然にして始て興味と融合するのだ。玆こに一の場合にあらんに、理性に從へは身苦し感情に從へば身安し、苦を去つて安に就くは自然らしい。愛すべき女あらんに、理性に從へばソレに別れ、感情に從へばソレと同居す、別れずして同居するは自然らしい。故に此自然らしいものを擇び取つて居るのではあるまいか。凡て理性に從ふは坂を登るに似て居る。感情に就くは坂を下るに似て居る。而して其實徒に地球の引力に一任して反抗し得ざるものは無機物であつて、進化して生物となれば既に己れの力を以て自動し、動物となれば更に大に自動力を逞くするのである。唯夫れ感情一たび發するや、動物の悲しさはソレに一任して反抗し得ざ

卽ち理性の主効である。して見れば、前例の如く理性を離れて感情に引かゝるのは、自然を云つても全く動物的自然である。進化の趨勢に順應した人間の本位よりソレを見れば寧ろ不自然である。且つ此の如き退却の方向に自然を認めるならば、地球上の萬物は一切無機物の如く頑然として自動せぬのが大々自然であらう。されど斯かる自然はモハヤ自然でないとせば、人間の理性を離れて感情に引かるゝ自然も亦自然でない。而して同時に感情を節制して理性に從ふのが自然である。隨つて小説にして人間を描かんとせば、自然を貴ぶ上より云つても益々以て人間となつた人間を多くの主人公とせねばならぬと云ふ結論が下さるゝではないか。故に今日の多くの小説の如きは人間社會の作物として不都合である。否、先づ以て蟻や蜂の社會の作物としても不都合である。と云つて又小説を説教の用に充てやうとは申さぬ。唯美的興味を與ふる範圍に於て蟻や蜂の社會以上の狀況を描かせたいと云ふまでゝある。

維摩經

盧子氏選句で維摩忌を云ふがあつたが、此の維摩は維摩經と云ふに出て居て、一寸其事柄が面白いから其大略の筋を説示して見やう。

天竺は毘耶離國の庵羅樹園と云ふ處に釋迦如來は或る日説法を始められた。八千の大比丘三萬二千の菩薩衆はソレを圍繞して居る。天上からは欲界色界の諸天王海中からは八大龍王、其他諸方から夜叉乾闥婆阿修羅何々と云ふ怖はさうな名の眷屬、人間では僧尼優婆塞優婆夷なども參つて聽聞する。其時此國の城中に寶積と云ふ長者があつて、其他五百の長者と共に聽法に參つたが、長者の事であるから七寶の蓋と云ふ立派なものを各々より献上した。すると釋迦如來が手づから受取られる途端、此五百の蓋が忽ち一つの大蓋となつて、其大蓋の下には三千大千世界山海川流日月星辰天宮龍宮挙は十方諸佛國の諸佛の説法して居らるゝ景況まで一切出現したので、一坐の衆は一同「未曾有」と叫んで喝采した。是れが序開きで、ソレから段々と質問や自讃や説法が進み行く内。釋迦如來は忽ち氣づいたやうに、此毘耶離太城中に維摩詰と云ふ長者がある、彼れは今病氣と稱して引籠り、頻りに國王大臣長者などの見舞を受けつゝあつて、此方からも見舞の使者が來さうなものだと思つて居るから、誰れかを遣らねばなるまいと仰せられ、先づ坐中で羅漢の首坐にある舍利弗と云ふに、汝行つて來いと命せられる。舍利弗は嘗て維摩に出合つて散々に愚弄せられた覺えがあるから、イヤ私では迚も御使者の役は勤りませぬと辭退する。ソレなら大目犍連に行けと云はるゝ。目連も矢張舍利弗と同じやうな目に逢つて居るから辭退する。次ぎに大迦葉須菩提等の七羅漢、彌勒持世の二菩薩、光嚴の一童子。皆維摩には懲り〳〵して居るから辭退する。最終に文殊師利菩薩へ向つて汝行けと命せられると、流石は首坐の菩薩だ。彼れは隨分難敵で御坐る、サレド御命とあらば御使者を勤めませう、と御請けをした。ソコデ念々毘耶離大城へ向ふことゝなつたから、一坐の衆は次第

と摩維と兩大聖の相撲は如何に花々しからう、ドッちが負けるかドッチが勝つか、又吾々の心得になる事も多からうと云ふので、ゾロ〳〵と文殊の尻に附いて行く。舞臺が替はつてコチらは維摩の宅の場、此奴中々の白れ者だから、モー一切の事を承知して居る。ソレデ神通力を以て態と家宅什器を悉皆なくし、僅かに一丈四方の小室に現じ、ソレに一ッの床几を置き、身を横へて待つて居る。間もなく文殊が先に立つて菩薩羅漢其他の大衆が遣つて來た。すると行きなり維摩が文殊善く來られた、不來の相にして來り、不見の相にして見る、と云つた。文殊は言下に居士よ來り已めば更に來らず、去り已めば更に去らず、來る者は從つて來る所なく、去る者は至る所なし、見るべき所の者は更に見るべからざるからだ、と答へる。是れを手始めで双方火花を散らしての問答、其時例の舍利弗も來て居たが、コンなに人々の見舞を受けながら床几一つ出さぬのは餘りにヒドイと心に咿いた。すると維摩は直きに知つて、床几が欲しいなら幾らでも上げませう、ソレは東方の空に須彌相國と云ふがある、ソコの獅子座が一番美しいと云ひつゝ、自分の神通力を以て何か掛合ふと、彼の國の王須彌燈佛といふのがお安い御用と、八萬四千由旬と云ふ大獅子座を三萬二千も差越されて、ソレが譯もなく一丈四方の小室へ這入てしまふ。而して維摩が須彌山も芥子粒へ入るべく、四大海の水も髪の毛の穴へ入るべしと云ふ、途方もない大言を吐き、サーとなたもふ乘りなさいと云ふ。神通力を得た菩薩は有り難うと挨拶して、各々獅子座相應の大身を現じヒラリ〳〵と其上へ飛び乘る。處が新に成り立ての菩薩や羅漢はソレが出來ぬ。就中舍利弗は自分が云ひ出して置いて乘れぬのだから最赤面して居ると、維摩は乘れぬのなら須彌燈佛へ向つて禮拜をして見なさいと云ふ。其

通りすると、舍利弗始め皆々も我れ知らず獅子座の上へ身が乘せられた。ソレから又問答や自讃が段々と進んで行つたが、忽ち一の天女が室の上へ現はれ、坐中の衆に向つて天花と云ふものを頻りに撒きかけた。すると諸の菩薩には其花が身に到ると共に直き落ちてしまつたが、羅漢には身に着いた儘で落ちぬ。例の舍利弗はヤッキとなつて振り拂ふけれども愈々以て落ちぬ。天女はソレを見て、お止しなさい。駄目です、あなたにはまだ情欲が殘つて居るから、花がソコへ附込んで離れぬのだと冷やかす。舍利弗は尙問答したが遂に閉口する。ソレから維摩が自分の身の上話しをして、智度は母だ、方便は父だ、法喜は妻だ、慈悲は娘だ、善心誠實は悴だ、なとゝ大氣燄を吐く。續いて法自在菩薩と云ふが何々不二門と說いたのが始まりで、他の菩薩も負けずに、先きを爭つて何々不二門何々不二門と說き出し、一時は此不二門の說法で騷々しかつた。ソレが濟むと、又例の舍利弗がモー時刻だが食事はドウするのか知らんと心で思ふと、維摩は直き知つて、食事なら今差出さう、是れには空の上方に衆香國と云ふがある、アソコの香飯に限ると云ひつゝ、自己の神通力で一の光り輝いた立派な菩薩を作り、ソレに鐵鉢を持たせ、口上を含めて貰ひに遣る。衆香國には諸菩薩達此化菩薩を見て未曾有と讃歎し、其國王の香積佛と云ふのへ引合はす、香積佛は委細に口上を聞取つて、さらば麁飯を進ぜうと、其鐵鉢へ香飯を山盛りに入れて渡され、化菩薩はソレを大事に持つて歸つて來る。同時に彼の國の菩薩九百萬が好い序だから娑婆世界へ參つて、釋迦如來や維摩等にも逢つて見たいと思ひますが如何でせうと伺ふと、香積佛直ちに許されたから、此連鉢に一つの香飯なので、是れでは此一坐の大勢に一粒づゝも行き渡らぬと、失望の心を起して居ると、又もや維摩に知られて、御失望には及ばぬ此通りと、其鐵鉢を取つて分配を始めたが、コハ不思議、鐵鉢に一つの香飯が一坐の衆に行き渡つて、舍利弗も十分に滿腹する。殊にソレを喰べると同時に各の全身より香氣を發散して、室中は馥郁の氣を以て滿され、ソレに今來た衆香國九百萬の菩薩の身より放つ香氣も加はつたので、維摩の室は一大香團となる。そこで維摩は又此衆香國の菩薩と問答を始めることゝなつた。而して舞臺が又廻ると初めの菴羅樹園。釋迦如來は相替はらず殘りの衆に對して說法して居られたが、俄に一切聽衆の身が金色に變じて、一同が喫驚する。中にも阿難と云ふ羅漢が其譯を質問すると、釋迦如來は何も驚くことはない、今維摩と文殊が遣つて來うと云ふのでコンなワルサをしたのだと申さるゝ。果して維摩が首唱で文殊も賛成し、毘耶羅大城の丈室に集つた一切の大衆を引連れて遣つて來る。ソコで愈々益々盛會となり、釋迦如來は殊に衆香園の諸菩薩にも說法さるゝ。其內妙喜國と云ふ佛世界の話となつて、一坐の衆がソレを眼前に見たいと渴望し出たので、維摩はコヽぞ己れの神通力を現はす晴れの場所だと思ひ、念一念した上で、右手を以て空中に在る妙喜世界を引攫み、幾分をむしり取つてソコへ投出した。すると一坐が驚いたのみならず、其むしり取られた世界の切れ端しに住んで居る菩薩以下の衆、其中には神通力を得たと云ふ者さへ大狼狽の態を見はし其國王の無動如來を呼んで、助けて下さいと絕叫する。無動如來は見苦い騷ぐな、娑婆世界の維摩が神通力で暫時用を足すのだから、と慰諭される。ソコで釋迦如來は其むしり取られた世界を眼前へ置いて自分の話しの實證を示された上、モー用が濟んだ、勝手に

歸れと云はるゝと、ソレが自然に空中へ飛び去つて又元の如く妙喜世界に合一する。ソレから釋迦如來は特に諸天王にも說法があり、終りに彌勒菩薩を呼んで、吾が滅後に於て佛敎の宣流は一に汝に囑托すると厚い仰せがある。彌勒は謹で御請けをする。是に於て坐に居る維摩文殊舍利弗を始め一切の大衆は大歡喜を起して愈々其敎を守ることゝなつた。右の維摩經は天竺から支那へ渡り、又日本へ來て、聖德太子も註釋を下されて居る。ソレから藤原鎌足も非常に此經を尊信して、毎年講筵を開いた緣故から、此人死後其忌日卽ち十月十日には維摩會を營むことゝなつた。是れが卽ち俳句の題にある維摩忌の出處であるさうな。

犬の糞の元日

眼が覺めて元日だと思ふと、幾齡になつても一寸氣の變はるのはをかしい。常は「萬朝報」「日本」「やまと」と寐ながら新聞を讀んで、細君に「あなたモーお起きなさい」と、掃除の箒を持ちつゝ催促さるゝが例なのを今日はソレをも待たずに起き出でた。足袋を履く、衣物を着る、而して厠へ行く。僕が宅の厠の臭氣を籠もらさぬ爲め冬も窓を開け放して、小便する時は自然に此窓の外を眺める。連日の大寒で艸木も石も荒涼の景を呈して居る其凍てゝ居るから左程臭さゝうにもない。下女は臺所が忙しい。イツソ自分で除けて見やうと思ひついた。除けるとは地を堀つて埋め込む事で、嘗て下女にも授けて置いた一策だ。ソコで先づ臺所口から出て、鍬を提げて、右の垣根の下へと廻つて行く。行つて見ると何だか手を着けるに後れか生じたか、思ひ切つて鍬を二打三打、小さい穴を拵へて、ソコへ恐る〳〵糞を落し込んだ。尤も鍬へ糞を直接せしめるのは嫌だから、糞の周圍を土ながらに掻き取つて、恰も饅頭の餡が糞、緣が土と云ふ風に落し込むのだ、ソコでモー是れ丈で止めれば好かつたに何心なく西手の庭へ廻つて行つた。するとサー大變、倶樂部と崕道とを仕切る西北の垣の隅の少々土が高く柔かになつて居る處に、犬の糞があつたよう〳〵も七盛り八盛り、一山幾錢としてある露店のづく芋宜しくだ。是れは倶樂部へ通路の木戸を歲末の多忙に數日締め忘れた爲め、奴に十分と用足されてしまつたのだ。腹立たしいより寧可笑しくなつた。同時に忽ち大勇猛心が起り、武藏守興世王が將門に說いた口調で、一山を除けるも穢、八山を除けるも穢、穢は一なり、イツソ悉皆除けやうと決心した。斯うなると中々元氣、縱橫無盡に鍬を揮つて一大穴を堀り、ソコへ例の如く饅頭的に土ながら一山〳〵づゝ掻き込んだが、穢いと思ふ丈ソレ丈周圍の土が多くなるので思つたよりは穴が早く塡まつて、遂に殘りの三山ばかり土を戴いた儘凸起した。コレではいかぬと鍬を以て築き下げやうとしたが、悲しい哉、此鍬の柄は素人細工に箝めたので鍬の平扁なる腹よりも一寸程柄の先きが長く出て居て築く度毎に土を穿つて、却て埋めた糞が再び露出せんとする形勢。コリヤ一層大變と、モー築き下げを

斷念し、聊か土を均らした儘で置いて、數歩退いい打ち眺めると、恰も犬の糞の丘墳とも云ふべき景色だ。犬の墳は「八犬傳」にあれど、犬の糞の墳は僕が創作である。ソレから猶振り返ると紫陽花の枯根の下に一盛りの糞が眼に入つた。最早コンな小敵は何でもない。一寸小穴を堀つて、今度は糞のみを掻き込み、十分築き下げて土を均らし、鍬の齒は他の地上へ二三度打ち込んでソレを淨めた、糞除けも經驗を積むと種々の智識が出るのである。まだあるならば幾個でも來いと、四方を睨み廻したが、モー糞の隻影だに見えぬので、鍬を提げ潤歩して臺所口へと凱旋した。ソコで手を洗ふ顏を洗ふ、鼻をかむ。細君は「あなた何をなされましたか」と訝り問ふ。斯く〳〵と告げると、「元日早々にマー」と顰蹙する。其時既に雜煮が出來て、屠蘇の銚子や盃も卓上に並んで居る先づ僕が飲んで細君へさす。細君が僕へ呉れる。僕が再び飲んで和行(末男)へさす和行が僕へ呉れる。コンな事をして最終に下女へも屠蘇を飲ませた。ソレから下女が雜煮を椀に盛つて差出したから、僕が手を突き出すと、細君は「お待ちなさい」と止め、別に雜煮二椀を盛らせて、一椀は臺灣の健行(長男)、一椀は戰地の惟行(二男)の蔭膳へ備へしめた。二人の子が宅に居れば父たる僕は雜煮の先取權を持つのだに、蔭膳と云ふと活きて居る人も神佛に準ずべく婦人には感ぜらるゝと云ふ、心理的研究を僕は得た。ソコで僕へもヤッと雜煮の椀が廻つたから、取敢へず太箸で餅一片を挾み出すと、此餅は胃の用心の爲めに粟餅で、ソレが大分煮え過ぎて、お負けに上は盛りの何かに染んで妙な色になつて居る。其形其色、忽ち連想の向つたのが……犬の糞……。同時に胸が

文藝協會の發會式

「早稻田文學」が復活すると同時に文藝協會が起り、其發會式を二月十七日紅葉館で催されたので、僕も出席することゝなつた。雲の如く群る學者文士才女達の中に小さくなつて待つて居ると、やがて正面の美しい幕が開いて、第一に几案を前に立たれた人は島村瀧太郎氏、卽ち「早稻田文學」一月の卷々頭の囚はれたる文藝の說者抱月氏だ。千古の文學藝術に關する諸大家を赤手に擒縱活殺された氏の人體は、如何におつかなからうかとの豫想は殆んど違つて、蕭洒たる一書生的の擧止言語は却つて僕の意に適つた。而して此の會の目的規則等を詳說さるゝ積りが時間の都合で止めになり、簡短にソレを述べられたのは、寧ろ仕合せである。目的規則は其文字通りで大體知れて居るを、場所もあるが、珍らしい餘興を後に控へたコンな席上で、クダ〳〵しう述べられては、誰れも耳を貸すものはなからう。尤もお約束の放たれたる文藝の端緒でも話さるゝことなら、ソレは又僕の大恐悅。謹で拜聽して餘興の事などは忘れてしまふのである。

第二は大隈伯が病氣で不參せられた爲め、鳩山和夫氏が其挨拶を兼ねて少々許り演說をせられた。衣食足つて禮節を知ると云ふ原理に依り、我が邦維新以後文學藝術の他の事物の進歩と伴はなかつたこと、又今日はソレを研

究發達せしむる機會であると云ふことは、固より氏の言の通りであるが、健全なる文藝の反對即ち不健全なる文藝の實例として、前夜聽聞の義太夫節の事を引かれたのは頗る不審である。面白く興に入つて居る中へ忽ち犬かの健不健と云ふことに就いて、氏の觀察の標準は僕等が意想以外にあるに相違ない。マサカ「隔つ一間に初菊が狼の吼えるやうな大きな音聲が起つて來たとて批難さるゝ處を見れば、義大夫節は勿論、其他我が邦既往の文藝立ち聞く涙轉び出で」の調子で、「夕顏棚のこなたより現はれ出でたる武智光秀」を語れとも云はれまいが、ナンだかドスなどは不健全、黃ろい聲のみ健全と定めらるゝやうで、甚だ妙に思つた。併し個樣に考へつゝある內も、往年上野の繪畫會の油畫で、氏が衆議院議長として、フロックコートを着し、右手に文書を攫んで正立して居らるゝ肖像を見たのを思ひ出し、昨も今も其の狀貌の魁偉にして、而かも眉目の間一種愛すべき風致のあるに恍惚としたことである。

第三は坪內雄藏氏が大隈伯の演說手控の代讀であつたが、通常の讀み方と違つて、聲の抑揚、身の働作、他には見ぬ一種面白い方式で、世間に往々朗讀演說と云ふがあるが、是れは反對に演說朗讀と云つて好さゝうであつた其所論は此會の起る所以と世の有志者の援助を要すること等を簡明に述べられ、一々吾人の首肯せねばならぬ論理であつた。殊に本日の餘興演藝を商品に譬へての言は、一坐が呵々と笑つて胸隔を開くと共に、其旨趣も十分丹田へ落下したことゝ考へる。畢つてまだ少し時間があるからと云つて、坪內氏自己の演說をされたが、此際態たれて居ると見える。而して其所論は主として規則第二條第三號の演藝娛樂の事に係り、既往の演藝は上流社會若くは下流社會の一局部の嗜好に偏するが故に、上下普遍にして且大數の人の娛樂すべき大演藝を今後創立する必要があるとの件、是は誰れとて異議はないが、ソレと同時に又久しき歷史を有し十分の發達をして居る能樂芝居其他種々の音曲等も、此會の勢力を以て便宜保護し奬勵して行かるゝことであると信ずる。今や社會の上流にある一部の人々は動もすれば舊演藝を以て今後の社會の嗜好に適せぬ〳〵と云つて擯斥すれど、其嗜好を失ふ一大因は慥かにサウ云ふ人々が自から作つて居るのだ。學者先輩の言に雷同するは、社會多數人の常であるから、學者先輩が右と云へば其嗜好も右へ向く。左と云へば其嗜好も左へ向く。ソコで明治初年學者先輩が一時大いに西洋に心醉し、手を拭ふも鼻をかむも一枚のハンケチで間に合はす穢い眞似さへ彼れのを善いと思つた位だから既往の演藝などは無闇滅法只メチヤ〳〵に惡口して、其結果は社會多數の人の嗜好にも變化を及ぼしたのである早いことが舊俳優名家の人々まで家藝を忘れて妙な合ひの子風を演ずるのを見ても思ひ半ばに過ぎやう。だから今後は學者先輩の人々に於て先づ以て舊演藝趣味の研究と鼓吹とを大いに擔當せらるべき責任がある。加之人の娛樂はイツも大數の人と俱にするものでなく、又同列同趣味の一局部乃至專門の數人又一人でも娛樂するのであるから、其智識學問境遇等に應じてソレ〳〵娛樂の需用がある。故に一面に平等なる娛樂の具を創始すると同時に、他の一面に差別なる娛樂の具を保存せねばならぬと云ふことは、極めて覩易い道理である。譬へば大數の人を容るゝ公會堂は宏壯堅固にして美麗なる西洋館が適當すると同時に、又簡素風雅なる舊氷の日本家屋も或る種

の社會家族其他閑逸の人々の爲めに適當すると同理である。本來演藝の旨とする所は美のみ。細大都野濃淡單複何れか美の多角形の一角にあらざらん。一を取つて他を捨て、積極を愛して消極を忘るゝは此會の旨趣でないとは勿論である。隨つて規則第二條第四款第八款の履行に於ては最もヨ、に留意せられて居ることゝ僕は信ずる。坪内氏が引込まるゝと、立食の案内があつて、樓上へ赴いたが、日本酒日本料理で、其麤末な丈ソレ丈此會の主義が賴もしい。就中胡麻ふりの握りめしは野趣があつて嬉しかつた

第四は逍遙氏作「かくや姫」の謠ひで、池内信嘉氏と宮井安吉氏と掛合で勤められた。各々素人の老練家として面白く聞いたが、慾には此曲中に連吟の處もあるなら一層引き立つて派手に感ぜられたであらうと思ふ。聞けば最初は囃子入りの筈であつたのを觀世清廉氏病氣不參の爲め囃子方を雇ふことが出來なくなつたとのこと。コンな席で素謠ひは自然淋しい感を免れぬから、笛鼓で色どることが出來れば、謠ひの趣味もより多く人に紹介され隨つて本會の下に其保存伸張を圖る幸先きも好いのであるに、惜むべし〳〵。

第五は「兒實三番叟」とか云ふ紅葉館踊りで、白襟黑紋付半袴着用と云ふ姿の女中二人が勤めたが、前後野郎盡しの處へ珍らしく女が出るのだから、矢張イツもの美麗なる衣裳を着ければ好かつたに。觀客が黑人筋だからと云ふので、大澁にしたのは寧ろ生き意氣である。尤もとめとか云ふ一女の技倆は他の一女より慥かに一日の長を認めた。

でも小波家の一子相傳だ。一般の人にはまだ〳〵數層膏ツ濃い態度語調でなければ、己れも出來ず、人も納得せまい。而して氏の話題の相も替らぬお伽話であるに拘はらず、始めより終りまで、時々笑聲を洩らすの外、一坐がヒツソリとして聽聞して居たのは、實に不思議千萬。コレぞ大人殊に大學者大文士達の頭を撫でゝ「ネン〳〵やー」とあやなさるゝ、氏が一大妙術の効果に外ならぬ。敬服歎服。

第七は愈々雅劇の「妹背山」であつたが、思つたよりも舊套で、新劇は愚か、活歴よりもまだ古るく、矢張歌舞伎ヲ居の方に傾いて居たやうなのは却つて恐悦至極である。即ち其科も白も輪廓は概ね歌舞伎で、唯内容のみが小變化をして、而して事實が奈良朝時代だと云ふ丈のやうであつた。尤も奈良朝時代の男女の音容は今より知れねど、德川時代の言語等に當て箝められた習慣のある科白へ、萬葉集を讀むやうな言語等を當て箝めるのであるから、一寸滑稽的に感ずるが、是れは吾人が耳目の罪で、何も此の如き科白が德川時代とのみ限らるゝ譯はない此科白で奈良朝は勿論干早振る神代の言語等を當て箝めても好いのである。ナゼなれば言語等こそ時代を追つて違へ、人間の人間たる事實に於ては古今何等の相違もないからである。又此雅劇より推して、芝居の科白は如何に變化せんとするも、サウ突飛な事の出來ぬと云ふことも分かる。全然寫實なる新劇は格別、人間を土臺として藝術的理想を加味した科白は、何程變化しても或る圓形をグル〳〵廻るに過ぎぬのである。尙僕が舊癖の頭では此雅劇にも典雅なる文章の地を入れて、高尙なる音樂でソレを歌つて貰つたら、如何に光景が活動し、趣味が增

加するであらうと思へど、モー云ふが管、已みなん哉〳〵。兎角演者諸氏のコヽまでの御工夫と御修練とは恐れ入つた次第である。唯惜しいことには席が席で、立てば頭が殆んど鴨居に隱れ、坐はれば身の半分が前の觀客の陰になると云ふ有樣だから、折角の妙藝も一半臓ろ〳〵に歸した。トウか他日は本式の舞臺で更に十一分驥足を展べられんことを望むのである。尙序に一事云ふが、佐伯刀自が雛媛の首を打つ時短劍を用ひたのは頗る不審た蓋し女性であるから平常嗜なみの後世で云ふ懷劍やうのものを使用せしめた考へでもあらうし、裝飾萬端はサゾ時代に合つて居ることでもあらうが、事實上首は容易く打てぬもので、迚も個樣な器では其役に立たぬ。尤も平治物語の鎌田政家が主君の姫を介錯する時の如く、二刀刺して首を取ると云ふ順序に掻き首ならば好いが、刀自が翠簾より半身露出の舉動では、慥かに長劍で首を打つと同樣に見えた。是れでは如何に大力でも名劍でも、又優しい女の首でも、決して切り放てるものでない。因ては今後此場合は、刀自の全身を隱して舉動の何たるを知らしめぬことゝするか、又は舊來の「妹背山」の如く、矢張亡夫所用の長劍を用ふることゝせらるゝが宜しからうと思ふ。如何。

第八は逍遙氏作「浦島」を長唄節附で、唄は杵屋伊十郎、三味線同六左衛門、ソレに下方も皆屈指の達人と云ふのだから、實に華々しく賑々しいことで、坐中の喝采も非常であつた。

此次ぎ〳〵にはまだ狂言の「衣大名」史劇の「時鳥孤城落月」喜劇の「誕生日」と云ふやうに、大分面白さうなも

酔夏斯は淋次坐中に充ち〳〵たから、僕は何分頭が苦くなつて、遺憾ながら退出した、廊下を通る時丁度狂言の賴うだ人が坐敷へ出るのと行き逢つたが、例の「遣るまいぞ〳〵」とも何とも云はなかつた。呵々。

本郷座野火の評

三月五日僕は本郷座の新劇「野火」を觀た。僕は從來芝居好きでるに拘はらず、新劇には疎とかつた。全く觀ぬでもないが、染々注意して觀たのは今度が始めである。始めで居て批評などは如何だけれども、少々許り所感を述べて見よう。有體に云へば、僕の頭には舊芝居の趣味が先入して居る。先入はして居るが、此先入の標準で新劇を律する心得はない。否、新劇はドコ〳〵までも舊芝居の範圍以外に立場を持たせたく、又立場を持たねばならぬものと考へて居るので、左もないと、肝心の新劇と云ふ特色が認められず、新劇として起つた甲斐がないことになるからである。然るに本日觀た處では、存外僕が新劇に囑望する點に於て飽き足らぬものがあつた。ソレは第一に科白で、舊芝居の方は務めて表情を極端ならしめ、又音曲に連れて語調を取り動作を整へ、尙ほ繪畫的に位置態度を寫すのであるから、其結果は慨ね人間實際の狀況と相違して、而かも其の相違した點に一種の藝術美を示すのであるが、廣汎なる藝術美は敢て是れのみに限るべきでない。人間實際の狀況其儘を寫した言語動作

の上に於ても、更に別種の藝術美は示さるべき筈。隨つて舊芝居の傍系として既に生世話や活歴などゝ云ふものが起つて居るけれども、彼等は未だ全くの寫實と云はれぬ。ソコで斷然舊芝居の羈絆を離れて、十分に寫實の新軌軸を出すべき資質と機會と勢力とを兼ね持つて居るものは新劇であるのだ。然るに本日此「野火」の或る役や或る場合などに於ては、間々人間の實況と相違するが如き言動も見え、又態とあらしく繪畫的の光景を寫すが如き樣を見た。是れ僕が甚だ遺憾とする所である。尤も新劇が最初壯士芝居と呼ばれた頃は、慥かに眞摯なる寫實的であつたやうに思ふが、伎倆の修熟と共に、其方面が聊か舊芝居の方へ傾きはせぬかと恐れる。若しもサウでは生世話や活歴と五十步百步の間となるのみならず、到底彼等と壘を對する特色は保てぬことゝなる。故に今に於て斷然此の如き傾向を改め、本來の軌軸の上に於て多々益々修練と工夫を加へさせたく思ふのである。第二は演ずる所の人物の性格で、舊芝居は所謂和事、敵役、道化、濡れ事、其他何々と專ら通性を定め、ソレを各種の藝題脚色中へ採用するのであつて、其人物と人物の個性に於ては殆ど著き區別がない。尤も生世話となると較々個性も表出され、活歴は流石に歴史の古人を摸倣するのだから更に多くの個性が見えて居る。けれども、是れとて主人公其他重もなる人物に就いて云ふので、周圍一般の人物となると矢張舊芝居と大差がない。因ては此の如き舊慣を改め主人公は勿論、隅から隅まで人物の個性を發表し、而かもソレが幕々一貫して聊かも不自然なる變動を見せぬと云ふ用意は、卽ち新劇に向つて責望するより外はない。然るに本日は此點に於ても未だ十分の滿足を得

難くとは云はねど、或る幕々は頗る驚歎に失し又理想に驅せ過ぎて、舊芝居の故套に陷りはせぬかと恐るゝ點があつた。尙ほ此等の諸點を始め其他事實に當つての批評は、一幕一幕の條に於て述べることゝせう。兎角壯士芝居と呼ばれた聲がまだ吾人の耳に殘つて居る此僅々の年間に、是れ程の人氣を博し盛況を取つたと云ふことは、實に驚くべき新劇の成功である。故に僕は此の如き新劇に向つては自今愈々益々完全の發達を要望せねばならぬ。

序幕熱海梅園の場　舞臺の大道具立は流石に凝つたもので數株の老梅が槎枒として丘上に蟠り、其丘上より藍の如き海面を望む光景などは、觀客までも心逝く感がした。殊に此海の景であるが、舊芝居では唯申譯までに書割へ現はし、舞臺に出た人物は終始ソレに無關係、甚しきは鈴ヶ森で題目の碑の後へ海を描き、長兵衛や權八はアベコベに向いて話しをすると云ふやうな妙な有樣もあるが、此新劇では此海の眺望を閑却せず、人々が概ね一度は其方を向いて景色を賞讃するのは、一寸した事だけれども、實際に注意した點である。又時々人の頭が誤つて梅の枝に觸るゝなども、舊芝居には見ぬ細かさだ。石田の三好侯爵夫人岸子、關の令孃久子、共に品格が乏しい。成り上り華族の妻子とすれば先づ好いが、責めて令孃には髮や衣服など今少し美麗に飾らせたい。或はイッソ大廂髮紫袴に靴履きと云ふ風にいでたゝせたら、顏色は詮ないとしても、幾分の姿態を加へたであらう。此姬君では哲學者宇佐美ならぬ凡人でも、冷然として緣談を止めることが出來さうだ。花園の三好の侍女おます、無難。磯野の寶石商槙本金藏、齒の浮くやうな語調、ノロリッとした態度は、慥かに此の如き人物が世界中に一人

はあらうと思はれた。大村の杉浦實次、眞率淡泊なる性格は十分に受け取つた。伊井の宇佐益祐光、容貌にも品致あり、哲學者一面畸人たるの腹もあり、科白がドコまでも寫實の歩武を取つて居るに拘はらず、一言一動シツクリと締まつて、舞臺の上に生えたやうに見えるのは、流石に主人公の貫目である。但しお加代に出合つて後、獨り梅樹の下に立つての沈思は、餘りに時間が長く念が入り過ぎる。此位にせぬと覽客の注意を引かぬとの考へでもあらうが、今一ツ工夫して簡單な態度でソレを表はしたなら、一層よく宇佐美其人の性格に合つたであらう。本日のやうでは聊か女々しい。河合の瀧口娘お加代、一體此女は親と共謀して盜賊を働くと云ふ程の者だから、如何に戀ひ人に邂逅して恥らう仕打としても、ドコかに腹があつてキックリした處がありたい。誰ジャラくしてあとないのみでは性格が定まならぬ。且セリフのねばつ苦しいのも舊芝居式に傾いて却つて好くない。深澤の瀧口下部宗平、顏を見るからが可笑しい。殊に舊芝居の道化の如く外面に騷ぎ立てず、內面に魯鈍を含めた處は好い工夫である。佐藤の三好侯爵嫡男邦麿、慥かに一種の人格が成就されて居た。コヽへ來ると舊役者では腹の底まで斯うもボッチャン的書生になつてしまへぬ。橘の藝妓小まんは小川の小六よりも女となつて居て且別嬪だ。尤も東京より邦麿に連れられたのではなさゝう。

二幕目三好侯爵邸の場　坐敷の粧飾が派手過ぎて、妓樓の大坐敷めいたかと思へど、新劇の演藝は寫實である丈ソレ丈淋しくなるから、此位にして覽客の眼を引くも好からう。處でコヽへ會合する主客六人の華族は一體如何

大名や公家の人々とは思はれぬ。左らば明治の成り上り華族かと云ふに、代々の家憲など、話し合つて居て、又サウでもなさゝうだ。畢竟俳優達が未だ社會諸種の實況に就き吟味が足らぬからコンなものも出來るので、舊芝居なら格別、苟も寫實を標幟として起つた新劇が華族の起居言語の如何なるものかも辨へぬと云つては口惜しい次第だ。自今何卒此等の點には十分吟味を遂げられたい。今日の世だから實地を見聞する機會は幾らもあるであらう。五味の侯爵三好基邦、老將軍などの成り上り華族とすれば、豪宕で健實な音聲は可也物になつて居る。宇佐美が養子を承知せぬと聞いて立ちながらの一哭も先づ耐へた。內山の家從下川甑負、味噌用人丈は出來た。石田の夫人、關の令孃、磯野の寶石商、いづれも前幕と替つた感もない。但し夫人と令孃とは衣服が紋付に改まつた爲め少々引き立つた。伊井の宇佐美、コヽでも十分變り物の性格を表はして居た。此人丈はコヽが大名華族の座敷だとしても、其未家たる品位は保てる。佐藤の邦麿、前幕よりは精神が入るから一層性格も發揮された。尤も舊大名の若君ではなく、老將軍が教育を怠つた結果の駄々ッ子と云ふ方である。伯子男の諸氏、五人が五人老人なのは如何。親族會議で集まる中には壯年の戶主もあるべき筈。又光景や興味の上から云つても、黑頭と白頭と入り交じり、老人と壯者と意見を戰はした方が面白からう。此五人中、何でも蚊でも賛成の道化的一人の外、其他差たる區別も見なかつたから、此諸氏に就ては評を缺ぐ。

三幕目上野原山莊の場　コヽの道具立は一入凝つて奧深き谷川、正面に横はる土橋、下手の山路、上手の山莊舊芝居などでは容易く見られぬ結構である。尤も物持と稱する瀧口の住宅なら、今少し綺麗でも好いに、存外麁

末て山中の安宿めいて居たのは如何。高田の瀧口重造、甲州產の惡黨としのて柄もあり、セリフのキッパリした處も其人物に適つて居た。娘に對する威嚴、妾の父なる無賴漢に對する度量、共に透きがない。終りに二階から妾の情夫へ金を投げ與ふるシグサは、やゝ舊芝居式だとは云へ、是れ丈の事がなくては此幕が引けまい。河合のお加代、洗ひ髪で白梅一枝を持つた姿は、前幕より數等の美艶で、眞に畫中の人であつた。又父の妾をいぢめ併せて父をもいぢめると云ふねぢけ根性も十分に受け取れた。但し其言ひ草と口氣が十二三歳以下の少女らしいに反して、打扮は十八九歳二十歳以上に見えるのは如何。若し舊役者の如く背が殺せず顏が作れぬと云ふなら、言ひ草や口氣の方を今少し大人びしめるが好からう。コヽどちらかに定めねば、あたら美人の品評に差支へる。又父が「商賣だ」と云ふ聲の下、忽ち氣を替へてトン〳〵と土橋を走り行き、川向ふに注意するシグサは、僕飛びつくやうに好かつた。好かつたは好かつたが舊芝居として好かつたので、新劇では餘りに仰山だ。ナゼなら、親子近接しての密談が水音の騷がしい向ふ岸まで屆く恐れはない。ないのもありとする、ソコが舊芝居、ないのはないとする、ソコが新劇と、僕は思ふのである。木村のお八重の父勘兵衞、「夏祭」の儀平次肌としてよく出來た。瀧口の與へた金をウッカリして居る娘の手より横取りするシグサも澁い。されどコヽが新劇の舞臺だと氣付くと又例の疑問が起りさうだ。木下の瀧口妾お八重、新宿の女郎あがりとしてはおとなし過ぎるが、身賣りをして間もなく引かされたものとすれば先づ好からう。比女の性格に就ては尙後に云ふことがある。藤澤の中谷貢、舊芝

で子供らしい聲氣は、僕大いに歡迎した。併し術と云つてもコヽ少々手加減は誰れにも學べるものでない。ドコ迄でも小波家の一子相傳だ。一般の人にはまだ〳〵數層膏ッ濃い態度語調でなければ、己れも出來ず、人も納得せまい。而して氏の話題の相も替らぬお伽話であるに拘はらず、始めより終りまで、時々笑聲を洩らすの外、一坐がヒッソリとして聽聞して居たのは、實に不思議千萬。コレぞ大人殊に大學者大文士達の頭を撫でゝ「ネン〳〵やー」とあやなさるゝ、氏が一大妙術の効果に外ならぬ。敬服歎服。

第七は愈々雅劇の「妹背山」であつたが、思つたよりも舊套で、新劇は愚か、活歷よりもまだ古るく、矢張歌舞伎ッ居の方に傾いて居たやうなのは却つて恐悅至極である。卽ち其科も白も輪廓は概ね歌舞伎で、唯內容のみが小變化をして、而して事實が奈良朝時代だと云ふ丈のやうであつた。尤も奈良朝時代の男女の音容は今より知れねど、德川時代の言語等に當て箝められた習慣のある科白へ、萬葉集を讀むやうな言語等を當て箝めるのであるから、一寸滑稽的に感ずるが、是れは吾人が耳目の罪で、何も此の如き科白が德川時代とのみ限らるゝ譯はない此科白で奈良朝は勿論千早振る神代の言語等を當て箝めても好いのである。ナゼなれば言語等こそ時代を追つて違へ、人間の人間たる事實に於ては古今何等の相違もないからである。又此雅劇より推して、芝居の科白は如何に變化せんとするも、サウ突飛な事の出來ぬと云ふことも分かる。全然寫實なる新劇は格別、人間を土臺として藝術的理想を加味した科白は、何程變化しても或る圓形をグル〳〵廻るに過ぎぬのである。尙僕が舊癖の頭では此雅劇にも典雅なる文章の地を入れて、高尙なる音樂でソレを歌つて貰つたら、如何に光景が活動し、趣味が增

加するであらうと思へど、モー云ふが管、已みなん哉〳〵。兎角演者諸氏のヨヽまでの御工夫と御修練とは恐れ入つた次第である。唯惜しいことには席が席で、立てば頭が殆んど鴨居に隠れ、坐はれば身の半分が前の觀客の陰になると云ふ有様だから、折角の妙藝も一半朧ろ〳〵に歸した。ドウか他日は本式の舞臺で更に十一分驥足を展べられんことを望むのである。尚序に一事云ふが、佐伯刀自が雛媛の首を打つ時短劍を用ひたのは頗る不審に蓋し女性であるから平常嗜なみの後世で云ふ懐劍やものを使用せしめた考へでもあらうし、裝飾萬端はサゾ時代に合つて居ることでもあらうが、事實上首は容易く打てぬもので、迚も個様な器では其役に立たぬ。尤も平治物語の鎌田政家が主君の姫を介錯する時の如く、二刀刺して首を取ると云ふ順序に掻き首ならば好いが、刀自が翠簾より半身露出の擧動では、慥かに長劍で首を打つと同様に見えた。是れでは如何に大力でも名劍でも、又優しい女の首でも、決して切り放てるものでない。因ては今後此場合は、刀自の全身を隠して擧動の何たるを知らしめぬことゝするか、又は舊來の「妹背山」の如く、矢張亡夫所用の長劍を用ふることゝせらるゝが宜しからうと思ふ。如何。

第八は逍遙氏作「浦島」を長唄節附で、唄は杵屋伊十郎、三味線同六左衛門、ソレに下方も皆屈指の達人と云ふのだから、實に華々しく賑々しいことで、坐中の喝采も非常であつた。

此次ぎ〳〵にはまだ狂言の「衣大名」史劇の「時鳥孤城落月」喜劇の「誕生日」と云ふやうに、大分面白さうなも

酸瓦斯は漸次坐中に充ち〳〵たから、僕は何分頭が苦くなつて、遺憾ながら退出した、廊下を通る時丁度狂言の賴うだ人が坐敷へ出るのと行き逢つたが、例の「遣るまいぞ〳〵」とも何とも云はなかつた。呵々。

本郷座野火の評

三月五日僕は本郷座の新劇「野火」を觀た。僕は從來芝居好きでるに拘はらず、新劇には疎とかつた。全く觀ぬでもないが、染々注意して觀たのは今度が始めである。始めで居て批評などは如何だけれども、少々許り所感を述べて見よう。有體に云へば、僕の頭には舊芝居の趣味が先入して居る。先入はして居るが、此先入の標準で新劇を律する心得はない。否、新劇はドコ〳〵までも舊芝居の範圍以外に立場を持たせたく、又立場を持たねばならぬものと考へて居るので、左もないと、肝心の新劇と云ふ特色が認められず、新劇として起つた甲斐がないことになるからである。然るに本日觀た處では、存外僕が新劇に嘱望する點に於て飽き足らぬものがあつた。ソレは第一に科白で、舊芝居の方は務めて表情を極端ならしめ、又音曲に連れて語調を取り動作を整へ、尚ほ繪畫的に位置態度を寫すのであるから、其結果は概ね人間實際の狀況と相違して、而かも其の相違した點に一種の藝術美を示すのであるが、廣汎なる藝術美は敢て是れのみに限るべきでない。人間實際の狀況其儘を寫した言語動作

の上に於ても、更に別種の藝術美は示さるべき筈。隨つて舊芝居の傍系として既に生世話や活歴などゝ云ふものが起つて居たけれども、彼等は未だ全くの寫實と云はれぬ。ソコで斷然舊芝居の羈絆を離れて、十分に寫實の新軌軸を出すべき資質と機會と勢力とを兼ね持つて居るものは新劇であるのだ。然るに本日此「野火」の或る役や或る場合などに於ては、間々人間の實況と相違するが如き言動も見え、又態とあらしく繪畫的の光景を寫すが如き樣を見た。是れ僕が甚だ遺憾とする所である。尤も新劇が最初壯士芝居と呼ばれた頃は、慥かに眞率なる寫實的であつたやうに思ふが、伎倆の修熟と共に、其方面が聊か舊芝居の方へ傾きはせぬかと恐れる。若しもサウでは生世話や活歴と五十步百步の間となるのみならず、到底彼等と壘を對する特色は保てぬことゝなる。故に今に於て斷然此の如き傾向を改め、本來の軌軸の上に於て多々益々修練と工夫を加へさせたく思ふのである。第二は演ずる所の人物の性格で、舊芝居は所謂和事、敵役、道化、濡れ事、其他何々と專ら通性を定め、ソレを各種の藝題脚色中へ採用するのであつて、其人物と人物の個性に於ては殆ど著き區別がない。尤も生世話となると較々個性も表出され、活歴は流石に歴史の古人を摸倣するのだから更に多くの個性が見えて居る。けれども、是れとて主人公其他重もなる人物に就いて云ふので、周圍一般の人物となると矢張舊芝居と大差がない。因ては此の如き舊慣を改め主人公は勿論、隅から隅まで人物の個性を發表し、而かもソレが幕々一貫して聊かも不自然なる變動を見せぬと云ふ用意は、卽ち新劇に向つて責望するより外はない。然るに本日は此點に於ても未だ十分の滿足を得

點があつた。尙ほ此等の諸點を始め其他事實に當つての批評は、一幕一幕の條に於て述べることゝせう。兎角壯士芝居壯士芝居と呼ばれた聲がまだ吾人の耳に殘つて居る此僅々の年間に、是れ程の人氣を博し盛況を取つたと云ふことは、實に驚くべき新劇の成功である。故に僕は此の如き新劇に向つては自今愈々益々完全の發達を要望せねばならぬ。

序幕熱海梅園の場　舞臺の大道具立は流石に凝つたもので數株の老梅が樓栂として丘上に蟠り、其丘上より藍の如き海面を望む光景などは、觀客までも心逝く感がした。殊に此海の景であるが、舊芝居では唯申譯までに書割へ現はし、舞臺に出た人物は終始ソレに無關係、甚しきは鈴ヶ森で題目の碑の後へ海を描き、長兵衛や權八はアベコベに向いて話しをすると云ふやうな妙な有樣もあるが、此新劇では此海の眺望を閑却せず、人々が概ね一度は其方を向いて景色を賞讃するのは、一寸した事だけれども、實際に注意した點である。又時々人の頭が誤つて梅の枝に觸るゝなども、舊芝居には見ぬ細かさだ。石田の三好侯爵夫人岸子、關の令孃久子、共に品格が乏しい。成り上り華族の妻子とすれば先づ好いが、責めて令孃には髮や衣服など今少し美麗に飾らせたい。或はイッソ大廂髮紫袴に靴履きと云ふ風にいでたゝせたら、顏色は詮ないとしても、幾分の姿態を加へたであらう。此姫君では哲學者宇佐美ならぬ凡人でも、冷然として緣談を止めることが出來さうだ。花園の三好の侍女おます、無難。磯野の寶石商榎本金藏、齒の浮くやうな語調、ノロリッとした態度は、慥かに此の如き人物が世界中に一人

はあらうと思はれた。犬村の杉浦貫次、眞率淡泊なる性格は十分に受け取つた。伊井の宇佐益祐光、容貌にも品致あり、哲學者一面畸人たるの腹もあり、科白がドコまでも寫實の歩武を取つて居るに拘はらず、一言一動シツクリと締まつて、舞臺の上に生えたやうに見えるのは、流石に主人公の貫目である。但しお加代に出合つて後、獨り梅樹の下に立つての沈思は、餘りに時間が長く念が入り過ぎる。此位にせぬと覽客の注意を引かぬとの考へでもあらうが、今一ッ工夫して簡單な態度でソレを表はしたなら、一層よく宇佐美其人の性格に合つたであらう。本日のやうでは聊か女々しい。河合の瀧口娘お加代、一體此女は親と共謀して盗賊を働くと云ふ程の者だから、如何に戀ひ人に邂逅して恥らう仕打としても、ドコかに腹があつてキックリした處がありたい。誰ジャラくしてあどないのみでは性格が定まならぬ。且セリフのねばつ苦しいのも舊芝居式に傾いて却つて好くない。深澤の瀧口下部宗平、顔を見るからが可笑しい。殊に舊芝居の道化の如く外面に騒ぎ立てず、内面に魯鈍を含めた處は好い工夫である。佐藤の三好侯爵嫡男邦麿、慥かに一種の人格が成就されて居た。コヽへ來ると舊役者では腹の底まで斯うもボッチャン的書生になつてしまへぬ。橘の藝妓小まんは小川の小六よりも女となつて居て且別嬪だ。尤も東京より邦麿に連れられたのではなさゝう。

二幕目三好侯爵邸の場　半敷の粧飾が派手過ぎて、妓樓の大半敷めいたかと思へど、新劇の演藝は寫實である丈ソレ丈淋しくなるから、此位にして觀客の眼を引くも好からう。處でコヽへ會合する主客六人の華族は一體如何

大名や公家の人々とは思はれぬ。左らば明治の成り上り華族かと云ふに、代々の家憲など、話し合つて居て、又サウでもなさゝうだ。畢竟俳優達が未だ社會諸種の實況に就き吟味が足らぬからコンなものも出來るので、舊芝居なら格別、苟も寫實を標幟として起つた新劇が華族の起居言語の如何なるものかも辨へぬと云つては口惜しい次第だ。自今何卒此等の點には十分吟味を遂げられたい。今日の世だから實地を見聞する機會は幾らもあるであらう。五味の侯爵三好基邦、老將軍などの成り上り華族とすれば、豪宕で健實な音容は可也物になつて居る。宇佐美が養子を承知せぬと聞いて立ちながらの一哭も先づ耐へた。内山の家從下川勘負、味噌用人丈は出來た。石田の夫人、關の令孃、磯野の寶石商、いづれも前幕と替つた感もない。但し夫人と令孃とは衣服が紋付に改まつた爲め少々引き立つた。伊井の宇佐美、コヽでも十分變り物の性格を表はして居た。此人丈はコヽが大名華族の座敷だとしても、其未家たる品位は保てる。佐藤の邦麿、前幕よりは精神が入るから一層性格も發揮された。尤も舊大名の若君ではなく、老將軍が教育を怠つた結果の駄々ッ子と云ふ方である。伯子男の諸氏、五人が五人老人なのは如何。親族會議で集まる中には壯年の戸主もあるべき筈。又光景や興味の上から云つても、黒頭と白頭と入り交じり、老人と壯者と意見を戰はした方が面白からう。此五人中、何でも蚊でも賛成の道化的一人の外、其他差たる區別も見なかつたから、此諸氏に就ては評を缺ぐ。

三幕目上野原山莊の場　コヽの道具立は一入凝つて奥深き谷川、正面に横はる土橋、下手の山路、上手の山莊舊芝居などでは容易く見られぬ結構である。尤も物持と稱する瀧口の住宅なら、今少し綺麗でも好いに、存外麁

末て山中の安宿めいて居たのは如何。高田の瀧口重造、甲州産の惡黨としのて柄もあり、セリフのキッパリした處も其人物に適つて居た。娘に對する威嚴、妾の父なる無賴漢に對する度量、共に透きがない。終りに二階から妾の情夫へ金を投げ與ふるシグサは、やゝ舊芝居式だとは云へ、是れ丈の事がなくては此幕が引けまい。河合のお加代、洗ひ髪で白梅一枝を持つた姿は、前幕より數等の美艶で、眞に畫中の人であつた。又父の妾をいぢめ併せて父をもいぢめると云ふねぢけ根性も十分に受け取れた。但し其言ひ草と口氣が十二三歳以下の少女らしいに反して、打扮は十八九歳二十歳以上に見えるのは如何。若し舊役者の如く背が殺せず顔が作れぬと云ふなら、言外草や口氣の方を今少し大人びしめるが好からう。コヽどちらかに定めねば、あたら美人の品評に差支へる。又父が「商賣だ」と云ふ聲の下、忽ち氣を替へてトン〳〵と土橋を走り行き、川向ふに注意するシグサは、僕飛びつくやうに好かつた。好かつたは好かつたが舊芝居として好かつたので、新劇では餘りに仰山だ。ナゼなら、親子近接しての密談が水音の騷がしい向ふ岸まで屆く恐れはない。ないのもありとする、ソコが舊芝居、ないのはないとする、ソコが新劇と、僕は思ふのである。木村のお八重の父勘兵衛、「夏祭」の儀平次肌としてよく出來た。瀧口の與へた金をウツカリして居る娘の手より横取りするシグサも澁い。されどコヽが新劇の舞臺だと氣付くと又例の疑問が起りさうだ。木下の瀧口妾お八重、新宿の女郎あがりとしてはおとなし過ぎるが、身賣りをして間もなく引かされたものとすれば先づ好からう。比女の性格に就ては尙後に云ふことがある。藤澤の中谷貢、舊芝方下ヤ〳〵と正面の土橋を通る處は新手だ。中谷とお八重の關係を賭して先頭の一人が奇態な思入も舊芝居以外の妙があつた。

四幕目宇佐美家寐室の場　吝な舊式の二重や書割などを見慣れた僕の眼には此舞臺に至つて、何たる奢りかと哲學者たり畸人たる宇佐美の居宅としては餘りに美麗過ぎて、全くハイカラ公のベッドルウムだ。尤も此幕は一日中の骨子だから、觀客の眼を引く爲め已むなく個樣にしたとの言ひ譯もあらうが、ソレなら所々の雨漏りの痕も止めてしまふが好い。雨漏りと室中の裝飾、殊に諸般の器具とは、よし人格の關係を忘れたとしても、舞臺の光景上既に調和が取れて居ぬ。だが此劇中の美男と美女がコヽで百年偕老の契りの種を時くと云ふのだから、萬事は眼を眠つて粹を通さう。左もないと岡燒きの嫌疑がある。呵々。伊井の宇佐美、愈々餘蘊なく其性格を發揮された。或は論旨や口氣がやゝ世俗的などの批難もあらうが、元來斯人は超然たる厭世主義で人間を蟻虫視する方でなく、社會と同情し社會の墮落を救はふと云ふのだから此位の膏は乘て居て好い。只一事云ふとお加代が自分を慕ふと知り身を搖るがしての呵々大笑は、餘りに淡泊過ぎる。ナゼなら、自分も嘗て多少の心は動いた女、其女から此言を聞くのだから、如何に盜賊と知たつとは云へ、サウ淡泊一偏には行けぬ。又戀ひは置いて、平生の主義から云つても、此の如き場合は愈々以て人間の愚を愍み、一掬の涙がなくてはならぬ。兎角此場の大笑と序幕梅園の沈思とは、演者のシグサに厚薄濃淡を誤用して居はせぬかと思ふ。但しお加代を送つて再び立ち戻ると顎飾の失せたので、思はず腰を椅子に落し、吐息して失望し且お加代を愍むらしい思入は、僕慥かに承知した

河合のお加代、コヽでも言ひ草や語調や乃至態度が餘りに幼女になつてしまつて、打扮の年齢と一致せぬ。爲めにあたら美艶窈窕たる女主人公も僕十分の同情を寄せ得なかつた。佐藤の邦麿、舊芝居なら頸飾を手に取つた時獨り言を云ふか或は十分な思入位はある筈だが、サラ〳〵と歩んで返らうとし、足音に驚いて帷帳の陰に隱れる處、成程コヽ等が新劇だと合點した。

五幕目侯爵庭園の場　諸役一通り出來て居て、別段云べき點がなかつたから評を略す。

六幕目上野原祭禮の場　高田の瀧口、コヽは前幕より更に一等よく稱つて殊に中谷に對して簡勁刺すが如き言語は、見て居る僕までゾッと震へた。然るに藤澤の中谷は思つたより耐へが薄く、耻るのか恐るゝのか悔しいのか、表情が不得要領だあつた。勿論此三つの心を兼ねた考へでもあらうが　外面にはナンだかまだ其感が透徹せぬ。又或る表情の點は妓樓などで敵役に嘲けらるゝ色男の悔しみと云ふ風も見えたが、コヽは人の妾となつて居る女との關係だから、曲は自己にある。隨つて彼の腹も違はねばなるまい。僕の考量では、斯かる場合に於て、耻ぢと恐れが七八分悔しみは二三分と云ふ位が普通人の感であらうと思ふに、藤澤のは悔しみが一番勝つて居たやうだ。ソレでは理否を辨へぬ邦麿的の役に落ちはせぬかと思ふ。木下のお八重、前幕で少女お加代にいぢめられてさへビク〳〵した女が、情夫との出合ひを主人に見付けられ、其怒喝に逢ひながら、存外無感覺に見えるのは妙だ或は外面をゴマかして內心太て〳〵しい奴かとも疑はれる。コヽは何とか工夫して性格を一定して貰ひた

い其役の心は慥かだ。

六幕目山中古塔の場　大道具は實はスバラシイもので、丹碧の剝げた浮圖、陰鬱なる老杉、ソレへ梟の啼き聲を聞かせた處は、鬼氣先づ舞臺に滿つると云つて好い。實地に火を放つて煙筒を晴出せしむる仕掛けは、「血滝摩」の左團次も遣つたのであるから左程珍しくはないが、塔上に男女を置いて下よりソレを燒き殺すと云ふ慘事は、思ひ切つた趣向であつた。斯く諸般の意匠を凝らされたに拘はらで、役々には僕はいづれも滿足し難い點がある。瀧田の高口、是れまでは如何にも度胸のある大惡魔で、深沈の中に陰險殘酷を蓄へた性格は、一言一動によく表はされて居たが、此幕に至つて意外にも淺薄輕躁なる一凶徒になつてしまつた。中谷とお八重とが度々の密會に怒りを發し怒りの餘りに燒き殺すと云ふは、瀧口として もあり得べきことで、聊か不自然はないが、ソノ密會を知ると同時に、イッもの沈着と違つて俄かに狂ひ出し、胸の悶へを紛らす積りか頻りに酒をあほり、果ては二人に對して大聲揚げて嘲弄罵詈し、又アチらへ駈け廻り、殆ど一所に安着し得ぬと云ふ有樣は、如何に怒りが強いとは云へ餘りに大變りの擧動で、裏店の土方などが不義者見付けたと騷ぐと同樣である。是れまでの瀧口の性格なら、態と而に冷笑を湛へ、相替はらず簡勁の語を以て二人を詰り、今度は赦さぬと云ふ心を言外にほのめかし二人が如何に哀訴しても悲號しても空吹く風と聞流し、靜かに燒き殺しの支度を爲し、若し酒を飲むなら、火の燃え揚り二人の苦叫する時、悠々と眺めながらあほると云ふ風にあらねばならぬ。本日の遣り口では舊芝居で云ふなら、最前の立敵がコヽへ來て俄かに二枚目敵へ役を落したも同樣で、性格の一貫を尙ぶ新劇としては甚だ不都

合であらう。折角辯り役の高田の事だから今一考を費やして貰ひたい。藤澤の中谷、此場合になつてもまだ眞面目に辯解して、命を許さるるのみか、洋行乘船の時間まで違へまいと思ふのは、餘りに勝手で馬鹿々々しく痴漢宗平などなら格別、銀行員でも勤める若う人には如何にも不似合な考へである。木下のお八重、此幕では一層解すべからざる女となつた。否、解すれば大々惡婆で、瀧口の上を行く奴と云つて好い。ナゼなら、隱れ終ふせぬと知つてから、平然と姿を現はし、チヤホヤした口調で階子を求むる度胸、瀧口ならぬ僕でさへ横面が張りたく思つた。コンな風に二人が二人常識を缺いた擧動であつたから、僕の同情は寧ろ瀧口の方へ注いで、嬲き殺しの慘も左程慘を感じなかつた。ソレから終りに宗平が出て瀧口に殺さるゝのは好いが、瀧口の自身の切腹は實に不自然だ。コンな山中で人の三人位殺したからとて、大惡魔が態々死ぬる了簡を起す筈はない。若し他に原因があると云ふなら、ドコかでそれが分かつて居ねばならぬ。單に高田が立腹切の技藝を見せたいと云ふのが原因位では、神聖なる劇に對して之を何とか言はん。吁。

切幕伊賀國山吹里の場　紅桃白桃交加して開き樹根の山吹の黃はソレと色を映對し、芊々として煖かな草、翩々として飛ぶ蝶、見るから人間の汚塵を離れ、恍として仙界に遊ぶ想あらしむるは此の舞臺の道具立である。而してコヽを占領して居る仙客は誰れかと思ふと、伊井の宇佐美と河合のお加代が龜の如く蹋み鶴の無く痩せた偕老の果だ。半生の履歷を夢話しにかこつけて觀客に告げる趣向は最も好いが、是れ程の理想境としては人物の品

は及ばぬ。又老人夫婦が手を取り合つてのシグキとセリフも、寫實と理想がチヤンポンに入り込んで、ナンだかサツパリ要領を得ぬ。要するに此の幕は作者も演者も想はあつたが手段が屆かず、好い加減にして舞臺へ上ぼせ若し觀客が小言を云はゞ、桃山吹の色に醉はせ、蝶の翅に眩かせ、霞の幕で一網打盡に籠絡してしまへば濟むとの大膽計畫ではあるまいか。コンナ美しいやうで醜いやうで、舊芝居の如く、新劇の如き、鵺的脫色の大切幕を觀せらるゝことは、書割りの臥牛ではないが、モー〳〵今度限りて御免々々。

舊劇談片

三十九年一月「しばゐ」と云ふ雜誌が發刊さるゝので其關係者なる匏瓜氏筆記で僕が舊劇談と云ふを出したが此雜誌は脆くも一號限りでお止めとなり、二號の料に宛てた舊劇談の續きは原稿の儘匏瓜氏手元に存して居たのを此頃返却されたから、再閲するに、最前は少し爲めにする所もあつて主張の極端を免れぬ點もあるが、所謂雞肋の思ひで反古にするも惜しく、聊か自から刪潤を加へて玆に載することゝした。近來はよく芝居熱に浮かさるゝやうだが、春先きの氣候の爲めでがなあらう。

諺に好い景色や又美人などと見ると畫のやうだと云ふことがあるが、是れは美的理想の半面を能く現はして居る言葉であつて、畫は固より實際の景色人物を寫すものだが、之を寫すに當つて多少實際と離れた點がある。其離れた點が畫の特質の存する處で、若し畫と實際と同一であるならば實際の物を畫のやうだと云ふ筈はない。畫と實際と違つて居ればこそ畫のやうだとも云ふのである。而して畫は實際と離るゝと同時に實際よりも多き美を持つのである。ソコで畫に於て特に主要とする所は色彩の配合と事物の位置等である。此色彩の配合と事物の位置等を標準として、人物の顏色や、衣裳や、位置や、態度や、其他あらゆる景狀を當て篏めて、而かもソレに活動を與へたのが舊芝居である。故に舊芝居も亦畫の如く實際と違つて居るべきは勿論で、其違つて居る點にこそ舊芝居の美は益々發揮さるゝのである。隨つて其筋立とか、人格とか、幕々の變化とかも此畫の標準に依て組み立てられて居る。極言すれば舊芝居は光景の描寫が第一、其他の脚色は第二と云つても好いのである。サレば幕が開いて先づ眼に入るもの、卽ち舞臺の書割、屋臺、釣花、一切の大道具小道具で、一として畫の如く構へられて居ぬものはない。而してソコへ種々なる色彩の人物が出でゝ、或は立ち、或は座はり、或は周旋規の如く、或は折旋矩の如く、夫々に趣を充たして居る。又一人が二重の上手へ罷り通れば　一人は二重の下の下手へ平伏し上下左右程好く對照を取る。一方は疊の上一方は地べたの譯だけれども、ソコは全く忘れて、可惜ら振袖も裲襠も土を引き摺つて居る。又二人がこゝを先途と切り結ぶ場合でも、互に相手の方は向かず、イツも正面へ觀客の方を向いて、恰も恭しく恐ろしく白面、一赤一白二色の如く寢つて居る。又一人が木綿の布子を引き拔けば忽ち鬱鬱の四天となり、淡濃一變、光彩陸離、ソレを機敷も土間もドッと喝采して居る。要するに幕開きより幕の終りまで、活動したる繪畫を以て絕えず人の眼前に陳列し變化せしむるものが卽ち舊芝居である。此の如くなるが故に觀客は先づ以て其畫的美に恍惚し、其恍惚たる心を以て所演の技藝に對するのだから、一喜一怒一哀一懼容易く同情同化して、呵々の笑ひ、潸々の涙、見め今昔の世に接し、夢の如く幻の如くに一大娛樂を享受するのである。舊芝居の美たる、又其手段たる實に巧妙極まるではないか。

右は原稿の一段落だが先づ是れ丈に止めて置く。

野火の餘論

「野火」の宇佐美寢室の場で、お加代が宇佐美の說諭を聞いて飜然改心する處に至り、觀て居た虛子氏はドウも改心が容易で不自然だと云ふ、僕はアレで改心の動機は十分だと云ふ。遂に意見が折れ合はずにしまつたが、其後「日本」紙上で碧梧桐氏も亦虛子氏と同樣の評を揭げられて居た。二氏が斯うだとすると、今日の世間にはまだ餘多の同說もあるであらう。孰れは此改心の一條に村き少々愚見を述べて諸君に質するも亦不必要であるまい。

神が造つたか猿が進化したかの問題は暫く措き、數千萬年來社會共存の下に生活しつゝある人間は、其必需上善

惡是非を識別し、ソレに從つて去就を決する能力が出來た。倫理宗教上より温かに云はゞソレが良心でもあらうし、理學上より冷かに見ても慥に祖宗子孫の腦から腦に傳ふる一種の惰力である。此能力卽ち本能たるや、習慣に依り境遇に隨つて人々の分量は異なれども、一人として全く缺くる者はない。缺くる如く見えるは他力の壓迫に依つて潛伏したるに過ぎぬ。尤も潛伏の久しき遂に絕滅したる者がないとも限らぬが、ソレはあつたとても極々少數の人で、多數の人間に至つては少くとも潛伏的本能丈はイツも持つて居る。既に本能が潛伏せる上は、一人一生の間は勿論、假令へ祖孫數代を隔つるとも、他よりの壓迫一たび除かるゝ時は、直ちに發動も舊態に復する。彼の間歇遺傳などゝ或る物に付て云ふのも此理法に外ならぬのだ。扨此理法又事實上より推し行けば、本問題たるお加代の改心に於ても左程重大なる動機を要せねばならぬと云ふ筈がない。此の如く說諭して此の如く改悛したるは當然の結果で聊か不自然もないのだ。尤もお加代を以て右本能絕滅の少數部分とするならば或は不自然とも云はれうが、本劇中お加代に於て未だ左樣の極端性格を認めぬ。否、命を救はれた事の關係より、宇佐美家に限り仕事の仕にくいと云ふ其心は、單に戀情の爲めのみでない。慥かに本能一點の燼火である。而して其心び込むのを決心したる如きは、父が誘惑の言恰も功を奏したので、是れ戀情の壓迫がソレを再び潛伏せしめたのである。左すれば此上の論點は、宇佐美の言が斯くも微々たるお加代の潛伏本能を發動せしむるに足りしや否やと云ふことに在る。成程宇佐美の言は普通有りふれたる倫理的講義に過ぎなかつた。サレど有りふれたと云ふは吾々の如く多少學問もして居る者から云ふので、世間の無學文盲者に取つては、マダ〳〵耳新しく有り難い御說教だ。中谷とお八重の關係を聞いて先頭の一人が奇怪な思入も舊芝居以外の妙があつた。

四幕目宇佐美家寐室の場　吝な舊式の二重や書割などを見慣れた僕の眼には此舞臺に至つて、何たる奢りかと哲學者たり畸人たる宇佐美の居宅としては餘りに美麗過ぎて、全くハイカラ公のベッドルウムだ。尤も此幕は一日中の骨子だから　觀客の眼を引く爲め已むなく個樣にしたとの言ひ譯もあらうが、ソレなら所々の雨漏りの痕も止めてしまふが好い。雨漏りと室中の裝飾、殊に諸般の器具とは、よし人格の關係を忘れたとしても、舞臺の光景上旣に調和が取れて居ぬ。だが此劇中の美男と美女がコヽで百年偕老の契りの種を時くと云ふのだから、萬事は眼を眠つて粹を通さう。左もないと岡燒きの嫌疑がある。呵々。伊井の宇佐美、愈々餘韻なく其性格を發揮された。或は論旨や口氣がやゝ世俗的などの批難もあらうが、元來所人は超然たる厭世主義で人間を蟻虫視する方でなく、社會と同情し社會の墮落を救はふと云ふのだから此位の膏は乘て居て好い。只一事云ふとお加代が自分を慕ふと知り身を搖るがしての呵々大笑は、餘りに淡泊過ぎる。ナゼなら、自分も嘗て多少の心は動いた女、其女から此言を聞くのだから、如何に盜賊と知たつとは云へ、サウ淡泊一偏には行けぬ。又戀ひは置いて、平生の主義から云つても、此の如き場合は愈々以て人間の愚を愍み、一掬の涙がなくてはならぬ。兎角此場の大笑と序幕梅園の沈思とは、演者のシグサに厚薄濃淡を誤用して居はせぬかと思ふ。但しお加代を送つて再び立ち戻ると頸飾の失せたので、思はず腰を椅子に落し、吐息して失望し且お加代を愍ひらしい思入は、僕慥かに承知した

河合のお加代、コヽでも言ひ草や語調や乃至態度が餘りに幼女になつてしまつて、打扮の年齢と一致せぬ。爲めにあたら美艶窈窕たる女主人公も僕十分の同情を寄せ得なかつた。佐藤の邦暦、舊芝居なら頸飾を手に取つた時獨り言を云ふか或は十分な思入位はある筈だが、サラ〳〵と歩んで返らうとし、足音に驚いて帷帳の陰に隱れる處、成程コヽ等が新劇だと合點した。

五幕目侯爵庭園の場　諸役一通り出來て居て、別段云べき點がなかつたから評を略す。

六幕目上野原祭禮の場　高田の瀧口、コヽは前幕より更に一等よく箝つて殊に中谷に對して簡勁刺すが如き言語は、見て居る僕までゾッと震へた。然るに藤澤の中谷は思つたより耐へが薄く、耻るのか恐るゝのか悔しいのか、表情が不得要領だあつた。勿論此三つの心を兼ねた考へでもあらうが　外面にはナンだかまだ其感が透徹せぬ。又或る表情の點は妓樓などで敵役に嘲けらるゝ色男の悔しみと云ふ風も見えたが、コヽは人の妾となつて居る女との關係だから、曲は自己にある。隨つて彼の腹も違はねばなるまい。僕の考量では、斯かる場合に於て、耻ぢと恐れが七八分悔しみは二三分と云ふ位が普通人の感であらうと思ふに、藤澤のは悔しみが一番勝つて居たやうだ。ソレでは理否を辨へぬ邦暦的の役に落ちはせぬかと思ふ。木下のお八重、前幕で少女お加代にいぢめられてさへピク〳〵した女が、情夫との出合ひを主人に見付けられ、其怒喝に逢ひながら、存外無感覺に見えるのは妙だ或は外面をゴマかして內心太て〳〵しい奴かとも疑はれる。コヽは何とか工夫して性格を一定して貰ひたい。敵役の心は隱かだ。

六幕目山中古塔の場　大道具は實はスバラシイもので、丹碧の剝げた浮圖、陰鬱なる老杉、ソレへ梟の啼き聲を聞かせた處は、鬼氣先づ舞臺に滿つると云つて好い。實地に火を放つて煙燄を晴出せしむる仕掛けは、「血達摩」の左團次も遣つたのであるから左程珍しくはないが、塔上に男女を置いて下よりソレを燒き殺すと云ふ慘事は、思ひ切つた趣向であつた。斯く諸般の意匠を凝らされたに拘はらで、役々には僕はいづれも滿足し難い點がある。瀧田の高口、是れまでは如何にも度胸のある大惡魔で、深沈の中に陰險殘酷を蓄へた性格は、一言一動によく表はされて居たが、此幕に至つて意外にも淺薄輕躁なる一凶徒になつてしまつた。中谷とお八重とが度々の密會に怒りを發し怒りの餘りに燒き殺すと云ふは、瀧口としてもあり得べきことで、聊か不自然はないが、ソノ密會を知ると同時に、イッもの沈着と違つて俄かに狂ひ出し、胸の悶へを紛らす積りか頻りに酒をあほり、果ては二人に對して大聲揚げて嘲弄罵詈し、又アチらへ駈け廻り、殆ど一所に安着し得ぬと云ふ有樣は、如何に怒りが強いとは云へ餘りに大變りの擧動で、裏店の土方などが不義者見付けたと騒ぐと同樣である。是れまでの瀧口の性格なら、態と面に冷笑を湛へ、相替はらず簡勁の語を以て二人を詰り、今度は赦さぬと云ふ心を言外にほのめかし二人が如何に哀訴しても悲號しても空吹く風と聞流し、靜かに燒き殺しの支度を爲し、若し酒を飲むなら、火の燃え揚り二人の苦叫する時、悠々と眺めながらあほると云ふ風にあらねばならぬ。本日の遣り口では舊芝居で云ふなら、最前の立敵がコヽへ來て俄かに二枚目敵へ役を落したも同樣で、性格の一貫を尙ぶ新劇としては甚だ不都

合であらう。折角箱り役の高田の事だから今一考を費やして貰ひたい。藤澤の中谷、此場合になつてもまだ眞面目に辯解して、命を許さるるのみか、洋行乘船の時間まで違へまいと思ふのは、餘りに勝手で馬鹿々々しく痴漢宗平などなら格別、銀行員でも勤める若う人には如何にも不似合な考へである。木下のお八重、此幕では一層解すべからざる女となつた。否、解すれば大々惡婆で、瀧口の上を行く奴と云つて好い。ナゼなら、隱れ終ふせぬと知つてから、平然と姿を現はし、チヤホヤした口調で階子を求むる度胸、瀧口ならぬ僕でさへ横面が張りたく思つた。コンな風に二人が二人常識を缺いた擧動であつたから、僕の同情は寧ろ瀧口の方へ注いで、燒き殺しの慘も左程慘を感じなかつた。ソレから終りに宗平が出て瀧口に殺さるゝのは好いが、瀧口の自身の切腹は實に不自然だ。コンな山中で人の三人位殺したからとて、大惡魔が態々死ぬる了簡を起す筈はない。若し他に原因があると云ふなら、ドコかでそれが分かつて居ねばならぬ。單に高田が立腹切の技藝を見せたいと云ふのが原因位では、神聖なる劇に對して之を何とか言はん。吁。

切幕伊賀國山吹里の場　紅桃白桃交加して開き樹根の山吹の黃はソレと色を映對し、芊々として煖かな草、翩々として飛ぶ蝶、見るから人間の汚塵を離れ、恍として仙界に遊ぶ想あらしむるは此の舞臺の道具立である。而してコヽを占領して居る仙客は誰れかと思ふと、伊井の宇佐美と河合のお加代が龜の如く跼み鶴の無く痩せた偕老の果だ。半生の履歷を夢話しにかこつけて觀客に告げる趣向は最も好いが、是れ程の理想境としては人物の品

は及ばぬ。又老人夫婦が手を取り合つてのシグキとセリフも、寫實と理想がチヤンポンに入り込んで、ナンだかサツパリ要領を得ぬ。要するに此の幕は作者も演者も想はあつたが手段が屆かず、好い加減にして舞臺へ上ぼせ若し觀客が小言を云はゞ、桃山吹の色に醉はせ、蝶の翅に眩かせ、霞の幕で一網打盡に籠絡してしまへば濟むとの大膽計畫ではあるまいか。コンナ美しいやうで醜いやうで、舊芝居の如く、新劇の如き、鵺的脫色の大切幕を觀せらるゝことは、書割りの臥牛ではないが、モー〳〵今度限りて御免々々。

舊劇談片

三十九年一月「しばゐ」と云ふ雜誌が發刊さるゝので其關係者なる匏瓜氏筆記で僕が舊劇談と云ふを出したが此雜誌は脆くも一號限りでお止めとなり、二號の料に宛てた舊劇談の續きは原稿の儘匏瓜氏手元に存して居たのを此頃返却されたから、再閱するに、最前は少し爲めにする所もあつて主張の極端を兎れぬ點もあるが、所謂雜肋の思ひで反古にするも惜しく、聊か自から刪潤を加へて玆に載することゝした。近來はよく芝居熱に浮かさるゝやうだが、春先きの氣候の爲めでがなあらう。

諺に好い景色や又美人などと見ると畫のやうだと云ふことがあるが、是れは美的理想の半面を能く現はして居る言葉であつて、畫は固より實際の景色人物を寫すものだが、之を寫すに當つて多少實際と離れた點がある。其離れた點が畫の特質の存する處で、若し畫と實際と同一であるならば實際の物を畫のやうだと云ふ筈はない。畫と實際と違つて居ればこそ畫のやうだとも云ふのである。而して畫は實際と離るゝと同時に實際よりも多き美を持つのである。ソコで畫に於て特に主要とする所は色彩の配合と事物の位置等である。此色彩の配合と事物の位置等を標準として、人物の顏色や、衣裳や、位置や、態度や、其他あらゆる景狀を當て嵌めて、而かもソレに活動を與へたのが舊芝居である。故に舊芝居も亦畫の如く實際と違つて居るべきは勿論で、其違つて居る點にこそ舊芝居の美は益々發揮さるゝのである。隨つて其筋立とか、人格とか、幕々の變化とかも此畫の標準に依て組み立てられて居る。極言すれば舊芝居は光景の描寫が第一、其他の脚色は第二と云つても好いのである。サレば幕が開いて先づ眼に入るもの、卽ち舞臺の書割、屋臺、釣花、一切の大道具小道具で、一として畫の如く構へられて居ぬものはない。而してソコへ種々なる色彩の人物が出でゝ、或は立ち、或は座はり、或は周旋規の如く、或は折旋矩の如く、夫々に趣を充たして居る。又一人が二重の上手へ罷り通れば　一人は二重の下の下手へ平伏し上下左右程好く對照を取る。一方は疊の上一方は地べたの譯だけれども、ソコは全く忘れて、可惜ら振袖も裲襠も土を引き摺つて居る。又二人がこゝを先途と切り結ぶ場合でも、互に相手の方は向かず、イツも正面へ觀客の方を向き、中ぶ赤面、一赤一白二色の幕を引き、ツと喝采して居る。又一人が木綿の布子を引き拔けば忽ち綿まで、活動したる繪畫を以て絕えず人の眼前に陳列し變化せしむるものが卽ち舊芝居である。此の如くなるが故に觀客は先づ以て其畫的美に恍惚し、其恍惚たる心を以て所演の技藝に對するのだから、一喜一怒一哀一懼容易く同情同化して、呵々の笑ひ、潸々の涙、見ぬ今昔の世に接し、夢の如く幻の如くに一大娛樂を享受するのである。舊芝居の美たる、又其手段たる實に巧妙極まるではないか。

右は原稿の一段落だが先づ是れ丈に止めて置く。

野火の餘論

「野火」の宇佐美寢室の場で、お加代が宇佐美の說諭を聞いて飜然改心する處に至り、觀て居た虛子氏はドウも改心が容易で不自然だと云ふ、僕はアレで改心の動機は十分だと云ふ。遂に意見が折れ合はずにしまつたが、其後「日本」紙上で碧梧桐氏々亦虛子氏と同樣の評を揭げられて居た。二氏が斯うだとすると、今日の世間にはまだ餘多の同說もあるであらう。孰れは此改心の一條に村き少々愚見を述べて諸君に質するも亦不必要であるまい。

神が造つたか猿が進化したかの問題は暫く措き、數千萬年來社會共存の下に生活しつゝある人間は、其必需上善

惡是非を識別し、ソレに從つて去就を決する能力が出來た。倫理宗教上より温かに云はゞソレが良心でもあらうし、理學上より冷かに見ても慥に祖宗子孫の腦から腦に傳ふる一種の惰力である。此能力卽ち本能たるや、習慣に依り境遇に隨つて人々の分量は異なれども、一人として全く缺くる者はない。缺くる如く見えるは他力の壓迫に依つて潛伏したるに過ぎぬ。尤も潛伏の久しき遂に絕滅したる者がないとも限らぬが、ソレはあつたとても極々少數の人で、多數の人間に至つては少くとも潛伏的本能丈はイツも持つて居る。既に本能が潛伏せる上は、一人一生の間は勿論、假令へ祖孫數代を隔つるとも、他よりの壓迫一たび除かるゝ時は、直ちに發動も舊態に復する。彼の間歇遺傳などゝ或る物に付て云ふのも此理法に外ならぬのだ。扨此理法又事實上より推し行けば、本問題たるお加代の改心に於ても左程重大なる動機を要せねばならぬと云ふ筈がない。此の如く說諭して此の如く改悛したるは當然の結果で聊か不自然もないのだ。尤もお加代を以て右本能絕滅の少數部分とするならば或は不自然とも云はれうが、本劇中お加代に於て未だ左樣の極端性格を認めぬ。否、命を救はれた事の關係より、宇佐美家に限り仕事の仕にくいと云ふ其心は、單に戀情の爲めのみでない。慥かに本能一點の燼火である。而して其心び込むのを決心したる如きは、父が誘惑の言恰も功を奏したので、是れ戀情の壓迫がソレを再び潛伏せしめたのである。左すれば此上の論點は、宇佐美の言が斯くも微々たるお加代の潛伏本能を發動せしむるに足りしや否やと云ふことに在る。成程宇佐美の言は普通有りふれたる倫理的講義に過ぎなかつた。サレど有りふれたと云ふは

敬に當るのだ。況してや甲斐の山中に生れ、盜賊の家庭に育ち、盜賊學問の外何も知らぬお加代の身には、此明確にして威嚴ある言說は、臍の緒切つて始ての大霹靂であつたらう。諺に惡に强きは善にも强しと云つて、惡一方に向つて居た勢力を一旦他方に轉ずる時は、なまなか半善半惡の凡人よりも善に赴くことの幾倍强烈なのも事實だ。又理學上から云つても容易に證明さるゝ力の理法である。尙一歩を退けて、宇佐美の言說其物は到底個程の價あるものでなかつたとしても、此無價の言がお加代に向つては特別に効驗を有すべき原因がある。ソレは云ふまでもない卽ち戀である。戀の前には勇者も怯に、賢者も痴に、慾もなく得もなく乃至盜心もない。就中戀に依つての心性の感動は婦女子に於て最も甚しい。彼の情郎一片の言は以て美人千行の紅涙を絞らせ、百年の生命をも短縮せしむるに足るは珍らしからぬ事實だ。サレば宇佐美の一言一句は如何に平凡常套のものでありとも、お加代の眼には初日の昇るが如く輝き、お加代の胸には春風の吹くが如く温かに、醉へるか死せるか己れも知らず、恍々惚々たる此際此時、遂に潛伏の本能に機會を與へ、ソレをして勃然として萌生し、挺然として發達せしめたのである。斯く見來れば最早に加代の改心に於て四方八方ドッチからも不自然の點はない筈である。然るに猶反對の意見を持たるゝ諸君の如きがあるは何故であるか、熟考するに、是れ理論の問題に非ずして趣味から起る感情の異同であらう。蓋し文學演藝中の材料に於て、昔氣質の老人は理性的人事を好むに反し、今の壯年青年の人は多く感情的人事を好むの傾向がある。既に感情的人事を好めば、理性の山を攀ぢて克己する主人公よりも情海に沈溺して身を波浪に任かす主人公に向つて同情が多い。同情多寡の結果、其沈溺者の上には直ちに自然を

認めず、成丈六かしく注文をすること丶なるのだ。サレど自然と云ふ理に二ッはないから、若し冷靜に人間界の來歷を考へ、數千萬年來協同生活の必需を思はゞ、克己も亦人間の本能なることは明々了々たるべく、其自然を認むる上に沈溺者のソレより別段六かしい譯はない。强ひて克己に此の如く不自然を疑はゞ、此程度を以て沈溺者にも不自然を疑はねばならぬではないか。甲に密に乙に疎に、彼に寛に此に酷に、恰も繼母が實子と繼子とを待遇する如きは、如何に趣味感情は自己の心に任かせぬと云へ、餘りに偏頗の成され方で、諸君の爲めに取らざる所である。呵々。

成島柳北の著書

（一）

成島柳北氏の才學は、嘗ても云つたが、僕が夙に愛重する所で、當時此人の著作と云へば最も注意して讀んだものでゝ、「朝野新聞」も此人の文章あるが爲めに買ひ、「花月新誌」が此人の手より出ると聞けば、豫め申込んで第一號より購求した。其他單行の著書も得らるゝ限り求めて讀んだことである。

「柳橋新誌」は氏の青年の時の作で、早く世に出で多くの人に知られて居るが、主として舊故遊客其他解語花等の情を穿つたもので、全體に議論や說明が多く、面白いには相違なきも、再三讀めばやゝ厭きが來る。唯此書では、末段「夫花柳之遊其來也久矣、故名妓艶娼之跡與英將忠士同傳千載者無慮數百名、非有多情人記而存之耶」、以下に至り、始めて十分に風月花柳の遊趣を叙し、才子佳人の情懷を寫して居て、趣味津々、情緒綿々、百誦しても飽かぬ感がする。ソレも其筈、是れぞ氏が楊州十年風流薄倖の成績報告に外ならぬのだ。

「柳橋新誌二篇」は氏が累世仕へて居た幕府が顚覆し、柳橋の光景も頓に一變したる際の作で、其攀花折柳の殺風景に赴けるを譏る傍、暗に黍離麥秀言はんと欲して言ふべからざる感慨を歌つて居る。卽ち明末清初の余澹心が「板橋雜記」に於て、才子名妓を弔ふ裏面に前朝を追慕して居るのとやゝ似た境遇である。就中「天寶後閑、三千妃嬪、非不美非不麗、而明皇獨戀々于太眞者何也、」の一段は、最も鍾情にして最も心血を濺いだ處が見える。僕も嘗て幕府親藩の世臣であつた關係から、今でも此邊りを讀めば一層同情同感が生じて、暗涙の泫然たるを禁じ得ぬことである。

「柳橋新誌三篇」は「花月新誌」中に其自序のみを揭げて居て、其本篇は世に出て居ぬ。蓋し書かうと思つて書く機會がなかつたか或は僕等の如きソレがあらばと熱望して居る仲間へ一寸侵文許り示てからかつたのかも知れぬ。

「京猫一斑」は氏が明治十年中西京へ旅して、當時の八坂新地卽ち祇園町の狀況を記したものだが、淡泊氣早の江戸ッ兒眼を以て優長にして濃厚なる西京妓流を視るのだから、諸事ジレッたくシッ、こく感ずる處より、其結果は概ね嘲罵的諧謔的の文字となつて居る。書中聽西妓絃歌と云ふ漢詩に、

調濁歌沈響悄然。不聞豪興上金絃。夜深小閣人將睡。聲在殘盃冷炙邊。

隨分意地の惡い評言ではないか。又府知事某氏が新に一妓一客の制度を達し、而して已れは有名なる美人お嘉代とやらを專有して居たのを諷刺して、

市廳黙認阿郎名。守一誰憐了半生、却是春風路傍柳。主人不獨老淵明。

とからかつた處など、僕も其几頭を思ひ出すと殊に可笑しい。猶又少妓梳攏の事を記した條は、閨房猥褻の極を云つて居るけれども、造語が巧みながら左程惡感がない。又雜魚寢の條に、現纎月于雲際、見春草于池塘、蚌珠出殼、花蕋吹香、の形容などは捧腹絶倒に堪へぬ。されど此の如き嘲罵許りではなく、名妓來葉の貞信尼に就て菊池三溪氏作の小傳と其歌卷の題詩を掲げた處は、頗る西京妓の爲めに氣色を起して居る。又都踊りの條に極力其盛況を叙し華麗を歌つて居る處は、氏も流石に少々我を折つたかと思はれる。猶博覽會の條に諸物陳列の景況を叙して「書經」顧命の文句を地口つたのは、好典例で面白い。殊に兌戈和弓の次に鴟之竹矢とはトウ〻滑稽の本音が出て居るのもをかしい。

「京猫一斑」は單行本として出板する考へであつたのを、時の監督官たる文部省が風紀に關係ありとして許可されぬので、遂に「花月新誌」へ逐號分載することになつた。此砌氏は一書を文部大輔たる田中不二麿氏へ贈つて抗議した處、田中氏も個人の資格を以て聊かからかつたやうな答辯を與へて、いづれも同誌に載つたと覺えてる。

段令個人の資格とは云へ、一省の長官代理（當時文部卿は闕）たる人が不許可の理由を直ちに文士に說明するなと、今日とは大分違つて、政治上にも餘裕綽々聊か雅致ある時代があつたのだ。

「花月新誌」中今一つ單行本として世に出したかつたものは「新柳情譜」である。是れは支那の「秦淮畫舫錄」と云つたやうな體裁で、新橋と柳橋との藝妓各々二十四名づゝを二篇に分かち、合して四十八妓の小傳を物し、且一名に七絶一首を賛として附けたもので、氏が得意の才筆を以て得意の社會を描いたのだから、情韻双絶、半百の美人の音容は忽ち眼前に現はれ、其芳名も千載に傳ふべきかの感あらしめる。就中柳橋の少妓清兒の傳に於て、其往事を說きつゝ窃かに、自家の愛妾たる舊妓を此選中へほのめかし加へた一事など、多情と云はんか、最も可笑しく狡獪なる手段である。

先年博文館で「柳北全集」の發刊があつた時、僕は定めし右「京猫一斑」と「新柳情譜」とは登載せらるゝことゝ樂んで居たに、ソレ等は見えず、文章として纔に「朝野新聞」所載のものや夫是に過ぎなかつたやうなのは頗る遺憾である。且漢詩の部にも嘗て「文明餘韵」と稱して世に示された諸篇の如きは悉皆洩れて居る。卽ち二蘇行、古劍篇夜啼石、關原懷古の七古長篇や、寫眞鏡、電信機、步挽車の七律や、介子推、福井竹枝、杉谷途中の七絶などは「全集」中の諸作よりも一層振つて居ると思ふに、今日人に知られぬのは重ねぐの遺憾である。因ては博文館あたりで更に「柳北全集」の續篇を發刊し、前掲の文詩は勿論、「花月新誌」中より氏が種々の著作を採集ありたらんには、遺珠は山の如くあること僕請合だ。偏にソレを希望するのである。

（二）

板橋雜記

「板橋雜記」は前にも云つた如く、明朝の遺民にして而かも當時の風流才子たる曼翁余懷澹心が、金陵の繁華と其世變に係る今昔の感慨を記したもので、一字一滴涙、一句一慟哭、苟も人情あり理性ある人にして之を讀んで同情同感なき者はなからう。單に淫靡浮華例に依つて例の如き和漢の傳奇小說とは夐かに其選を異にして居る然るに此書の本邦に於て出版されたものは、古るく北畠書肆であつたか「唐土名妓傳」と呼び更へ、假名解きの鼈頭を加へて發兌したもの、外餘り見當らぬやうである。通常あるのは皆支那の刻本で、而かも後年舶載のものは舊本と比するに大分字句の改竄削除があつて、甚しきは全く一條を削り去られた處もある。是れは當代の清朝を憚つた結果で、即ち南遷後の明主を帝と稱するとか、清朝へ降つた人を嘲るとか、明の爲め殉難した節士烈女を褒めるとか、清軍に捕獲された美人を憐むとか云ふ事件である。蓋し清朝統一以後は、少しでも心を前朝に寄する者があれば、政治上の妨害だから務めて檢察を加へる、ソコへ又小人輩が付け込み、些細の事を種に善人を構陷するので、隨分一字一句の爲めに擧族誅殺せられた例も少なくない。だから後年の出版者が念の上にも念を入れて、右等の事件を改竄削除するのは無理ならぬ次第だ。されと同時に作者余澹心の心事は大部分を沒却され、「板橋雜記」の「板橋雜記」たる價値は大に減却されてしまつたのである。處で本邦人の如きは、右樣の點に聊か斟酌なきのみならず、幸に舊文の本も存して居ることだから、旁々一番奮つて余氏の爲めに面目を復し、完全なる美裝の「板橋雜記」を印行しては如何であらう。而してソレを大瓊逸客が評言の如く、風清く月白く紅豆花開く間に於て多くの才子佳人に披讀せしめたなら、余氏が靈地下に瞑目すべきのみならず、僕等も亦愉快極まる次第である前に云つた「柳北全集」の後篇と共に、此希望も僕は世の有情者に繫げて居る。

右「板橋雜記」中全く削除されて居るのは附錄と稱する一條で左の如きものだ。

宋惠湘秦淮女也、兵焚流落、補虜入軍、至河南衛煇府城、題絕句四首於壁間云、

風動江空羯鼓催。降旗飄颻鳳城開。將軍戰死君王繫。薄命紅顏馬上來。

羯鼓とは既に清軍を夷狄視して居る。將軍は忠勇なる史可法等の事か。君王は明主由松卽弘光帝で、繫は叛將劉良佐の爲め清軍へ囚へ送られた事を云ふのだ。

廣陌黃塵暗髻鴉。北風吹面落鉛華。可憐夜月箜篌引。幾度穹廬伴胡加。

髻鴉鉛華は女心を離れぬ。箜篌穹廬胡笳ドコまでも清軍を見下げて居る。

春花如繡柳如煙。良夜知心盡閑眠。今日相思渾似夢。莫來可恨是蒼天。

知心と云へば此少女にも早や深い人があつたと見える。

盈々十五破瓜初。已作明妃別故廬。誰散千金同孟德。鑲黃旗下贖文姝。

起句で少女の年齢が分かつて一入哀れだ。曹操の故事を知つて居る丈此女は一倍の悲感があらう。

後跋云、被難而來、野居露宿、卽欲效章嘉故事稍留翰墨以告君子不可得也、偶居邸舍、索筆漫題、以冀萬一之遇、命薄如此、想亦不可得矣、秦淮難女宋蕙湘和血題於古汲縣前潞王城之東、潞王城潞藩府第也、

燕順淮安妓女也、年十六、知義理、每厭薄青樓、以爲不可一日居、甲申三月鳳陽督帥馬士英標下兵鼓噪而散、窜至淮城西門外、馬步五六百人、虜掠甚慘、妓女悉被擒、順堅執不從、兵以布縛之馬上、順舉身自奮、罵詈不止、兵竟刃之、

此燕順は味方の兵の暴殺に逢つたのである。義理を知つて居ると云ふ丈實に壯烈だ。此一節の文は淸朝へ關係なきも、中に挾まつたからお相伴に削られたものであらう。

又山東鄒城縣之李家生旗亭壁間題三絕云。

不畫雙蛾問碧紗。誰從馬上撥琵琶。驛亭空有歸家夢。驚破啼聲是夜笳。

日々牛車道路賒。偏身塵土向天涯。不因薄命生多恨。青塚啼鵑怨漢家。

承句に我が身の如きは捨ても惜くないと云ひ、轉句に我が不仕合はヒドクも恨まんと云ふより見れば、結句の意は國家の覆滅を專ら憾みに思ふと云ふことらしい。

驚傳縣吏點名頻。一々分明漢語眞。世上無如男子好。看他髡髮也驕人。

此詩に到つて愈々氣餒を吐いて居る。意解をすれば、頻りと人數調べをして立ち働く役人がある。驚いた、淸人かと思つたら、言葉で全く明人と分かつた。お負けに豚尾となつて居る。アレでよくも人中へ出て威張れるものだ。扨々男子程氣樂なものはない。我が如き女仲間では迚も個樣な耻知らずにはなれぬ。と云ふのである。何等の慷慨悲憤ぞ。實に男子をして愧死せしめるではないか。彼の「二十萬人齊解甲、晉無一個是男兒」、よりも、言ひ廻しが巧みな丈其嘲罵が一層人の胸を刺して居る。

末書云、吳中爲歸趙雪華題、凡此數者皆群芳之蓼道傍者也、

成程此の如き文字では、出版を憚つたのも無理はない。

《訂　正》

本文中

日々牛車道路賒。偏身塵土向天涯。不因薄命生多恨。青塚啼鳴怨漢家。

此承句と轉句結句の解は後に自分で頗る感違ひをして居たことが分かつた。此承句は唯身體一面に牛車の塵土を被ると云ふこと、轉句結句は女によくある好い人に捨てられて恨めしい悔しいと云ふやうな事には出で逢はず、却つて王昭君の如く夷狄に連れ去られて、故國に歸りたいにも歸られぬ、此事の根原たる明朝の始末が怨めしいといふことであつた。次の詩の激烈な爲め、ッヒ〳〵此詩も意味深く取り過ぎたのは、吾れながら不注意であつた。

（三）

江戸繁昌記等

柳北氏が「柳橋新誌」の類書では、天保年間に寺門靜軒氏の「江戸繁昌記」が出て大に喝采を博した。是れが出る前同氏の作で「太平府志」と云ふもあつて、矢張江戸繁華の記事だ。又氏が江戸を逐はれて後は新潟へ行つて、コヽでも「新潟富史」を物して居る。此頃京都では中島棕陰氏が「鴨東四時雜詞」を著し、少し後れて大阪商家の某少年は「大阪繁昌詩」を著した。慶應年間には柳川春三氏の「横濱繁昌記」がある。明治以後では菊池三溪氏の「西京傳信記」松本萬年氏の「田舍繁昌記」がある。此外服部誠一氏の「東京繁昌記」もあれど文を成さぬから數へぬ。通論するに、記事の浩汎にして一々面目の活動して居るのは「江戸繁昌記」に如くはない。「鴨東四時雜詞」は詩が主で、記事は簡短なる註釋に過ぎぬけれども、流石に學力は見える。「大阪繁昌詩」は年齢に比例して敬服。「横濱繁昌記」は僅に十數葉のもの。「田舍繁昌記」は二冊許りあつたが內容を忘れた。「西京傳信記」は文章こそ大家丈で慥かであらうが、少しも活氣なく、寺門氏の口眞似を下手に使つたと云ふやうなもの。矢張才學も向き不向があると見える。「太平府志」は「江戸繁昌記」の前駈丈のもの。「新潟富史」は場所が狹く事が少なく、且幾分か强努の末だ。猶寺門氏には寢覺の繁昌記と云ふやうなものもあつて、「江戸繁昌記六篇」の名を冒して居れど、駄洒落話しに過ぎぬ。

俳句と理論

俳人は多く理論をせぬ。或は理論を嫌ふ。中には理論が殆んど分からず、又出來ぬ者もあるかも知れぬ。其中で可也見識ある人でも手腕を先にして言論を後にすべしと主張し、言論者を擯斥する傾きがあるが、師道は時と場合との宜しきに從ふことなれば、此の如き擯斥も强がち非とは云はねど、一般に言論者を卑み、理論を嫌ふと云ふことならば、沒曉理の說にて、斯道の爲めに一面の發達を妨ぐると云つても好い。孔子派の行を先にして言を後にすべしと云ふのは道德實踐上の誡論にして、例へば仁を談じて仁を行はず、義を說いて義を踐まず、所謂論語讀みの論語知らずの輩の爲め云つたので、十哲を並べ稱して德行には顏淵閔子騫と云ふ側、言語には宰我子貢と云ふを見ても、言論者亦一の人物として尊重せられたるは孔門の事實である。又君子は人を器にすと云つて、夫れ〳〵の長所を取りて使ふこと、諸種の器具を各々其用に應せしむるが如くせよと云ひ、又一人に備はらんことを求むる勿れとも云つてある。道德主張の孔子派であつてさへ、此の如き寬ぎと活用とはあるのだ。況して方面の變つた美を目的とし美を唱和する文學卽ち俳道に在つては、夫れ〳〵人の長所に由つて斯道に貢獻することを許さねばならぬ。手腕のある者は手腕で貢獻し、言論に長ずる者は言論で貢獻すべきである。殊に文學美術は批評を必要

とし、批評家と作家とは概ね一人で兼ね難く、批評家と作家と人を異にし、互に相待つて文學美術を上進發達せしめつゝあるは世界の事實である。左すれば俳道のみ獨り此事實に洩るゝことは能はぬ。但俳道は文學として研究するの日淺きを以て、今日までは偶々批評家と作家との甚しく分かれず居たるのみ。研究し上進し發達すればする程此兩者相分かるゝの傾向を生ずべきは當然の理である。尙一歩を進めて論ずれば、作家と雖も非常の天才の外は、全く理論に需つことないとは云はれぬ。着想の良否を撰擇し。措辭の適不適を案ずるは、是れ推敲にして卽ち理論の端緒だ。故に僕は異樣な名稱のやうなれど以下此推敲を直ちに理論と稱して說明に便する。抑々美感は單に感情だとは云へ、此感情を構成するまでの來歷には隨分理論を挿むべき餘地がある。餘地があつて居ながらそれを自知せざる者と自知し居る者との相違があるのみ。故に凡ての作者が此の如き來歷卽ち理論を挿むべき餘地に於ては理論を利用し、自己にも理論を爲しつゝ、句作したならば、美感の圓滿に歸して佳句の成立に稗益あること蓋し鮮少でなからう。早い證據が、句作の當時は十分完全で申分ないと自から思つた句が其後數日にして自から缺處を見出し、前感の幾分を減殺せらるゝ如きは誰れもある事實だ。或は之を製作不熟練の罪だと云ふ人もあらうが、其不熟練と云ふ其事の一部は自から理論を爲すべき餘地に理論を爲さなかつたのである。前にも云ふ通り、作家と批評家とは概ね一人で兼ね難い事實なる上は、作者自己の理論の精密が批評程に精密にあれよとは云はぬ。蓋の當局者に傍觀者程八目强かれとは云はぬ。けれども其自から理論を爲して作つたものと理論を置き、よしや自から爲さずと雖も人の理論には耳を傾け、其理論より益を取らんと期すべきである。決してそれを嫌ふなどゝは夢々有るまじき次第である。極端の例から云ふと、彼の林檎はニウトンに引力を敎へた。鏗子の蓋はワットに汽力を敎へた。一道に熱心なる者は、理學者でなき、否人間でもなき果物や器物からでも敎へを聽いた。又聖人は葫蘆からも智慧を借ると云ふではないか。況して俳道に指を染め多少味を解して居る者の理論又批評は、それを歡迎すべきのみならず、此の如き理論批評を爲す者の如きは、製作者の養成と共に、亦之を養成せねばならぬことゝ信ずる。於是乎俳道に於ても審美學研究の必要が起るのである。

中川氏の俳諧美學

（一）

我が俳道に於て理論に慣れ理論を解し、根底ある批評（前提もなく意に任かせて爲す批評の反對）を爲し、又完全なる句作を爲すには、多少に限らず審美學の消息を知らねばならぬ。僕は十五年前俳句に志し、今方さに六十歲不幸にして洋文を習ふの機會を失ひたる爲め、西洋の學說は譯譯を經るに非ざれば知る能はず、殊に審美に關す

る論說は嘗て森氏高山氏等の譯述書を一讀したるのみ。爾後朝夕多忙の爲め再讀するの暇なく、今や一半は朧ろ〳〵に歸した。此の如き毫生を以て前條の如き俳道上の必要を認め、先づ隗より始めんにも其力なく、他の人々は誰れも壁上の傍觀、恰も高田馬場の仇討の如く、堀部彌兵衛金丸があせりにあせり、誰れか出て此孝子を殺すな、否、俳道の後進者を理論知らずに終はらすなと、念じに念じて居た處へ、躍り出でたる某（安兵衛の前氏名失念）は卽ち同入中の中川四明氏で、「俳諧美學」は卽ち彼の腰間の大業物であるのだ。愉快極まるではないか。僕には手繰となるべき娘の美しき腰帶はないが、責めては該書に關する批評に代へ、僕が該書に就いて得たる智識を玆に披露し、以て僕と同樣或は僕よりも以下の審美學不案内なる俳人に示したなら、幾分か四明氏の勞を謝し、又斯道の爲めにもなることゝ思ひ、以下それを叙述するのである。尤も該書は尙再三熟讀し、今一度森氏高山氏等の書をも參讀して、成るべく精細に且系統的に見解の結果を述べたいと思へど、僕が目下の事情は其時間を得ぬから、それは他日の事とし、餘りに機會を失ふから、此度は卷首より讀みもて行きつゝ其條々の見解を披露することに止める。而して實は日迫つて讀み始め、今まだ（七一ページ）理想と性格との一致の條まで到つた丈だから、見解の披露もそこまでに止める。尤も自己が見解の披露だとは云へ、卷末まで讀まずにそれをするとは橫着だとの批難もあらうが、實は最初疎漏ながらも飛び〳〵に卷末まで讀んでは居るから、さう大體に於て見當違ひはない積りである。いやや是れから右の披露にかゝらう。

下に深奥廣大なる美學を了得せしめんと苦心せられて居る。一言にして評せば本書は面白き讀み物である。而して又貴重なる教科書である。而白く樂んで貴重の知識を得るのだから、讀者たる者は實に幸福な譯でないか。冥加に餘つて勿體無いと云つても好いのだ。

（六頁）美とは何ぞやの說示は本書の骨子である。

夫れ櫻花は美なり、鶯語は美なり、少女に美なるあり、石像に美なるあり、繪畫音樂詩歌の類他日常に美の耳目に上るもの何ぞ限らんされど自然と藝術とを問はず、美となすものには、皆形式あり、內容あり、秩序あり、自由あり、綜合あり、統一あり、調和あり、て吾人に快感を與へざるなく、其美の圓滿なるものに對すれば、恍惚として理想の世界に遊び、他の利害欲望等の諸念を忘れ、高潔なる精神の怡悅を得べし。美は實に此の如き偉大なる權力たるが故に、藝術は空想の遊戲に過ぎざれども、尋常の遊戲にあらず。官能の感覺之れが根本をなすと雖とも、高く超越して精神靈界の最も高尙尊貴なる事業なり。

筆路圓活にして、辭句麗葩、其他も概ね此風である。而して美の定義美の効用も殆んど說き盡くされて餘蘊ないやうである。然るに美の圓滿なるものと云ふ點に至つて少々疑問が生じた。蓋し美の圓滿とは美自身の內容に於ける圓滿であつて、外に向つて需つ所なきは申すまでもないことであるに、直き下文に於て、

故に國家の興亡盛衰も之れに關し、國民の品位文野も之れに關し、他の哲學宗教倫理の諸學と輕重をなさず、

事多くは間接に屬すと雖も、却て他よりも大なる勢力ありて、哲學の眞倫理の善を併せ、以て圓滿なる美を致し益す理想を高くし、向上の途に就かしむ。文明國の民たるもの、誰か之れを學ばずして可ならんや。

とある。玆こで圓滿なる美とは、哲學の眞と倫理學の善とを併せたもの丶謂ひで、即ち此兩者を併せて後、始めて、美は圓滿なることを得るのであつて、それを併せぬ美自身のみでは未だ圓滿と云ふ域へは達し得ぬこと丶なるのだ。隨つて上文の美の圓滿なるものと云ふと忽ち撞着するに至つた。是れ如何解して好いものであらうか。

尙他の條々を看渉すに、

（八五頁）藝術の極致が眞善美の調和に在りとの古來の說も理解し得べきか

と云ふ一文がある。古來の說も理解し得べきかとは、此の如き陳腐說も多少理窟はある、解すれば解せられぬこともない、と云ふ意にて、眞善美を併せて美の圓滿とする說は、著者も痛く輕蔑して居らるゝのである。殊に此直き前の（五頁）にも、

美學は一科學にして、他の哲學及び倫理學には總て直接の關係なし。

此の如く斷言して居らるゝ上は、著者が美の見解は明々、丁々、即ち上文に美の圓滿なるものと云はれた方が、其本意であることは最早疑ふべき餘地がない、さらば何故下文に於て更に眞善を併せて圓滿なる美と云はれたかと云ふに、蓋し本書は感興を以て講說の一方便とせられたる結果、時としては著者自らも感興に乘りつゝ、或る例は後段の如く、或は美の定義に關する書中の骨子であるから、念の爲め聊か繕じて置くのである。

引用の例句が多いのも、頗る感興の助けたるのみならず、柯を伐り柯を伐る其則遠からずの譬で、直ちに實例に接するから合點し易い。尤も此例句中二種の區別あることを知らねばならぬ。甲は說く所の美の表現されたる俳句で、最も適切なる實例である。乙は必ずしも其內容でなく、唯講說中の言語或は事物と關係ある俳句で、是れは講說の本文の意を補足し、若くはそれに興味を添へたものに過ぎぬ。而して甲種俳句の中にも純全なる實例とやゝ雜駁にして他を混じ、所說の美の未だ十分に表現されぬものもあるやうだ。是れは氣付くに隨つて述べることもあらうが、兎角著者が是れ丈の拾集をされた苦心は亦多とすべきである

（二頁）「叙景の句は客觀にして、人情の句は主觀なり、」とあるは、一部の事物を擧げて全體の主觀若くは客觀を推知せしめられたもので、主觀の全體が即ち人情、客觀の全體が即ち叙景と速了すべきでないことは勿論である。又其例句、

朝顏に我れは飯食ふ男なり

は主觀の例に引れた句なれど飯食ふと云現象の耳目等に上る物は我と人とを問はず是客觀の一部也（朝顏は勿論）

人の世に尻をすえたる瓢哉

は客觀の例に引かれた句なれど、人の世とは抽象的の概念で、耳目等に上らぬのみならず、空想に浮べ理想に入れても、具象せぬから、客觀として對照することが出來ぬ、ドコまでも主觀の觀念である。强ひて爲さば、一個

の都城若くは村落等を耳目に接し或は空想に浮べて、それを具象して、然る後客觀として對照するのだけれども此句の尻をすゑたると關係しては、それも出來ぬ。結局人の世と云ふは客觀でなく主觀の一部である。故に此句は著者が偶々引用を誤られたものと見る外はない。

（四頁）

理想とは、空想の作用より心匠を施し、一段浮化したる觀念に過ぎざれども、元來理想の字義たるや、自然に實在する庶物各種類の根來原形の意味なり。故に理想は唯だ空想に在りて實在せず。之れに反して現實に實在して、個體特殊の美をなすもの、之れを性格といふ。故に理想美は猶ほ神の如く、性格美は人の如ぎなり。

是れ僅に數行なれども、美學研究法の概說であつて、容易に看過すべきではない。ハイトルマン氏の學說では、脫實、假象、脫我、假感、樂受等の符丁が此間に挿まり居れども、夫等を省略して、唯右の如き說示に止まつたのは、著者が所謂通俗的を主とし、感興を損ぜざるやうとの酌量であらう。勿論著者は必ずしもハルトマン氏のみに範を取るべき譯もなく、書中往々別說もあるやうなれば、旁々此邊の酌量はあるべき筈だ。併し此講說の系統の大體は矢張ハルトマン氏說に依られたもの、如く、用語其の他美感の釋義も格別に氏と違ひたる點もなきやうなれば、僕が以下本書に就ての研究も、矢張空想、理想、殊に具象理象を始とし、脫實、假象、脫我、假感、樂受等に至るまでも、僕が知る限りは、其丈規に從つて研究せうと思ふ。美感を他の實感と區別し、美學を他の

致を說いて大理想を立つる點に至つては、橫着な申條ながら、僕は大々不服である。僕は寧ろ快樂說とか云ふ學說を比較的可とするものである。約言すれば、僕は美學研究法の或る點までは、概ねハルトマン氏に服從す、而して其研究さるべき美其物に至つてはハルトマン氏に反して快樂說に向ふと云ふのである。且此點に於ては推理的でなくて實驗的だ。尙以下條々に於て之を披露する機會もあらう。

根本原形　是れは殊に牽强の極だ、コンなものがあつてお堪りこぶしがあるものか。呵々。著者も無論御同意ならん。

理想は實在せず　但し著者が（四九頁）に所謂「心的實在」から云へば、現實に實在する者と否とを問はず、空想に於ては皆實在すと云ひ得ること勿論である。

性格　具象したる理想は亦性格を有すること勿論である。

空想、甲乙兩側面がある。現實に對する空想は甲の側面である。現實と非現實とを問はず、或る現象を浮べ來る其空想は乙の側面である。

理想美も抽象理想の外は、性格美と云ひ得ること右に云つた通り。性格美も具象理想派の研究順序より云はゞ、矢張理想美中のものと云ひ得べきは勿論である。蓋し玆に理想美と云ひ、性格美と云ふは、主義の傾向に就て且らく下された名稱に過ぎまい、此美の區別は（六一頁）性格論の爲めの伏線と思ふから、一言を附し置く。

（五頁）

昔の學問は上よりし（演繹法）、今の學問は下よりす（歸納法）。既往の經歷は茲に說かず。今日の美學は、感覺及び感情に關する美醜一般の諸現象に就き、心理に基礎を置き、經驗に徵し、自然と藝術とを對照とし、其美たる所以醜たる所以を審かにするに在り。

此數行は審美學の沿革、區別、傾向、目的等を略說して、諸大家の學說を打つて丸となし、一口に呑下し、それを消化せしめられたもので、著者が學殖と藻蔚とには、歡服の外ない、前條（四頁）の美學研究法の概說に比すれば此一文は高きこと一等である。

（六頁）

藝術は總て空想より具象的に生命を表現し、人の享樂に供し、世道人心を美化するに在り。

此條に至つて著者もハルトマン氏の具象理想說を採つて居らるゝことが明白になつた。

最初は（七一頁）まで見解を披露する積りであつたが、存外長くなりさうで、且期日も逼り、又少々不快に取合つたから、以下は次回に讓ることゝした。それまでに卷末まで熟讀を了へ得るなら更に仕合せである。

（二）

前回に於て第一章誘引（一頁乃至七頁）に關する見解の披露を了へたから、今回は第二回官覺（八頁乃至二四頁）に關する見解を披露せう。即ち總論が濟んで是より分段の處に入るのだ。

五官の感覺には、快と不快との別あり。而して其の快感には、吾人の好み愛するもの、不快感は、之れに反して吾人の厭ひ嫌ふもの、美と云ひ、醜と云ひ、別をなすは、畢竟此快感不快感とに過ぎず。

高級官能に此の快感あるは論なく、低級官能にも快感あること、既に上來の說にて知られ、美味と云ひ、清涼と云ふの類、皆快感なり。然りと雖も、低級官能の快感には、眞の美的享樂を缺ぐ。何となれば、膚に觸るゝもの舌に味ふもの、鼻に嗅ぐもの、快感あるもの多しと雖も、要するに肉體上の快感にして、欲望を伴ふを常とし、一層高尙なる精神上の快感には、比すべくもあらざればなり。

之れに反し、眼に視、耳に聽くの快感は、肉體上の快感たること敢て低級官能に異ならずと雖も、然かも、別に肉體上の欲望を脫して、純乎たる精神上の享樂あり。是れ卽はち高級二官能の他と別ある所以にして、高級官能の快感は、直接に藝術に入り、繪畫、彫刻、音樂等となれども、低級官能の快感は然るを得ず、唯だ間接に文字を介して詩文の世界に入るを得るのみ。

扨て感覺の快を得るには、如何なる約束を要するか。總て感覺の力は天賦に許されたる範圍に於て刺戟を受けざる可からず。範圍の外に出れば、其職分に堪へず。おのづから不快感をなし、甚しければ終に苦痛を感ずるに至るなり。例之ば、光と雖も强きに過ぎては、夏の日盛り、炎天の時の如く、眼の力之れに堪へ難く、眩しきを覺えて眼を刺さるゝが如き心地すべし。聲の耳に於けるも亦然り。强きに過ぎては快感を缺ぐこと、

あら　暑　し　油　し　め　木　の　叫　音　　吳　鄕

の句にても知られ、總て天賦の力の許されたる範圍以内ならざるべからず。之れに反して暗黑の不快なるも、寂寞の不快なるも、光の足らざると聲の足らざるとより起る不快感にして、範圍に入るを得ざるなり。範圍に過不及の兩極あるを知るべし。

是に於て快感を得るには、主觀と客觀との間に一致を要し、諧和を要す。此の諧和一致を缺きては、決して美の感じを起す能はず。諧和は恰も引力の如き作用あり。即ち是れ吾人が美を愛する力なり。之れに反して拒反の力あるが如きは、皆是れ醜にして吾人の天性好まざる所のものとす。知るべし美と醜とは、斯くて成立するものなるをことを。

是れ官覺に就て、それが美感を起し得ると否とに係る階級、美感と一般の快感との區別、快感を得るの約束、快感と藝術との關係等を概說されたもので、いつもながら辭句富麗穩健にして且意思の暢達せるには歎服の外ない。そこで此五項中主要の點は美的享樂を一般の快感より區別する事で、それには快感が欲望を伴ふと否とを吟味すべきものだと說かれて居る。僕が知る限りの飜譯書に於ても、推理派と實驗派とを問はず、近世諸家の學說亦此點に向つては略ぼ一致して居るらしい。成程一致すべき筈で、銘々自身に考へて見ても、美感の起きた場合は慥かに其通りだ。而して此吟味たるや、實際同一心裏に情緒や意思の纏綿紛淆するに方つて、無欲望又無關心と云ふ一本槍で、其中から美感の所在を捻出することであるが、何だか是ればかりでは少々覺束なく、或は行違ひを[illegible]氏とやらの如きは、美感より起る間接の功利心欲望心を

以て、美感其物の內容であるかの如く思ひ做し、以て美の無關心說に反對して居るとの事。(高山氏說)されば此の如き行違ひを防ぐ爲めには、此無欲望無關心の事に就き、成るべく精密に分解し、規定して、一々に符丁を加へ、以て一の美感が成立さるゝ其始末と作用と効果とを說明するに如くはない。而して此要求に比較的よく適つた案を立てたのが即ちハルトマン氏だと僕は思ふのである。一寸見ると、脫實、假象、脫我、假感、空想、理想樂受、何、何と、頗る六ケしい符丁で、且潔癖過ぎた規定だけれども、斯うして置けば恐れがない。恰も衛生淸潔法を嚴密に設けて、惡病の黴菌を驅逐するのと同じことである。尤も氏の理想と云ふは、其哲學より來て居て隨分八釜しい。即ち宇宙の絕對精神は二個の屬性を有し、一は理想、他は意志で、其理想が現實世界のあらゆる事物に分現する、それが吾人心裏の理想であつて、此理想の具象したものが即ち美感だとやら云ふのだ。されど此の如き美の本體の吟味は、事實上の美感と他の快感とを區別する場合に左までの必要なく、又哲學に涉る問題となれば、僕は僕で從來の自說もあるから、先づそれはそれとして置いて、事實上の美感は何人も認識する所、又其始末や作用や効果も事實であるから、說明法は如何に異なるも、事實に相違の生ずべき筈がない。因て此說明法又研究法に於いては、其或る點まで僕はハルトマン氏に從ひたいと思ふのである。(前回の披露參看)結局理想と云ふことも銘々の見やう次第で、僕は單に吾人心象中の或る作用へ付した符丁とするのみ。それ以上有り難いものとは思はぬのである。尙此等の鄙見は後に披露する機會があらう。

美的享樂　ハルトマン氏の美的樂受と同じ語のやうなれど、ハルトマン氏は脫我、假感の符丁を以て美感を當體者

より引離したるの結果は、再び此樂受を云ひて兩者の關係を結合すべき必要がある。而して樂受の實我は美感の假我と兩立する姿となるから、樂受の意義も隨て狹義となつて居る。之に反して著者は最初より脱我、假感の符丁を採られて居ぬので、假我と實我と兩立する姿もなく、隨て此美的享樂とはハルトマン氏の美的樂受の外美感の享受をも併せ稱して居らるゝやうで、享樂の意義は自ら廣くなる傾きがあらう。

詩文の世界　間接に文字を介して此界に入り得るものは、低級官能の快感のみでなく、直接に美的享樂を得べき高級官能の快感も雖も、亦間接に文字を介して此界に入り得ること勿論である。

尙一歩を進めて云へば、五官の有らゆる不快感とに雖とも間接、文字を介して詩の世界に入り、且、理想化するに於ては、美的享樂の資となり得べきは勿論である。例句「あら暑し」は又其例句としても好い。(實は凡句で聊か不足だけれども)

此章中五官の感覺に於ける美の說示は、僕差したる異議もない。尤も各官能と現象との關係に於ては、心理的物理的を超越して、主として藝術觀より趣味を加へて敷演說示された爲め、其結果は間々官覺の範圍を脫し、(七八頁)の聯想、(一〇八頁)の形容比喩擬人法等にも涉るが如きものも見ゆれど、是は該書の目的に對して先づ許さねばなるまい、殊に引例に於ては、俳句の外、文章にも及び、後小松院御撰のむくさのたね、

たきものゝ方さま〳〵なれどつねにあはするは六種なり梅花は春のむめのなつかしき香にかよへり荷葉はなつのはちすのすゝしき香にかよへり菊花は秋のきくの身にしむ香にかよへり落葉はふゆの木のはちるころはらはらとにほひくるにかよへり(下略)

又也有子の音曲の說、

歌とはすへたる名目なるへけれと今をのつから筋わかれて其品また貴賤の異なるあり古今も一樣ならす琴の組なとは上代のまゝにて不易の眞なり今三線にあやとるたくひは流行しはらくもとゝまらす文句も百端に音節さたまりなし本調子はたとへは女のさけ髪にうちかけしたることく二上りは髪當流にとりあけ姿もひとつまへにみたれたり三下りはしつまりたるに似たれとかくし化粧にしてき帶したるよそほひ物思ふ人はこゝろに涙を落して中々淫奔の媒となりぬべし(下略)

讀む者をして先づ其香に醉ひ、聲に浮かれて、是れ嗅覺の範圍歟、聽覺の領域歟と、論理的に詰ることさへ忘れしむるやうだ。但し一つ小言を云ふと、(一八頁)視覺の條に、「物の形の中、色の中、動靜の中に或物を含まれたる」とあつて、直ちに下文に「其客觀の中に形以外、色以外に或物を捉へたるにあらずして何ぞや」とある。同一關係の或物を以て、忽ち中とし、忽ち外とせらるゝは、餘りに修辭上無頓着ではなからうか。(二一頁乃至二四頁)美醜の圖解は、(二四二頁)ツアイシング氏の滑稽に關する色の圖てふものに倣つて、著者が創製せられたものであらうが、諸種の美醜の性質と相互の關係とを知るに於て便宜が多い。尤も此の圖解が、本章官覺の名の下に一條となり居るのみならず、此圖解の例言らしき姿を以て、五官の快感不快感をさへ說かれて居るから、或は此圖解を以て單に官覺に係る美醜の圖解だと爲す人もあらう歟。されど官覺の美は無意識形式美である。而して

此圖中の壯美を壯とし、優美を優とするは、既に意識に入つて居る。其他怖と云ひ、笑と云ひ、怪醜、陋醜と云ふも、亦美に準じて意識に入るべきは勿論だ。又普通の心理學から云つても、官覺には略ぼ一定の區域がある。旁々を以て此圖解の單に官覺に係る圖解でないことは明らかである。さらば此圖解は何と名づくへきか。僕に名づけて無葛藤美及び之に對する醜等の圖解と云ひたい。葛藤の事は(一七三頁)に說示されて居る。而して葛藤以上となれば(一二八頁)の如く醜も、亦滑稽悲壯に隨伴してそれを消滅さるゝことがある。笑も滑稽の効果として は中々有價である。ハルトマン氏が美の高級に置きたる(二三三四頁)の有情滑稽も、亦此笑を以つて收了するのである。

要するに此美醜の圖解は、殆ど美學大部分の美等の說明であるから、個樣に官覺の章の下に居候然として置かれたのは頗る氣の毒の感がする。若し該書再刻の事もあらば、著者宜しく此圖解の爲め其所を得しむる計畫があるべきだ。至囑々々。

右にて第二章に關する見解を披露し了つた。(未完稿)

懸葵の四明氏が告げに就て

本月は原稿起草の期に近いて居宅移轉の事あり、其他人事の煩累も多かつた爲め、俳諧美學に關する見解の披露を續稿する暇がなかつたから、其代りとして懸葵第三卷六號四明氏の「俳諧美學の批評に就て」に對して少々許り云ひたいことを云はう。

四明氏が「同老相憐む」と云はれたのは覺えず一笑。併し相憐むでは何だか衰颯の感がする。尙一歩を進めて東西呼應、同老相奮ひ若い奴原を一番壓服しては如何であらう實は今回該書の批評も內々其下心で居るのだ。呵々。

僕が該書の發行を歡喜し、滿腹の同情を以て該書を讀みつゝあることは、頃日來の說話で十分明白、今改めて著者に向て諒鑑を乞ふにも及ばぬが、時には些細な事を餘りほじくり過ぐる嫌ひがあるかも知れぬ。是れ僕の神經は此の如くして始て安まるので、同情が多ければ多い程小言も止められぬのである。著者がそれを「研究の面白さ」と云つて寬容されたのは忝い。返すゞゝも知己の言だ。就ては此上も所謂「大穴」を搜し出したいものだが、なんだかもう無さゝうで困る。尤も精々蚤取的に老眼を働しては居り申す。

著者が今回の告げに依て、該書は態と舊式の美學を說かれたもので、新式の美學は他日發表さるゝ積りであるてとを承知した。而して所謂ランゲ、幻想論、クツオーベルの美の概念化醇論、ホルケルトの象徵論は卽ち其新式なるものらしいが、要するに舊式と云ひ新式と云ふは多く美の本體起因に關する問題のみであつて、事實上吾人が美的感想等を、系統的に悉しく叙說することに於ては、恐らく舊式家に取つて代はるべき新式家は未だ出て居ぬやうである。是れ一部の俳諧美學として著者が叙述を勞するに至つても、矢張舊式の美學を先づ採取さるゝの

止む得ざる所以ではあるまい歟。如何。

洋文に盲目なる僕は右に云はれた新式美學の事を聞くに付けても、著者達が飜譯して示さるゝまでは、見たくても見られぬのが悔やしい。尤もランゲ氏の説は、明治卅五年七八月中の日本新聞へ、著者が藝術新話の名を以て其大要を譯述されて、僕は一々切取つて今も保存して居るから、今回の告げで思ひ出し、あらまし拾ひ讀みをするの幸を得た。成程幻想逆幻想の規約を以てあらゆる美感の起因を説いたのは、正に新式であるのみならず、吾人自ら顧るも大いに合點する所がある。殊に僕は頃日來度々云ふ如く、美の本體問題に於ては、自家臆想の哲學を根據として演譯したるハルトマン氏の天降り的理想説などは大々不服であつて、如何に見榮えが不十分なりとも事實上より歸納して吾人が經驗を基礎としたる美の起因論ではなくては、蟲が承知せぬのであるから、此ランゲ氏説を得て、恰も大旱の雲霓を望見した如く、まだ染々分からぬ内、もう胸の痞へが下りた心地がする。併し一寸拾ひ讀みでは其規約の適用上隨分疑問の點もあるから、是れは追々著者に伺ふことゝせう。

尚序ながら哲學史に關する譯書を閲すると、此ランゲ氏は十分經驗的より得たる眞理を尊重すると同時に、又カント氏の認識的理想をも併せ採つて居る人らしい、誰れも社會道德の必要上それの原理を神聖にせんとすれば、自然此の如く二股かけて哲學を立する弱點を免れぬので、氏も亦其轍を踏んだのであらうが、それはそれとこれで、其美の起因を天降らせずに經驗の側に取つたのは卓見と云ふべしだ。

次ぎにカント氏は、哲學史に依ると新カント學派とか云ふ都類の人らしいが、所謂象徴論を見ることが出來

ぬから、敵か味方一向分からぬ。尤も此人は該學派中でも形而上學系を片手に保持する説だと云へば、經驗的とは愈々縁が遠く、其象徴論もなんだか賴母しくなさゝうだ。と云ひつゝも、偶々此人の審美上時事問題てふ説が森鷗外氏により審美新説の名を以て嘗て譯述されて居たことを思ひ出し、幸ひ是も手元にあるので、急いで拾ひ讀みをすると、思つたよりも着實だ。末段に申譯許り美の根據が形而學上に關係あるが如く云つて居れど、主としては心理的に重きを置き「此形而上冠冕を戴かしむることを辭まんも心理上標準學たる審美學は依然として儼存すべし」と斷言して居る。善哉々々。左ずれば所謂象徴論も早く見たい感がする。併し審美新説中の所説では審美上矛盾てふことが先づ山らしい、其他善と美との一致説などは頗る鶻突で、全篇透徹せぬ議論が多いやうだから、該象徴論の價値も思ひ半ばに過ぐるのである。

之に反してクツオーベル氏は哲學史を見ると唯物學派だ。唯物學派なれば其美の概念の化醇論てふものも着實なる經驗説に相違ない。嗚呼見たいな〳〵。著者は何卒人をじらさずに其大要丈でも早く懸葵に於て敎示されんことを祈る。

著者曰く、

新舊議論は變つて居る、美の分析は益す、細に入つてゐる、然し大體の論は爾う變るものではない、故に一部の美學さへ腹にして置けば、他の新奇な論を見ても合點し易い、横に説いてあるか、縱に説いてあるかの相違ぐらゐに過ぎぬ、

と是れ該書に舊式美學を先づ説かれた一因で、其活眼にして達懷なる實に欽景に堪へぬ。僕や蒭劣と雖も亦之を庶幾するもので、卽ちハルトマン氏の學説を或る點まで採ると云つた如きも此意に外ならぬのである。兩老相奮ふのみか、其主義の亦暗合したのは愉快々々、主觀客觀の例句中人の世の句に就て著者の御辨解は委細承知した句の全體から客觀的の句とし、卽ち叙事詩體の部類と看做されたのだとある上は、强ひて爭ふ所はない。唯該書中特に「人の世」の三字に圈點があつた爲め、此三字が客觀ではと怪んで斯う云々するに至つたので、矢張り是も例のほじくりの癖であつたらう。

本鄕座無名氏の評

此頃は芝居に御緣が多く、十月七日も知人に誘はれて本鄕座の新劇「無名氏」を見物することを得た。僕が新劇に就て染々觀察を遂げたのは、先般の「野火」以後此無名氏が二回目である。而して今度と云ふ今度は、慥かに多大なる同情と面白い感興とを以て始終見物したことである。其譯如何と自ら考ふるに、第一に、僕は嘗て「野火」の評に於て云つた如く、新劇が舊劇以外に立つて生命を有つのは重もに寫實の點に在るのだから、此點を務めて僕の如く思ふ處へ、今回の無名氏は全局面が西洋歴史やあつて、舞臺の光景や人物の服裝、其他從々の性格擧動等、云ふまでもなく一切西洋的で、日本風は些しも雜らぬのだから、自然日本劇の舊式に傾くべき機會がなく、思ふまゝ寫實的に演奏されて、隨つて僕が希望が概ね充たされたのである。第二は、同じ寫實を務むるとしても、日本の歴史や現社會の事件では、僕の如き六十歳の老爺は、サウ云つてはをかしいが、多少見聞上の知識に富んで居るから、演奏中ソコも事實と違ふ、コヽも典故と合はぬと云ふやうに、缺點許りが眼に入り、爲めにあたら見場所も幾分か興味を損するのであるが、之に反して西洋の事件となると、洋行もせず横文字も讀めぬ僕は、殆ど赤ン坊も同樣で、チツとやソツと嘘があり胡麻かしがあつても平氣の平左、成程一千八百二十五年乃至三十七年の加拿陀社會の活動寫眞は、微塵違はぬ此の如きものであつたらうとひたすら感服してしまふのである。第三は、僕の素論として、小説もサウだが、演劇に於ても、元々人間社會の出來事を畫く上は、徒に動物と人間との共通なる情慾のみに徇ふ懦弱的事柄を採らんよりは、務めて人間の人間らしく、卽ち人間特有（大概に云ふ）の理性に依つて行爲せる健全的事柄を採り、其間如何に波瀾や變化はあらうとも、一篇の脚色中自然と人間の動物に異なる本領が發現されて、猫の如く戀に啼き、犬の如く喧嘩に狂ふ許りでなきやうに仕組まねばならぬことゝ思ふ。併し僕と雖も敢て美と善とを同視し、文藝亦善を目的とせざるべからずとの僻論を執る譯でもなく、文藝は美を唯一の目的とし、美と善とは各々別方面に存することも心得て居るが凡そ美感の起るや、其來歴に於ては概ね知識を要する。而して知識の人事に渉るものは幸に理性の節度を仰がねばならぬ。此結果として理性に適ふ人事は美感も多く、理性に適はぬ人事は美感も乏しく、甚しきは不美又醜と化し去るのだ。詳言す

れば、人間は社會に依つて生存を保ち、社會の基礎たるものは卽ち人間の理性だから、人間が祖先以來生存を求めつゝある惰力として、感情は早くもソレに同化し、自然理性に適ふ事物に向つて多く美を感ずべき道理があるのだ。尤輓近或る文學派は人事を擧げて情慾に放任し、一切理性を問はざるを以て主義と爲すが如きものあれど是等は他に反撥さるゝ所あつて、一時常識を失ひ狂語を逞くするのみ。苟も人間にして生存を好まぬことゞならざる以上、ソレの必要機關たる社會、其社會になくて叶はぬ人間の理性と其美感とが背馳すべき道理がない。されど又此美感たるや、其發作の當下に於ては毫も理性の合否を識認するものでない。否、自己が人間たると動物たるとをさへ自覺するものでない。卽ち理性に合へる人事の美も、理性に關係なき花鳥風月の美も、當下の感は同一である。唯其來歷を問ふに至つて、一方は知識を通して、生存の必要上より偶々理性と同化し理性と軌を一にせる感情であると云ふことを辨するのみ。左すれば此種の美感が矢張純然たる美感であつて、卽ち無關心的であることも、是で判明すべき筈。隨て僕が演劇の脚色に就て云々するのは、敢て善と美とを同視したのでないことも諒せらるべき筈だと思ふ。處で此「無名氏」の劇はドウかと云ふに、大筋の加拿陀獨立黨の精神を始とし、史紋毛雅の煩悶悔悟、其妻子の償罪報効、就中次安毛雅の美勇壯烈なる行爲、皆是れ人間の人間たる本領が十分に發現されて居て、而かもソレが又冷淡枯燥の木石的でなく、斷えず温かなる血に滿ち、濃かなる涙を濺いで居る。一言以て評すれば、此「無名氏」は美學に所謂悲壯美の表象とも云ふべきものであらう。故に僕は幕一幕と感興を高め、同情を起し、遂に不覺の涙を飲み込ひに、鼻孔へ通ずる涙管の炙きを卽ちたことである。以上三點が先づ今回の新劇に對して多大の感興を持つた譯合で、其他俳優の技藝等は、前回の「野火」と比して優劣得失交々であるが、結局日本人の眞似でなく、西洋人の眞似だと云ふ點に於て、自然物珍しく又大眼に見許せる處があつたやうだ。之につけても、僕は今後も新劇を觀るなら必ず西洋の小說若くは脚本其儘のもので、一切日本的燒き直しをせぬものに限ると思ふ。遙かなる未來は知らず、今日の處で、右の外に寫實上より新劇を責望し、而して其責望の完からんことを欲するはマダ〳〵酷だ。卽ち新劇の生命は今や專ら純然たる西洋趣味を演ずる中に存すると云つて好からう。尙是からは幕々の批評にかゝるが、前にも云ふ如く僕も今回は一種新規な感に打たれた揚句で、詳細の記憶もないから、務めて簡短に遣ることゝする。

序幕英領加奈陀政府公判廷の場、二幕目同監獄廳裏閉の場、三幕目シャンブリー村毛雅宅の場は、既に濟んで居て、四幕目國境大雪中悔悟の場から見たのだが、新劇の事だから舞臺の裝置は十分整つて、滿目雪皚々たる山路の景色。ソレへ親子四人の賴む方なく踉蹌としてさまよへる樣は、恰も一幅畫圖の趣である。殊にフサ〳〵した長き髮に窄きツボンの人物などは、西洋歷史の挿畫に見るのと同一で、如何にも昔なつかしく思はれた。知らぬ異國に昔なつかしいとは妙だけれども、コヽが老人の僕なので、單に昔と云へば、知ると知らぬに拘はらず、直き美感が胸に込み上げて來る。之に反して今と云ふと、餘程膏が取れて居ぬと腥さゝに堪へぬ。而して是が歷史美の生命に緊款問題だとは信ずれど、僕が如く神經過敏でも困る。宜く自ら戒むべきである。阿々。此幕の如安と次安とはまだ二十歲以下だが、藤澤と喜多村との背ころも、西洋少年として丁度好かつた。此後々の幕に至る

と、二人共既に西洋の大人となるのみならず、次安は別して陣頭に花々しく働く勇士の大立者となるのだから、身幹も十分魁偉長大と云ふ風にしたいのだが、是は到底無理な注文。横に張るなら例の縫ひぐるみもあれど、背丈許りは繼ぎ足しが出來ぬ。此事は日本俳優が西洋の事實を演ずるに方つて、慥かに一個遺憾の點であらうと思ふ。尤も今回の毛雅氏は元々佛國人種だから、アングロサクソンとは違ひますと云へば先づ通りもするが。木村の史紋、己が罪を悔恨するの餘り、精神錯亂して狂人となり、幻に見ゆる亡友に陳謝する七顛八倒の擧動は、實に物凄きまでに出來た。藤澤の如安、喜多村の次安、同一孝子の表情中にも、一は温良、一は猛勇、自然と未來の人格が現はれて居るのも納得。青木の妻武兒、病に苦むのみで見せ場がなかつた。大勢の村民は正義の怒りだとは云へ、斯かる末路の人々を無闇と窮迫毆打するのは寧ろ憎い。

五幕目靜山莊志士大會合の場　一面川に臨める宏大なる家屋は、主人の性格と伴つて、自ら豪壯を感せしめる。机の上に新聞を讀みつゝ父と語る木下の紅娘、日本娘ならマセた口上で面憎いけれども、西洋だと思ふと矢張愛すべし。但し衣服の飾りが珠玉盡しなのは、平服として奢り過ぎはせぬか。此人の容貌なら左樣にせずとも、紅娘。其人には十分であるのだ。無名氏と聞き驚きの態度は云ふに足らぬが、ソレが去らうとして思はず抱き止める呼吸は、自然に出てよく出來た。高田の慕令、容體と云ひ、音吐と云ひ、慥かに一黨の長者となりすまして、殊に一種老蒼の氣が見えるのも感服。兒島の公證人宜克、丸々と肥えた身體で、輕快滑易の擧動は、原本に見える

無感覺に出立して無の信望を受くると云ふ柄ではないが、此劇の如き眞面目の人物のみが多く出る場合には、此役位に道化をさせねば、觀者も餘りに氣が屈して、舞臺の光景にも變化を缺く恐れがある。矢張よく修正を加へたものと云つて好い。佐藤の敏仙甫、五味の德晏己、東の章廉吳禮、何れも揃つて頼もしい若人。尤も敏仙甫丈は是非一頭地を抜いて見えねばならぬ筈だが、左樣にもなかつた。但し原本にある紅娘への戀の心をコヽで少しもほのめかさぬ丈は、思慮があつても好い。喜多村の自由兒次安、前にも云つた通り身體は何分にも小さい。又進退擧動の如きも、ドコカ沈毅と云ふよりは沈鬱と云ふ方に見え、斯かる同志の初對面に多少氣欲の足らぬ感もしたが、よく思ふと、父の事に關して飽まで慙愧を抱きつゝある表情としては、此方が却て當を得たかも知れぬ而して顏面は今少し風彩を粧つても宜からう。左もないと紅娘の抱き止める時餘りにアッケないではないか。六幕目シャンブリー村燒跡辻說法の場、毛雅氏が家屋の故趾は如何にもよく慘況を示して居るが、貧乏辯護士の住居としては、毀廢しながらも聊か規模の大き過ぎるやうだ。喜多村の次安がコヽへ來て獨り悲感に沈んで居る所へ、木村の村民白渣が過ぎりつゝ注意を加ふる言動は一寸をかしい。又英國の兵士に對して、權威を憚らず抗辯する處も朴率にしてよく出來た。深澤の國事探偵李布、威丈高になつて白渣を詰る處、忽ち革命黨兵の至ると見て逃げ込む處、慥かに西洋的二枚目敵の役はあつた。藤澤の革命僧如安、威嚴侵すべからざる說敎の態度より一聲高く震つて、革命軍の神意に適ひ、神助を蒙り、前途多望なるべきことを唱道する、其激勵昂奮せる精神まで、申分なく宗敎家的性格を表はして居た。弟に逢つて互ひに手を握り、不言の中に無量の感懷も大得心。高田の慕令、政裝させても矢張大柄にして品位もあり、慥かに老將軍と稱するに足つた。將軍指揮の下に、一部の革

命黨軍隊が、萬歳の聲と共に各々白刃を閃かして猛然突進した時は、老人の僕も覺えず血湧き肉躍り、誓つて彼等と共に敵陣に打入り駈け散らさねば止まぬと云ふ氣になつたのもをかしい。喜多村の次安と數多の英兵との立廻りは最も眼醒ましく、如何なる立師が後ろに居るか、新劇の此技も中々侮るべからざることを知つた。尤も立廻りと雖も、新劇は成丈寫實で通し、一切舊劇式には流れたくないものだ。藤澤の如安が敵の迫るを防ぐ立廻りに、凸地に立ちて、樹木を楯に、小刀を逆手に把つての見えは、餘りに舊劇臭い。なくもがな。

七幕目マイソンの辻孤家の場、荒木造りの一軒屋は毛雅母子の隱れ家で、見るから憐な佗び住居。此舞臺はブン廻す度に表戸と室内とに變ずるのである。室内には既に負傷したる高田の慕令を寢床に臥さしめて、時々唸き聲を發して居る。其譫語が娘の紅娥を呼ぶのであるが。日本氣質で云ふと、斯かる大事の敗れた場合、生死共に其事をこそ憤恨すれ、今更女々しく娘にのみ情を遺すは、首領たる人として萬々あるまじきことであるが、ソコが西洋流義で、モハヤ義よりは愛に牽かるゝ處、吾人地を換へて考ふれば、強ち無理とは思はぬ。況や娘を呼ぶは敏仙甫に妻はすの要件あり、此要件は他日再擧して革命の初志を果さしむるに一個のカスガヒであるから、此點より云へば、娘を呼ぶのは又單に私事でないのだ。ソコデ木下の紅娘、相替はらず美艾だが、心の外の夫を持つこと、聞いての驚愕。而して父の言も理あり、殊に其夫たるべき人が眼前に居るのだから、云ふもつらく、云はねば濟まず、とつおいつの苦き思案。遂に思ひ切つて心中の一大秘密一大決定を吐露するに至るまで、コヽが此劇中の山とも云ふべく、識岳血池の其間に一脈の春風が暗に通ふ處だから、木下も定めて意匠を凝らしたものであらうが、嗟伏し眼勝ちに身を搖すり、時々吐息する許りで、マダ〳〵大に物足らぬ感がした。しかし「野火」の妾お八重で苦悶やら平氣やら不得要領であつた時と比すれば、數等の出來だ。佐藤の敏仙甫、戀に的が外れて失望の表情も、根が勇士の事だから此位に止めねばなるまい。青木の母武兒、俄に起る内外の騷動、殊に意外の事の漏洩から、身は衆の迫害を受けつゝも、猶烈女が老後一片の魂を認めらるゝ處、流石に熟練の事として感心。藤澤の如安、武力の方には不得手の宗教家だから、此の幕では先づ舊劇の和事で、突ッ轉ばしとは至らずとも、母を衛つて力足らず、一發の飛丸に敢へなき最期。尤も原本では尚ほ弟に代つて獄中に投じ、遂に刑死に終ると云ふ悲壯な筋になつて居れど、ソレをハショッて是丈では、藤澤としても少々本意ない感があらう。喜多村の次安、戻つて見ると、母の厄難、兄の重傷、百方哀を乞ふも、多數の革命黨は毛雅の二字の爲めに耳を假さざるより、辛抱切れて激昂悲憤の態度と變じ、其無情を鳴らし、沒曉理を罵る處、同情々々。肝心の技藝如何は僕考ふる暇もなかつた。高田の慕令、原分本では早く次安母子に同情して居るのだが、此劇では、毛雅氏の居宅と聞きて、傷を忍んで立ち去らんとし、如安が死を見、次安の辨訴を聞くも、猶暫くは他の黨員同樣の感を持つて居たれど、次安の言々痛切を極めたので、忽ち角折れ襟拔けて、思はず其膝下に縋りて陳謝する處、演劇としての變化は斯くあつて最も好い。觀者も是で一層胸が下るのである。之に反して數多の黨員は、最初の憤怒凌虐は其筈としても、段々譯が分かれば今少しは感動すべき筈だに、始終環立して冷然たるのは面憎い。原本も海軍島で最初如安の辨訴には、矢張此の如き黨員の態度としてもあるが、一體西洋人は日本人に比して物事がねつい。

日本人は義の爲めに怒ることも甚しいが、理が分かれば忽ち折れて、本人にさへ罪を憎まぬ。況や其妻子に對してをや。寧ろ之を扶け痛はるを以て又一個の義俠とするのだ。一は淡泊、一は濃厚、東西人心の異なるは最前承知で居ても、此劇此原本に於て今更のやうに其執念深きに驚くのである。

大切ナイヤガラ上流の場、滔々たる大河の中流に、一個の小舟は重傷を負て死に瀕せる喜多村の次安と、ソレを抱て介抱する木下の紅娘とを載せて泛んで居る。是許りでは舞臺の活動が足らぬから、原本では俘虜となつて居るべき佐藤の敏仙甫を岸邊に出して紅娘との問答。數語忽ち追兵が放ちたる砲丸は舟に中つて火焔を起し、半ば燒けつゝある舟中に、勇士と佳人と其火よりも熱せる心誓情約。早や蠱く波浪は用捨もなく舟を送り、アハヤ一百六十尺の瀑湍に落下沈没せんとす。而して此悲しく樂しき兩個の夢は、偕に碧瑠璃淵底に於て如何なる長夜を契るらん。巖角を攀ぢて目送する敏仙甫か妬たさ羨しさも、又推し測られて哀れである。嗚呼悲劇々々。而かも是れ情慾放縱の犬猫的悲劇に非ずして、即ち理性節度の人間的悲劇であつた。

俳諧三十六歌仙及行脚俳人芭蕉

堂の主人から何か批評をせよとのことであつたが、二書共に、餘りに珍品珍本珍装なので、僕が如きは一辭を贅することも能はぬのである。尤も此「俳諧三十六歌仙」は、往年僕が「ホトトギス」の隨問隨答欄で、或る人の問ひに答へて僞物だと云つた懺悔談がある。ソレは當時子規居士の許に一本があつて、佐藤一齋翁の跋文を始め、畫法なども丸切其人のでないらし處より、居士は先づ以て僞物だとして居られ、僕もソレに同意であるから、遂に此一本を以て普く世間の此書を僞物だと速斷して答へて置いたのだが、其後藏書に富んで居る露石氏の許で此書の別本二三種を示されて見ると、いづれも正銘正物で、曩の本などゝは競へものでない。殊に此書は蕪翁の揮筆も又其刻本も數種になつて居て、畫樣の大小などもソレ〳〵相違して居るのである。ソコで始めて僕等が速斷をして居たことを恥ぢ、世間へ飛んだ誤りを吹聽して居たことを恐れ、更に隨問隨答欄で、最前の取消しと、眞本のあることゝを報告して置いたことである。而して今回發兌の本を見ると、右露石氏所藏中の最初の揮筆又刻本に係るものと同一であるらしい。表紙繪に羊があるが、奴ッ僕の露石氏許でビックリした事を今も笑ふが如く見えて、如何にも面目ない。

「行脚俳人芭蕉」は、個樣な著作のあつたことは、僕一切知らぬので、盧子氏に話して見ると、氏も同樣であつた尤も氏の云はるゝには、此頃集めて居る居士の「書簡集」中にナンだか此著作に關する事を見たやうに思ふから一應搜索せうとのことであつたが、爾後氏も多用で遷延中、右「書簡集」は活版所へ送られてしまふことになつた、今は搜索が出來ぬ。來歲早々「書簡集」が發兌となるから、自然「行脚俳人芭蕉」著作の由來も世間に知れ

ることがあらう。尙虛子氏の考へでは、此著作は何か或る地方の雜誌の求めに依り起草して送られたのが、其雜誌は廢刊でもして發表するに至らず、轉傳して文淵堂の手に歸したものであらうとのこと。兎角碧梧桐氏の鑑定もある通り、居士の遺筆に相違ないは勿論、其草稿の文字が頗る楷正にして謹密なのは、やゝ晩年に及で物されたものゝ證だと、是も虛子氏の考へである。併し通篇是と云ふ山もなく、平々然として筆を着け想を抒べた處は卽ち行脚の翁が生涯の如是觀であるとは云へ、又居士が大いに心血を濺いだ著作でないとも想察し得らるゝのである。

櫻井中尉の肉彈

「肉彈」は同鄕の櫻井鷗村氏の舍弟陸軍中尉忠温氏の著で、此書の無上なる名譽を荷ひ、世評嘖々。今や三十餘版を發行して世に歡迎されつゝあることは誰れも知る所。僕も同鄕人として窃かに抃喜しながら、未だ閲覽の機會を得なかつたに、頃日偶々一本を得たので披讀して見ると、實歷とは云ひながら、事實の明細、觀察の周到、叙情の痛切、又自己の身邊より關係を起して、汎ならず浮ならざる限りに、周圍許多の戰狀までを記述された手段は實に敬服の至り。如何に忠憤の熱情の發洩したりとも、天凡の才藻之に伴ふにあらずば、此の如き著作の出來やこと

ことは承知して居たれど、其舍弟に於てサーベルを握る手に兼ねて彩筆を揮ふの技倆が斯くまでならんとは、意外であつた。又自畫の如きも僕は分からぬながら、慥かに專門家の戶を窺つて居るやうに思はるゝ。且それが負傷の爲め左手の業だとは驚くの外ない。而して僕が此書に就て殊に感じたのは、旅順戰爭の事實が想像以上に激烈慘酷にして、又我が將校士卒が想像以上に忠勇と友愛とに富んで居ることで、敷島の大和櫻が、晴旭に、風雨に美芳を盡した百態の寫眞ブックは卽ち此書であるとも云ふべきだ。顧みて世間の文學者と稱する者を見るに、演劇に小說に力めて人間の心理作用を解剖し、其行爲の自然的關係を吟味し、それを美的に描寫せんと競つて居れど、其結果としての作品は、概ね社會の弛漫方面卽ち懦弱方面に傾向し、成程或る人間が自然的に描かれては居らうが、吾人共存の機關たる國家と社會とを基礎として觀察せば、多くは是れ病的人間にして、健全的人間は非ず。他の動物と共通の情慾的行爲にして、人間特有の理性的行爲に非ず。どいつもこいつも、國家と社會とに取りては厄介至極の主人公であるやうに思はれる。美とは果して此の如き人間の上のみに存するものであらうか何故國家と社會との基礎と一致し、卽ち吾人共存の目的に順應する人間の行爲には美が表はれぬであらうか。吾人の美感は何故吾人共存の目的と違ふ方面にのみ起らねばならぬであらうか。斯かる道理のなきことは萬々知れて居れど、斯かる作品の多く出づるは事實である。是れ奇怪至極だと僕は獨りで憤慨して居たが、今や此「肉彈」を讀むに至つて、大に自ら慰籍する所があつた。蓋し此書中の人物及其行事情態等は、盡く是れ忠勇友愛の極致

である。即ち倫理學上より求むる善の理想の表現である。が、同時に亦文學上より求むる美の理想の表現であるのだ。尤も僕が此書に對するの際は、吾人が國家的敵愾心や、同胞の負負心や、道義の崇敬心や、其他此戰爭に關する一切の利害得失心が、雜然として一胸に集中し、爲めに多大の感憤を起し同情を催したことは勿論だが、此等の總てを排除し去つても、猶殘りの物、即ち義の要素たる無關心的脫我的の一味の快感を享受したことである、概念的に之を言へば、壯美もある。優美もある。就中悲壯美が大部分で、又滑稽美の分子や、のんき美の分子もあるであらう。色をも香をも知る人ぞ知る。此書を讀んだ者で、苟も人間の本心を失つて居ぬ（即ちニーチエ狂に罹つて居ぬ）限りは、誰れも僕の言を首肯することゝ信ずる。之を要するに「肉彈」は一部小說の粉本である。一曲演劇の原書である。一篇詩賦の本事である。世間よく戀は神聖であるとか云つて、文藝上競つて其事を叙寫すれど、「肉彈」中餘多の將校士卒が一切の私情慾念を脫却して、唯國家の爲め一死を期し、其死出の道途に互ひに睦み合ひ扶け合ふの情態、個裏何の虛僞があらうか、何の汚濁があらうか、實に淸淨無垢の極であつて、戀が神聖ならば、此烈士の心事も亦神聖である。又彼の重傷を負て氣息淹々たる一兵が惛懵の精神と苦澁の舌とを以てすら、猶旅順の二字を說く、此死生渝はらぬ熱情は、相思の男女が後の世かけて心中する熱情と、果して輕重があらうか、文學者得意の心理解剖や自然不自然の吟味を以てしても、烈士の行事情態は、優に人間の一大眞相を認むべく、隨て之を小說とし、之を演劇として、多大の好材料となるのである。而して此の如き人間は即

され得るものと斷定さるゝのである。其れ然り、亦た何を苦んで他の弛漫的懦弱的方面のみを描寫して、直接に讀者たる青年男女を賊ひ、間接に國家と社會との基礎を危くするを要せんや。尤も「肉彈」は戰記である。戰記は材料如何に豐富なるも、其局面は單調である。變化は唯戰爭其物の變化であつて、他の局面に涉つての變化でない。故に戰爭の事烈士の行爲を以て、實際に小說とし演劇とするには、猶其地を內外迭ひに取り、其事を今昔通じて示す等許多の意匠を經べきは勿論の事。且前述は只僕が今回「肉彈」に感じたる一端より、健全的人間と美感との關係を略論したまでゞ、推擴して之を戰爭以外に於ける平和の社會其他あらゆる局面の人事に及ぼし、種々なる理性的行爲の主人公を捉へ來つて、小說演劇の美を發揚せんことは、猶僕が此上の希望である。即ち「肉彈」の感興に浮かれて、隴を得て蜀を望むものである。又「肉彈」中に健全文學の美を瞥見して、一斑より全豹を窺ふものである。

我が俳句と日本新聞との關係

頃日「日本」新聞には我が同人の俳句欄を見ぬことゝなつた。誰れも知る如く、同人の俳句、否、明治文學的の俳

句は、嘗て其勃興と共に此「日本」新聞に現はれ、爾來十數年間殆と一日として現はれぬことはなかつたのである
に、今や忽焉として其形影を歛めたのは、吾人如何にも奇異の感がする。
併しよく思へば、無常轉變は人間界の定則であつて、歳月を經れば桑田も變じて海となるのだから、我が同人の
俳句が「日本」新聞に見えぬことゝなるのも、必ずしも奇異でない。既に十數年間常態を保ち繼續して居たと云ふ
ことさへ、長いと云へば長かつたのだ。唯だ憾む所は、我が同人の俳句即ち明治文學的俳句を、始めて世間に紹
介し、世間をして俳句と「日本」とは一にして二、二にして一なるものと思はしめ、「日本」派俳句の名をさへ作ら
しめたのみならず、其紹介の結果は今日の如く文學的俳句の隆盛を致し、殆ど全國の津々浦々、延いては韓國に
清國に乃至米國の果てまでも、苟も本邦人のある處には、我が同人の俳句を見ぬことなきの有樣に至らしめた、
其因緣深き「日本」新聞が一旦それと關係を絶ち、紀念の形さへも留めぬことゝなつたことで、僕は返す〳〵も、
我が同人の俳句の爲めと云ふよりも、「日本」新聞の爲め即ち日本新聞名譽上の爲め痛恨長大息するのである。
今更云ふでもないが、戊辰維新の國勢は、亦文運を振興せしめ、文運の振興は、十七字形の詩のみを遺さず、即
ちそれを沈衰したる文政天保より救ひて、創始の元祿と再興の天明とに對して、第三興隆の明治を成さしめた。
而して創始の元祿と再興の天明とは、智識學問の未だ普及せざる社會に於てした爲め、其沈衰が暫時にして到つ
たのだが、第三興隆の明治は、社會一變して智識學問は全世界と呼吸を通じ、日に月に發達普及しつゝあるから

運が氣運だから、子規居士なくとも、成るものは成つたであらう。又子規居士の外、居士と前後して俳句の革新
に意を注いだ人々もあつたであらう。けれども、專心に熱心に殆ど一身の全力を擧げて斯道に投じ、舌を爛らし
筆を禿せしめ、句作に議論に乃至後進の誘導に、十數年一日の如く、維れ日も足らず、孜々として貢献し、病革
まり氣息淹々たるの際までも糸瓜佛の風流を歌ひ、以て斯道を發達普及せしめた事業は、吾々如何に謙遜して云
つても事實の證明する所、子規居士が第三興隆の明治俳句を成しあげたと云はねばならぬ。而して此の如き事業
も機關なくして活動が出來ぬが、其活動の機關は主として(他にもあれども)虚子氏の責任を獨擔して發行せられ
た「ホト、ギス」と、陸羯南氏の進歩的國粹主義の下に統督された「日本」新聞である。而して「ホト、ギス」の躍起
したのは、「日本」の先驅たり同伴たるの力に賴つたことも少なくない。又厚み深く俳句を講ずる月刊の「ホト、
ギス」は、廣がり大に俳句を擧示する日刊の「日本」と、相待ち相扶くるにあらずば、此の如き事業の機關たる實
を全くせぬのである。考へて茲に到れば、我が同人の俳句即ち明治文學的の俳句が、如何に此「日本」新聞と因緣
深く、且其恩惠を荷つたかも推し量からるゝことである。況や羯南氏が子規居士に於ける、交情の親愛は父子の
如く斯道の上の推重は師資の如く、一介の書生たるに拘はらず、學問老成の先輩記者と伍を爲さしめ、乞ふが儘
に新聞の紙幅を與へ、就中俳句を第一面に掲げしめたる如きは、空前の例にして、是より後は都會を始め全國の
各新聞皆之に倣つて、苟も俳句を掲ぐれば必ず第一面に限ることゝなつた。其他居士が漫遊すれば旅費を給し、

居士が病めば藥餌の資を助くる等、十一分に後援を與へて、斯道の爲めに其事業の爲めに、遺憾なく活動せしめられたことで、此厚意と恩惠とは、吾々の永遠に銘記して忘るゝ能はざる所である。子規居士が病軀を奮つて斯道に盡くされた精神は、文學上の卓見と、自己天賦の本分を信じたるとに由ると雖も、羯南氏の鼓舞推奬亦大に力を添へ、居士も感激して知己に酬ひたるの產物だと云つて不可なからう。

故に子規居士の歿せらるゝや、其前後より我が同人の俳句は、所在他の新聞雜誌にも現はれ、各々特色を發揮しつゝありたるに拘はらず、此「日本」新聞は恰も我が俳句の發蹟地、又我が俳句の總本山とも云ふ如く、同人間之を崇敬し之を重要視して、曩きには碧梧桐氏が儼恪なる資格を以て選者に當り、爾後旅行中の代辨として、虛子氏は和易なる態度を以て之が繼承者となつて居られたのだ。

子規居士の遺業たる我が同人の俳句卽明治文學的の俳句は、既に豫想以上に發達普及を遂げたことであるから、此「日本」新聞の存廢や其關係は、斯道に取りて別段の影響を來たすものでないことは勿論だが、前述の如き因緣は吾々をして此「日本」新聞を忘れんとして忘るべからず、絕んとして絕つに忍びざらしめて居たに、不幸なる哉羯南氏は病故を以て該社を他人に讓られ、幾くもなくそれが組織と主義との變更を見て、遂に吾々同人の俳句欄を「日本」新聞上に置くべからざる事情となり行いた。一樹の陰一河の流のそれにさへ因緣を感ずるものを、今や十數年の關係は一旦にして斷たれた。吾々焉ぞ悵然として悲み、惘然として慽みざるを得んや。

ることであらう。隨つて同人が久しく仰ぎつゝあつた發蹟地又總本山は、それを「日本及日本人」に仰ぐことゝなるのである。

但し是迄「日本人」は一月二回發行の雜誌であつて、今後も是れ以上多く回數を增さぬであらうと云ふことだが、此の如き回數の少なき俳句欄となれば、「ホトゝギス」と左程の區別もなく、彼の日刊月刊相待ち相扶くると云ふ目的にも切ならぬのみか、出句の人々に於ても必ず飽き足らぬ感が多からう、要するに是れ發蹟地總本山と云ふ名跡が辛うじて存じ得ると云ふまでゝ、我が俳句事業の活動機關は頗る短縮されて不便を見ねばならぬこととなつたのだ。聊か殘念の次第である。

が、幸にして目今虛子氏は別に「國民新聞」に於て、「日本」と同じき俳句欄の選者を相當されて居て、新聞の名稱こそ違へ、是迄「日本」に行はれた事業の一部は、分かれて此「國民新聞」に於て行はれて居る。左すれば「日本及日本人」の回數に飽き足らぬ出句者は亦は「國民新聞」にも出句して好からう。而して吾々事業の活動も猶大に餘地が出來て居ると云つて好いのだ。

猶又碧梧桐氏も旅行を終へて歸京せられた曉は、「日本及日本人」の選者に復任せらるゝの外、別に他の一新聞の選者を擔當し、虛子氏と相並びて、既往に於て「日本」に盡くされた力の幾分をそこへも用ひらるゝが好い。此の如くなれば、既往の「日本」新聞としての機關は分れて二となり三となり、益々多く斯道の發達普及に便する譯で

あつて、今回「日本」新聞との離別は、徒に悲しみ恨むべきどころでなく、更に吾々に一種の勢力を加へ、一層斯道に盡瘁するの機會を得て、内にしては子規居士の靈を慰め、外にしては陸羯南氏の誼に答ふる所以であらうと思ふ。同人諸君以て如何と爲す。

趣味句風の異同

右を稿し了つた序に、尙僕は一事申したいことがある。それは各家俳句の趣味句風と云ふことである。今ま「ホト、ガス」に於ける碧梧桐氏と虚子氏と、其趣味句風に異同がある。「俳星」の露月氏には露月氏の趣味句風がある。「寶舟」の青々氏「土賊」の紅緑氏には亦各々の趣味句風がある。其他苟も一家を爲す俳人は、概ね趣味句風を持ち居られぬものはない。故に同人間に或は云ふ、子規居士歿してより趣味句風の統一を缺いた。居士にして居らば此の如き分裂は見ぬであらうと。而して其分裂を以て斯道の衰頽の如く考ふる輩もあるが、僕は寧ろ之に反對だ。何となれば、俳句の趣味は美に存する。美は實に多方面である。決して一人や一團體や一代の人々に歌ひ盡くせるものでない。千百年立つたとて中々歌ひ盡くせまいと思ふのだ。斯かる多方面なる美だから、元禄の芭蕉翁の外諸家に於て更に一少部分を歌ひ、明治の子規居士其他同人諸氏に於て更に一少部分を歌ひ、天明の蕪村翁其他諸家に於て更に一少部分を歌ひつゝあるのだ、而して吾々の美を感ずるは、性質と境遇とに異同があるから、年代を經るに隨ひ、多方面の美は漸次其方面を歌ひ廣めらるゝことゝなるので、元禄に於て芭蕉翁の外諸家、天明に於て蕪村翁の外の諸家が、各々異なる性質と境遇とに由つて多くの趣味句風を作成した如く、明治の同人も子規居士の外、各々に於ても自己が性質と境遇とに隨つて多くの趣味句風を作成しつゝあるのは、自然の運命である。子規居士の生前に於てすら、碧虚露紅青霽等の諸氏は、段々と嶄角を現はし、各々特色を呈出されたので、居士はそれを見て莞爾一笑、斯道益々振へりと喜び、又某氏の技倆は迚も眞似が出來ぬ、某氏の句風は今一層思ひ切つて遣るが好いなどゝ云はれて居た。蓋し物事の創始に方つては、人間の赤ん坊時代のやうなもので、人々の擧動も相似て居れど、サー成長して來ると、中々銘々の我を張り、自己は自己の見識を立てる。而してそれが人間界の平和を亂らぬ限りは、一面人間界一切の事業を益々發達せしめて行くのである。左すれば俳句界の傾向も同じ運命に赴き而して、それが却て斯道の發達、即ち美の多方面の開拓の徑路であると云ふことも十分分からう。若し然らずして、碧虚露紅青霽其他の諸家が、イツまでも自己の特色を掩却し、一に子規居士晩年の一調子を守るとか、又は現今の諸家中の一家の句風に一同が阿合することゝなつたら、それこそ斯道の衰頽期と云つても好いので、且彼の多方面なる美の開拓を將來に如何せんや。故に今日の如く諸家の各々趣味句風を異にして居らるゝは、僕を以て見れば、最も目出度き現象であると思ふ。

或は此の如く諸家の趣味句風が違つて居ては、初心者の方向に困ると云ふ人もあらうが。是れも餘計な心配であ

る。前にも云ふ如く人々性質と境遇とを異にして居るものである上は、初心者と雖も少し俳句に指を染めつゝある内には、自然と自己に近き所の一家の趣味句風に多くの同感が起る。左すればそれに隨つて、撓めず曲げず、其一家を師として行けば好い。若し師として行く内に、他の一家へ同感が出來たら、甲を去つて乙に就くも好い或は甲乙共に帳とするも亦妙だ。猶才能手腕との餘力あらば丙丁を併せて師とするも好い。乃至古今の諸家を盡く師とし、其中より自己の心に適つて粹を抜いたと思ふものを無形的の師としても好い。それから段々と自分にも家を成立する位に到らば、今までの一切を抛ち、更に自己の考へのみを以て新しき美の方面を拓き、別に趣味句風を創して世人に示すのも愉快ちやないか。尤も是れが倫理學上の目的とする善と云ふものになると、其行爲は直ちに人間社會の實行に現はれ、近くは一家族、遠くは一鄕一國一天下の關係となるから、自己が一寸善は此の如きものと信ずるからとて、王陽明主義を以て、滅多矢鱈に決行することは出來ぬが、十七字形詩中の空想に於て、自己を始め一國をも現はし一天下を現はし、乃至森羅萬象をも現はして、自ら娛樂し、人をも慰藉する丈の事業だから、彼れと違つて人間社會には殆ど何等の心配もない。但し複雜長形の文學となると、それも傾向に依つては隨分社會に危險を與ふることもあれど、簡短淡泊なる十七字形詩は、何れに向つても誠に安全である。或は又一味の猥褻などを歌つたら如何と云ふ人もあらうが、僕は此の如くなれば、モウそれを川柳とする。我が俳句だとは思はぬ。前述は總て我が俳句に從事する者の範圍内に就いて云つたのである。猶川柳に就ても序に云

[illegible]する程の事は先づかいのだ。何となれば、川柳は總て滑稽であつて、眞面目でない。且それをタツタ十七字形中に現はすのだから、極めて淡泊。極めて洒落。旁々以て害毒分子が餘り出來ぬのである。川柳すら然り況や我が俳句に於てをや。初心者決して諸家の趣味句風が區々なるに途惑ひするに及ぶまい。斯く論じ來ると、今日諸家俳句の趣味句風が區々なるは、些しも憂ふべきことでない。子規居士の嘗て喜ばれた如く、吾々も共に喜ぶべきことである。而してそれと同時に、或る一家の趣味句風のみが美であつて、他は總べて美でないと云ふ言の非理なることも分からう。尤も熱心の作家及び一團體か、一の趣味句風を主張するに方つて、是れより外美はないとまで自信することもあらうが、それは研究進業の方便として自ら奮ふには好い。けれども眞に此の如きものと信ずるの餘り、世に向つて告白し、甚しきは普通の交際の上にすら隔てが出來ると云ふことになつては、弊の極だ。右は俳句の趣味句風の異同と間々伴つて生ずる事實であるから、一言老婆心を呈して置く。

僕の多忙と自筆文

僕は近來雅事の外、俗事の忙劇が相續て起り、今後も猶此境遇を渉らねばならぬやうだから、自然諸方の通信に

對して、心苦しく思ひながらも御返信を延引することが多い。而して僕は時々芝居も觀にゆ、文章上などにはノン氣な口調を弄することもあるから、或は隔地の人々の中では、閑逸で居ながら、懶惰若くは据傲なのだと思はるゝこともあらうかと、内々神經を痛めて居る。而して其實芝居などは人の誘引か左なくば老梅居雜話の種取りの爲めで、決して退屈紛らしに行くのでない、ソンな勿體ない事は、近來殆ど夢にも見ぬのだ。又文章の口調は全く自己の癖で、忙中にも筆を執れば兎角ノン氣な洒落が出て困まる。而して是れも最近多く四角張つた論理問題に從事するから、些しは改まつた積りである。呵々。それから序に云ふが、僕の文章は「ホトヽギス」は何欄に拘らず皆自筆で、尤も往年勤番者と昔の旅行とを碧虛二氏が筆記されたアノ二篇を除き、其他は皆自筆である。而して他の新聞雜誌にある僕が文章は、「懸葵」の京登りと其他一二の外は、悉皆他人の筆記である。著書も亦同斷である。右は同一僕の文章で往々句調や用語等の相違があり、隨つてそれを疑はるゝ人もあるやうだから、歳旦當つて一寸ふ斷り申して置く。

神式婚禮の媒妁人

祥瑞し麗い窓より顧みれて新婚の媒妁人を勤むることになつた。媒妁と云ふ役は普通の式で遣ると隨分面倒なものだと聞いて居るから、聊か自便を圖つて、此頃流行の日比谷太神宮の神道式を勸めた處が、幸嘉納にせれらて愈々それと極まつた。此式は知人某が既に行つた實驗談と、萬朝報に嘗て儀式の概略を揭げてあつたのを見て居るとで、僕が役目の爲に勤め易くなつたことを知つて、先づ以て安心した。愈々黃道吉日、僕は紋付の衣服袴、細君は白無垢黑紋付の衣服と云ふ裝束で、珍しく仂車を雇つて、日比谷へと馳せ付けた。北側の門から這入つて奉齋會の大玄關を見渉すと、數多の美麗なる衣服の男女がヅラリと並んで居て、今や寫眞を取る處である。扨は新夫婦等がモウ斯んな事をするのか、ソレにして少々早や過ぎるやうだと思ひつゝ近づけば、一同知らぬ顏で、是は今日第一番目の儀式を濟ませた連中であつた。而して僕の關係のは第二番目に屬し、聞けばまだ第三番目もあるとの事、太神宮婚禮式の流行の盛なる以て察知すべきである。奉齋會の建物を右へ廻つて、小玄關へ仂車を着けると、婚家姻家の男女は既に揃つて居て、鶴首を伸ばして僕等を待つて居る。ソレも其筈、儀式の時刻は僅に二分後に逼つて居たのだ。やがて一の神官の案内で、僕は聖殿に附き添ひ、細君は嫁御寮に附き添ひ、兩家の親戚一同それに續いて、神殿へ赴いて、階を昇る。階上には一の神官が黑塗の盥に同じ塗の水筒から水を注いで一人々々に手水をさせ、それを拭ふのは白紙で、一寸心の改まる氣がする。神殿は中央の奥の間に、神座に對して八足の机數脚を置かれ、中の間下の間と區劃され、更に左右に控所二間宛を區劃されて居て、此上下の間と中央の間とは半ば襖で仕切つてある。又御簾もかゝつて所々捲き上げてある。そこで僕と聖殿とは左右の上の間へ、細君と嫁御寮とは右方の上の間へ、兩家の親戚は中央の下の間へ、それ〴〵差圖に依つて座した。聖殿は某學士

で、斯道では評判の好い若手、洋行もして居て、殊に世界の産銅の百分の八十を占め居る米國各地の大鑛山を跨にかけて戻つて來たと云ふ人物であれど、今日はナンだか初々しく畏つて見えるのも可笑しい。折節廣い神殿の事とて、寒氣に神威も加はる故か、身も戰慄して、僕は時々鼻汁が出かけたが、既に手水した手で穢いハンケチに觸れるのも如何と、ツン〳〵と奥へ吸ひ込んで耐へて居る。と、一の神官が白幣の附いた榊の枝を持つて出て僕等兩人の頭上で、パラ〳〵（パラリーッ）と左右合せて二度訂ち振る。愈々六根が清淨になつてしまつた。此の如くして嫁御寮の方、親戚の方、乃至式に與かる神官の人々の清めが濟むと、神を勸請するらしい祝詞が聞えて、而して數多の神饌を供へる。是は青山邊りの神葬の式と同じことだ。イヤどつこい縁起でもない。そこで一の神官が來て、僕等兩人を中央の間へと案内し、僕は聖殿を上に西面して座した。反對の方には一の女神官の案内で嫁御寮を上に細君も東面して座した。双方の距離は疊數で凡そ四間許り。是れ新夫新婦が正式上の初見參である而して僕も細君と威儀正しく向ひ合ふことゝなつたので、今更ながら我々も久しき夫婦であつたわいと、自覺を起したのも可笑い。蓋し細君に在つても同樣に感じたであらう。やゝあつて首座の神官は介添の神官と共に肅々として立ち出で、拍手拜跪、恭しく祝詞を讀み上げる。僕は最初太神官の神殿だから、矢張此神の御前に式を擧げるのと思つて居たに、祝詞の文で見ると伊弉諾伊弉冊の尊を勸請し奉り、其御前に式を擧げるので、天の浮橋の古る事を云ひ、それに倣つて妹脊の約を結ぶ上は、死生共に渝はらぬと云ふやうなことを、神々しき古言

の神におはしますから、婚禮の式には不相當である。畢竟御娘子の御殿へ御兩親方をお迎へ申して己等の誓ひを聽いて戴くと云ふ譯合なのだ。現し世であつては、斯かる御前に斯かる式を擧ぐるなどと云ふは、思ひも寄らぬことであるが、靈の界へ登らせ給ふ後は、所謂和光同塵、卑しき臣民の儀式にも毎日幾度となく光臨せさせ給ふかと思へば、有り難く勿體なく、座ろに感涙の飜るゝ次第である。殊に輓近の世にあつては往々夫婦の約を經視し、一離一合旦夕に行はれ、人も亦恬として怪まずと云ふ弊風があるが、此神前の儀式の如きは極めて神聖に、極めて嚴肅に、又極めて簡素質實にして、彼の奢侈繁褥動もすれば婬靡弛慢に流るゝ他の儀式とは、霄壤の差である。故に此日瞬間に於ける感激昂奮の精神は、長く一生涯に於ける兩性の結合上を支配し、許大の連鎖たるの効を待つに相違なく、右の弊風を矯正するに於ても、裨益少なからぬことゝ思ふ。而して媒妁たる僕等が責任に於ても轉た重大なる感がした。式に依ると是から僕は媒妁としての祝詞を讀み上げねばならぬのであるが、通常誰れも神官に代讀を賴むことゝなつて居ると聞いたので、其通り賴んだ。尤も豫てより此事を知つて居たら、窃かに專門家に就いて祝詞の讀み方を心得置き、こゝで一番神官共を驚かして遣つても好かつたなどと、一寸腹中に野心の動いたのも、神前に惶てしや。而して代讀だとは云へ、僕も役目上中央へ座を進めて、神座へ對し、神官の尻に附いて畏まつて居るので、祝詞畢つた境に、恭しく一拜して、元の座へ復した。時に下手の襖の陰よりサラ〳〵と音させて立ち出でたのは、白練の衣緋の袴に下げ髪と云ふ姿の少女二人で、一人は金色燦爛たる長柄の銚子、一人は同じ金色の加への銚子とを持つて居て、相並んで靜かに神前へ進み行き、一の神官に就き、八足

の机の上に供へられたる、瓶子の神酒を各々の銚子へ受け入れて、周旋は規の如く、折旋は矩の如く、座作進退毫も亂れず、元の襖の陰へ退き入つた。此有様を僕は我を忘れて見て居たが、如何にも神々しく又可憐なるの感に堪へ兼ね、忽ち芭蕉翁が句の、

御子良子の一もと床し梅の花

を記憶に喚び出し、口裏窃かに三復したことである。而して彼等の見えなくなつたので聊か本意なく思つて居る内に彼等が再び相並んで立ち出でた。今度は各々打鮑昆布鰯等の肴を載せた三方を捧げて居て、一人は聟殿の前へ、一人は嫁御寮の前へと進み、これを据ゑる。次に一人が三組の土器を載せた三方を捧げて出て、聟殿の前の肴の三方の側へ据ゑる。次に兩人が最前神酒を受け入れた長柄の銚子と加への銚子とを持ち出で、長柄の銚子の少女は、其銚子を右頭に執り持ちて、聟殿の前へと跪いた。愈々三々九度の式に入る處だ。然るに聟殿は勝手が知れぬから、モヂ〳〵して居ると、一の神官が後邊より出で來て、低聲に差圖して、上の土器を手に把らしめ、少女が酌する三注ぎの酒を受けて飲み乾させ、それを三方へ元の如く置かしめた。見て居る僕は是位の差圖なら自分にも出來たものを、且此差圖は自分の職務であつたらうに、失敗つたと思つたが、モウ跡の祭り。聟殿の飲んだ土器は三方と共に嫁御寮の方へ持ち行かれ、嫁御寮がそれを受けることゝなつたが、女の事とて一入介添を要するのである、處で細君は直ちに其手の持ち添へから、飲み方までも、自分で差圖をしゝ居る。尤も注意役の女神官が後邊に控へては居たが、細君はそれに任して居ぬ。こいつ僕の爲し能はざりし事を爲し、夫を凌駕する

ふ心得だとすれば、又うい奴め出かしたと譽めても好い譯だ。嫁御寮が飲み乾した土器は肴の三方の上へ殘され更に中の土器で嫁御寮は酌を受けて飲み乾し、其土器が三方と共に聟殿の方へ廻つて來る。聟殿はそれで酌を受けて飲み乾し、肴の三方の上へ殘し、更に下の土器で酌を受けて飲み乾し、それを三方と共に嫁御寮へ送る。嫁御寮は、其土器で酌を受けて飲み乾し、元の如く三方へ置く、是で三々九度の献酬は全く濟んだ。以上の献酬中細君はイツも自分で嫁御寮の介添をする。僕はイツも神官に打ち任かせて、ツンと濟まして見て居る。是は強ち負け咎みと云ふ譯でもないが、中途から態度を變ずるのも如何と思つて、斯く遣り通してしまつたのである。それから一の神官が差圖で、聟殿と嫁御寮と双方より席を起ち、僕と細君とも各々それに隨ひ、中央の正面へ進んで、新夫婦は前列に、古夫婦は後列に、神座に對して恭しく禮拜を遂げた。抑々此の如く惶き神前に於て、神酒を啜つて妹背の誓ひを立てた上は、若し他日心の渝はり此誓ひに違ふこともあらんには、熊野牛王のそれの如く神罰覿面、血を吐き即死してしまふは必然だと、僕等までも身に浸み渉つて畏く感じた。そこで妹背の約は全く結ばつたから、聟殿は嫁御寮を引き連れ、僕等もそれに隨つて、左方の控所へ暫時退いた。間もなく神官の差圖で再び神前へ他の親戚一同と共に着座することになつたが、今度は中央の中の間の左方へ婚家の親戚が新夫婦を下座にヅラリと並び、其右方へ烟家の親戚が同じやうに並ぶ。而して媒妁たる僕夫婦は、中央の下の間の正面へ遙かに神座に向つて座した。やがて例の二少女が、前よりやゝ略式の肴の折敷を一個宛銘々の前へ据ゑ渉し、土

器も添へられて居る。次に銚子を持ち出でて酌をする。先づ婚家の一列へ、それから姻家の一列へ、而して僕夫婦のは最終である。處が先刻よりの寒さで、僕は内實アルコールを待ちこがれて居たから、酌を受くるや否や直ちに飲みかけたが、細君が低聲に制するので、一座を見渉すと、まだ誰れも土器を手にして居ぬ。失敗つたと思ひて下へ置く。其時一の神官は徐ろに發聲して、一同お戴きなさいと云ふ。一同が土器を把て戴く。僕は既に手儘に戴いた土器の殘りを把て戴く。頗る面目ない。そこで神官が僕にさゝやいて、式も畢つてお祝し申すと、一同へ挨拶をせよと云ふから、其口寫しを云ふも如何と、今日の式も是で相濟みましてお目出度お祝し申しますと聊か修正を加へて立派に述べた。けれども此立派の口上は、以て三々九度の場の曠職や、手儘に神酒頂戴の無禮の百分一を償ひ得たものでないことは、僕固より承知して居る。以上で全く式が畢つたので、兩家の男女及僕等は神座へ一拜の上順次に神殿を退き、階を下り、奉齋會の一室へ立戻つて、始てホッと息して休憩した。一の神官は神饌の鰹節幾束を示して載せた三方を持ち來つて、それを手渡しする。兎角して一同の支度も出來たから、神官に挨拶してそこを立ち出で、一同仂車を連ねて更に某所の宴席へと赴いた。尙此夕床入の盃式は、僕と細君とで周旋して、首尾好く職務を果した始末に就ても、多少可笑しき節なきにはあらねど、事閨閤の談に渉るから略さう。其折醉餘衆に示した卽吟は左の如し。

松は千年雪霜かけて契るべし

田舍源氏

（一）

此頃虛子君と出會つた時、話しが「田舍源氏」の事に及び、僕は少年の頃から愛讀の書であるから、少々記憶を告ぐる所があつたが、本誌上今後僕にも何か談話を物せねばならぬことゝなつたので、先づ右を敷演して、卽ち古るめかしい草双紙談を爲すこと左の如し。

修紫田舍源氏、柳亭種彦作、歌川國貞畫、仙鶴堂梓、と銘打て初篇を發兌したのは、卽ち文政十二年の正月、彼の家齊將軍在職の時で、天下を擧つて驕奢を極めた眞ッ最中、美麗の草双紙も數多ある中に作者も畫工も當時の花方、極彩色の錦畫表紙、殊に内部の人物等は窃に幕府大奥の狀況を實寫したと云ふのであるから、賣れたことは非常なもので、上は德川家より、三百藩の奥向、乃至士農工商の家庭まで、苟も婦女子として田舍源氏を知らぬ者は耻辱とした位である。されば此双紙の外、別に錦畫としても年々刷り出し、三枚續き、五枚續き或は未だ滿尾もせぬに、先きの先きまでを想定して、五十四枚の一組を畫くなどゝ、畫双紙屋の店先は此「田舍源氏」を以

て一大光彩を添へたのである。今日でも、色褪め、蟲喰ひ紙も汚損して居やうとは云へ、此双紙と錦畫は古本屋を始め其他の人家にも往々持つて居る。又光氏紫の話しをする婆樣達もまだ存して居ることであらうと思ふ。

且此草紙は申すまでもなく「源氏物語」が土臺で、それへ足利や山名細川などと云ふ時代芝居的の筋をからみ、又衣裳道具立等は現時の德川風俗を描寫して、一種の夢幻的脚色中、古今相對し、雅俗互に映じ、或は諷刺の意味さへ寓せられて居たと云ふのだから、單に右に云つた婦女子の愛讀の外、學問ある立派な人々と雖も隨分一讀の價ありとして居たことである。既に僕の如きは此双紙を覽た御蔭で、「源氏物語」と云ふもの丶大筋をも心得、後に源氏物語を讀むに至つても、ドコカ一通度つた道を歩むやうな感じがして、雅言不案内の僕も存外其筋道が分り易かつたことである。又今日でも、僕は俳句の解釋などに、いぬきとあれば、「田舍源氏」の禿犬吉から見當を立てゝ、ソレは若紫の卷に出て居やう。惟光は惟吉、で光氏の忍び歩きの供人だから、ソレは夕顔の卷にあらう、などと説明して居る。又夕顔の卷の催馬樂「わいへん」の全文を人に問はれた時、「田舍源氏」三篇口繪の老女しのゝめの題詞となつて居るのを暗記して居たから、直きに答の間に合つたこともある。是れで見ても、種彦先生に負うたエセ學者は獨り僕ばかりでもなからうと思ふ。

處で、此「田舍源氏」と「源氏物語」との筋を一々對比して論じた日には際限もないことだから、ソレは止めて、先づ原書の和歌が俳句として譯せられて居る例を少々擧げて見やう。

撫子にふりかへりけり別れ道　花桐

更衣の死後帝より其母へ賜りたる、

宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

を

宮城野の小萩は如何に秋の風　義政

夕顔の卷、宿の女が光る君に奉りたる、

心あてにそれかとぞ見る白露の光りさへぬる夕顔の花

を

きみの光りを月かと思ひ浮かれ出でたる鴉瓜　たそかれ

たそかれは卑しき唄ひ女なれば、特に投節の唱歌に物したので、尤も此双紙では夕顔が鴉瓜に換へてあるのだ。

又光る君の返事、

よりてこそそれかとも見め黄昏にほのゝ見ゆる花の夕顔

を

よりてこそそれかとも見め鴉瓜　氏光

若紫の巻、光る君が紫の上へ、

を　根は見ねど哀れとぞ思ふ武藏野の露われわぶる草のゆかりを

武藏野に咲けばゆかりか草藤も　光氏

其返事、

を　かこつべき故を知らねば覺束ないかなる草のゆかりなるらん

ゆかりとは何のゆかりぞ菫花　ひらさき

末摘花の巻、光る君が末摘の姫宮へ近づきて、

を　いくそたび君がしゝまに負けぬらん物ないひそといはぬたのみに

螺々ののしゝまに負けて秋の蟬　光氏

侍從が姫宮に代りて、

鐘つきてとぢめんことはさすがにて答へまうきぞかつはあやなき

右の侍從を此双紙では、名をあやなきと呼ばして居るが、ソレは原歌の尻の言葉を取つたので、一寸をかしい。

又光る君の、

を　なつかしき色ともなしに何にこの末摘花を袖にふれけん

手に摘みて思へば悔やし紅の花　光氏

紅葉の賀の巻、宴終りて光る君が藤壺へ、

物思ふに立舞ふべくもあらぬ身の袖打ふりし心知りきや

を　心知るや袖打ふりし村時雨　光氏

返事、

から人の袖ふることは遠けれどたちゐにつけて哀れとぞ見し

を　袖ふると見るや紅葉の唐錦　藤の方

花の宴の巻、朧月夜の女が光る君へ、

うき身世にやがて消えなば尋ねてゞ草の原をば問はじとや思ふ

を

はづかしや弓張月の水の影　かつらき

返事、

いづれぞと露の宿りを分かぬ間に小笹が原に風もこそ吹け

を

世に知らぬ心地こそすれ水の月　光氏

ニンナ風に殆ど直譯のもあれば、又大分離れて作つたのもある。ドウセ梅室蒼虬時代と云ふのだから、月並流は免れぬが、原歌あるものに對して此位にコヂ付けて、行かるゝ處を見れば、種彦も多少句作の心得があつたらしい。

此双紙は年々發兌されて、天保十二年には三十八篇に達し「源氏物語」の藤ばかまの卷までを譯し終つた頃、既に退隱であつた大御所様の家齊公は薨去せられ、水野越前守が家慶將軍を輔けて非常果斷なる改革をすることになつたので、其餘響は芝居小説の類までに及び、役者は河原者とせられて編笠を着ねば外出が出來ぬと云ふ位だから、草双紙などゝ勸善懲惡を十分に表はしたものゝ外は發行を許されず、淫猥の嫌ひある分はドシ〳〵絶板を

[illegible]

罰にも逢ふ處であつたが、此人は素と德川の御家人とかで、幸と其筋に保護する向もあつて、辛うじて無難に濟んだ。けれども之が爲め種彦は非常に恐怖し、其後は一切著作の筆を執らなかつたとのことである。

因に云ふが、月並俳家の多くが今日の如く道德主義を最上の標準とするやうになり行いたのも、一には此大改革に對する方便であつたかも知れぬ。既に五代川柳が其際定めた川柳點の標準中に道德を第一に掲げて居るのを見ても推量される。

それから、此當時には草双紙の表紙畫などゝ彩色を禁ぜられて、既往出版のものでも再び刷行する時は多く無地の表紙を用ひた。ソレから少し法律を潛つて居るのは、畫樣彫刻等は舊の如く緻密にして、唯色だけを薄鼻と墨とであやどつて居る。「釋迦八相倭文庫」の初篇などはそれだ。故に今日存在の古草双紙中に內部は精巧でも表紙が麤末なとか、緻密の表紙畫だのに彩色がないとか云ふのを見られた諸君は、是れぞ天保末年大改革の紀念物だと承知せられたい。

然るに此改革も暫時にして水野侯の免黜と共に有名無實となり、押へても押へ切れぬ太平奢侈の風潮は再反動的に盛り返したから、草双紙も又ソロ〳〵と舊態に復して、色畫表紙を店頭に輝かすことゝなつたので、筆て婦女子には滂泣號哭して惜まれ居た「田舍源氏」の生命は何條是がぎりに終はらうぞ、さなきだに利に拔目なき書肆は此機に乘じて續行を企てたのが卽ち「其ゆかり鄙の俤」、一筆舛作、歌川豐國畫、仙鶴堂梓、である。(絶板を距ること

五年目）然るに此双紙の成り行きに就き頗る紛糾した事柄が生じて、恰も南北朝兩立と云ふ姿になつたのが一寸面白い。

（二）

が、其南北朝兩立談の前に先づ此双紙の復活は如何なる狀況を以て復活したかを告ぐるの必要がある。流石に官邊を憚つて書名は改めたけれども、「修紫田舍源氏」に對して「其由縁鄙の俤」、全く續篇と云ふ謎である。のみならず、發端に於て、或る老女が娘子供を集めて教訓の爲めの夢物語をすると云ふのは好いが、其實例として玉葛の卷の髭黑の大將即ち「田舍源氏」の一色廣門が妻の嫉妬を說き出した處などは隨分シラバクレて居る。又人名も光氏を輝元、紫を此糸、玉葛を濱葛、光仲を氏仲と改めた外は皆「田舍源氏」の舊名を用ひたやうだ。要するに双紙の體裁と云ひ、畫樣と云ひ、就中其筋が筋だから、誰れでも一見して「田舍源氏」の復活と云ふことは分かる。殊に畫工の豐國は即ち「田舍源氏」の時の國貞で、近年師名を繼いだ矢先だから、一層彼の曲線多き豐艶の筆を揮つて居る。當時の婦女子の喜びや察知すべし。

併し此「鄙の俤」の作の內容となると、一筆弇は種彥に對して恰も貂尾の代りの狗尾である。元來此人は溪齋英泉と稱して畫工が本業であるが又著作もする。畫では立派な當時の名題だけれども、著作ではまだ二段目だ。即ち短篇の讀切物位が技倆相當で、長物語となつては荷が重も過ぎる。ソレに此「鄙の俤」發兌の弘化四年には當時人氣落潮で有名なる此人の身生で、其結果は技倆も技倆だが一層麤末になる。サレば此「鄙の俤」の作たるや、單に「源氏物語」の筋を草双紙式に和らげたと云ふのみで、夫れ以上の脚色がない。是れでは原書を讀む柔には却て好いかも知れぬが、種彥が意匠の紹述者としては先業を失墜したものと云はねばならぬ、僕が貂尾の代りの狗尾だと云つたのは主として此點である。

處で、此「鄙の俤」になつてからの原書和歌の譯を少々披露すると、槇柱の卷、髭黑の大將が玉葛の許へ、

心さへ空に亂れし雪もよにひとり冴えつるかたしきの袖

を

冴ゆる夜や雪亂れけり獨寢に　廣門

大將の姫君が住み慣れし館を立ち出づる時、

今はとて宿かれぬともなれきつる槇の柱よ我を忘るな

を

別るとも我な忘れそ槇柱　まきゝぬ

光る源氏が玉葛へ

かきたれて長閑けき程の春雨にふるさと人をいかに忍ぶや

を

かきたれて人を忍ぶや春の雨　輝元

返事、

を

眺めつる軒の雫に袖濡れてうたかた人に忍ばざらめや

軒の雫に袖は濡れけり　濱葛

藤の裏葉の巻、内大臣が夕霧の宰相を婿にせんとて、

我が宿の藤の色濃きたそかれに尋ねやは來ぬ春の名殘を

を

わいへんは松に色濃き藤の色　高直

返事、

中くに折りや惑はん藤の花たそかれ時のたどくしくば

を

水にうつろふ夕はえの月　氏仲

と云ふ風である。「所ゆる夜」の句のやけり「別るとも」の句の無季は當時の俳句として頗る亂妨、其他の句も原歌

なとは、譯さないで原歌が其儘出してあるが、是れも著作を麁末にした一例で、譯し惡い原歌になるとエー面倒

なと打遣つて斯かる事にも到つたのであらう。兎角「田舍源氏」の復活も一筆弇では甚だ物足らぬ感があつたが、

此人は放埒の末江戸に居たゝまれぬ事情が出て身を匿し、間もなく死去したので、遂に五篇以外後の作は別人の

手に渉ることゝなつた。尤も五篇六篇も一筆弇稿として其序文も掲げてあるが、是れは書肆が讀者を繫ぐ方便な

ので、一筆弇は嘉永元年七月に黄泉に往つて居るから、嘉永二年三年と明記してある五篇六篇の序文は慥かに幽

靈の筆である。幽靈の筆は筆だが、此境から脚色が忽然面目を改めて殆ど種彦の昔に立ち戻つたのはモツケの幸

である。サラば此手柄ある幽靈殿の正體は誰れかと尋ぬるに、僕は五篇を笠亭仙果作、六篇を柳下亭種員作と推

定する。共に種彦門の高弟であつて、當時世間に花方と呼ばれて居る作者連だ。

此推定の理由は追々と知れて來るが、一體德川幕府の頃は今日の如く出版條例だとか著作版權の特許だとか云ふ

ものがないから、利益の競爭上自然に模倣的の事も往々あつたので、例へば、一方に種員の「白縫物語」が流行る

と、他方に春水の「時代加賀見」が出る、一方に美圖垣の「兒雷也」が賣れると、他方に小三馬の「龍王太郎」が現は

れる、尤も此類はまだしも脚色を似せたと云ふに止まり、又馬琴作の「八犬傳」や「弓張月」などを、二個の書肆が

二種の草双紙として發行したのも先づ〳〵許されるが、茲に最甚しい出來事は、此「鄙の俤」の續きを二個の書

肆で各々作者を雇て著作し發兌したことである。是れが前に云つた南北朝兩立談で、事柄が餘りに紛糾して居る

故先づ系圖の樣式を以て其大略を示さう。

（三）

修紫田舍源氏初篇至卅八篇　種彦作　仙鶴堂梓

其由緣鄙の面影初篇至四篇　一筆斎作　仙鶴堂梓

五篇　仙果作（想定）　仙鶴堂錦林堂合梓

六篇　作者（未詳）　仙鶴堂梓　七篇至十一篇　種員作　錦昇堂梓

足利絹手染の紫六篇至十六篇　仙果作　錦林堂（改）錦橋堂梓

十二篇至廿三篇　仙果（改）種彦（又改）二世種彦作　錦昇堂梓

十七篇至廿篇　金水作　錦橋堂梓

薄紫宇治の曙初篇至［　篇　種員作　榮久堂梓

又年表を以て示せば、

	鄙の面影	手染の紫	宇治の曙
弘化四未	（初）（二）		
嘉永元申	（三）（四）		
同　二酉	（五）		
同　三戌	（六）	（六）（七）	（初）（二）
同　四亥		（八）（九）	（三）（四）（五）
同　五子	（七）（八）	（十）（十一）	
同　六丑	（九）（十）（十一）	（十二）（十三）（十四）	（六）（七）
安政元寅		（十五）	（八）？
同　二卯	（十二）（十三）	（十六）（十七）	
同　三辰		（十八）	
同　四巳		（十九）（廿）	
同　五午			
同　六未	（十四）（十五）		
萬延元申	（十六）（十七）		
文久元酉	（十八）（十九）		
同　二戌	（廿）		
同　三亥			
元治元子	（廿一）（廿二）（廿三）		

「田舍源氏」は勿論、其他三書共書工は豐國、後「手染の紫」は十篇より、「鄙の面影」は八篇下より、二世國貞、表紙及口繪のみ豐國、又「鄙の面影」の廿二篇廿三篇は芳虎なり。

右の如く此雙紙は六篇に至つて二派に分れ、一方は「鄙の面影」の舊名を繼ぎ、他の一方は新名を立てゝ「足利絹手染の紫」と呼んだ。而かも直ちに六篇とした處は、今の新聞や雜誌にこそ珍くなけれ、當時に於ては絶無の例である。ソコで個樣の事件が何故に生じたかと云ふに、察する處、「田舍源氏」以來の梓元たる仙鶴堂も「鄙の面影」となつて後は資力上が思はしくなかつたかして、五篇を出すに當つては錦松堂と連合することになつた。此時が卽ち一筆斎が死して其名の下に別の有力作者を雇つた場合で（嘉永二年）、此篇は脚色も一新して都合好く發行されたが、矢張書肆の折合が付かなかつたと見え、錦松堂は遂に「鄙の面影」の書名と共に仙鶴堂を見放し、己れは其實を占め、右有力作者を携へて別に前業を繼續することゝした。是れが「手染の紫」の起つた所以である。而して此「手染の紫」六篇と「鄙の面影」五篇との內容を覗ふに、筋と云ひ文章と云ひ、同一手に出たことは最明瞭で、六篇の作が仙果である上は、五篇の作も仙果であらねばならぬ。又遙か先きの若菜下の卷に於ける柏木と女三の宮との情事の伏線として、玆に奇怪の猫の前身なるお三の方親子を描き出したる處などに、用意周到、決して其時々の間に合ひ綴りをするナマケ作者の所爲で無い。是れ旁々以て五篇の作者が仙果でなければならぬ所以である。要するに「田舍源氏」復活の實績は右五篇に始まり、六篇よりは「手染の紫」に移り、而して後成就されたものと云つて好い。

之に反して哀れなる仙鶴堂は「田舍源氏」以來の正統であつて、且「鄙の面影」の名は持ては居れど、資力に乏しく、剩へ有力作者を他に奪はれた爲め、沮喪逡巡、辛く其六篇を出したは出したものゝ、作者其人を得ぬのみか、同じ筋を「手染の紫」に先づ述作されて居る爲め、作意が一層窘窮拙劣、文章も疎笨を極め、且本文以外に赤本や黄表紙めいた言葉書を添へた一事は、人を馬鹿にするも甚しい。此六篇も五篇と同樣名を一筆舛に托して居るので作者の實名は分からぬが、ナンでも、時候後れの老作者などの手に出來たらしい。尤も前回に於て僕が此六篇を種員作だと云つたのは全く推定違ひで、ソレは久しき前に讀んだ記憶の疎漏と、七篇以後が種員であると、「手染の紫」系の五六兩篇が同一仙果である例より推して、ツヒ〳〵速斷したのであつた。今度注意して讀んで見ると此六篇の作者は狗尾も狗尾も最下等の狗尾であつた。

個樣に諸事が不結果であつた爲めか、仙鶴堂は遂に此六篇を限りに發行を止めた。一方では「手染の紫」が紺屋の翌々日とも云はず續々次篇を發兌するに反し、「鄙の面影」は面影さへも見せ得ぬことになつたのは、「田舍源氏」正統の書肆として一層氣毒に堪へぬ。

然るに越えて二年の後(嘉永五年)、「手染の紫」では十篇十一篇を出して居る際、仙鶴堂の跡を襲つて「鄙の面影」の七篇八篇を發兌したのは當時資力に富める錦昇堂である。ソコデ先づ仙果と同門同立者の種員を聘用し、畫樣や製本にも頗る念を入れて、盛んに錦林堂に向つて競爭を企てた。是コに於て南北愈々兩立、櫻桃互に妍を誇ると云ふ有樣になつたので、世間の婦女子は蝶の如く虻の如く、彼を吸はんか、此にとまらんか、惱殺惑殺、遂に美が同樣であつたからで、其内容となると、如何に技倆ある種員だとは云へ、同一原書に「源氏物語」中其草雙紙的脚色となるべき廉々は既に慧眼の仙果に先取りされて居て、己れはイツも其餘屑を拾ふのであるから、實に割りの惡い役目で、旦難事だ。ソレを強て彼れに頡頏せんと欲せば、勢ひ別途の脚色を取り來らざるを得ず、隨て原書の筋に離るゝ事件の多くなるも餘儀なき結果だ。乃ち餘儀なき結果だとは云へ、此點は慥に「鄙の面影」の「手染の紫」に一籌を輸した事實である。就中女三の宮に比したる三世姫を以て内實は男子だとした如きは新を求めて僻に落る。是で後段柏之助との情事は如何に收束する考へであつたか、到底不自然を免れぬのは知れて居る處が、種員は十一篇を著作した限り死去したので、其後任は意外も意外、今まで敵方の作者であつた仙果が忽ち轉じ來つて受け繼いだ。蓋し此年(安政二年)錦林堂は錦橋堂と改稱したが、何か作者の待遇上に變更でもあつて、仙果が不平で居る處を、恰も好しと資力に富める錦昇堂の引力で吸ひ取つたものらしい。然るに仙果で見ると同じ筋の述作を再度遣らされる譯だから、難事は益々難事で、更に種員の比でない。ソレを知て自ら擔當した仙果は隨分大膽である。サレば先づ手始に右に云つた三世姫を再び女子に引直し、其他前作者が原書以外に馳せた事件をば、成るべく早く取り約めてしまつた手際は、果して見るべきものであるが、何を云つても強弩の末力、「鄙の面影」の内容は此仙果を得た後も遂に大に振はずに畢つたことである。

サラば仙果を失つた「手染の紫」の方はドウしたかと云ふに、其跡釜は松亭金水を据えた。此人は元來爲永春水の

門人で、人情本こそ手慣れたれ、草雙紙と來ては勝手が違ふ。尤も折りに試みては居れど、立者仙果の代りに當るなどゝは全く以て僭上だ。殊に此著作には氣の乗らぬ樣も見えて、若菜下の卷の末柏木の卷の始丈は、仙果の遺意を辿つてドウかカウか綴れて居れど、其後は最早支離滅裂、時々前後に關係もない人物や事件を持ち出す處などは、イツソ一筆弃か原書以上の脚色を出さなかつた昔が戀しく思はれる。唯一ッ彼れが一筆弃に贏ち得た處は、原歌の譯で、柏木が「今はとて燃えむ煙も結ぶれ」の原歌を丸出しとした外は、概ね打遣らずに俳句として譯出した點である。

就ては例に依て右等の俳句を示さうか、種員のは比例的少くない。是れは不得手な爲めだかも知れぬ、主として原書以外の場所が多いからであらう。仙果に至つては一人で同じ原歌を再度の譯出は如何にも御苦勞千萬。而して「鄙の面影」五篇は遡つて槇柱や藤の裏葉の殘りの筋を綴て居るが、其俳句を見ても六篇(手染の紫)以後の句作と同技倆で、仙果でなければならぬ證據がある。

槇柱の卷、螢の兵部卿が髭黑を夫となしたる玉葛へ、

深山木にはね打かはし居る鳥のまたなく妬き春にもある哉

(鄙)(仙)髭野老(トコロ)にがみのうちの味さ哉　政尚

又光る源氏が髭黑を揶揄せん爲め玉葛へ、

雨夜の品さだめしの見えぬ幾しかなる人か手に握るらん

藤の裏葉の卷、六條院行幸の時、光る源氏の、

色まさる籬の菊も折からに袖打かけて秋を戀ふらん

(鄙)(仙)折る菊も昔にまさる色香哉　輝基

太政大臣の、

紫の雲にまがへる菊の花濁りなき世の星かとぞ見る

(鄙)(仙)園の菊濁りなき世の星の數　高直

朱雀院の、

秋を經て時雨ふりぬる里人もかゝる紅葉の折をこそ見ね

(鄙)(仙)山びこも聞かぬ紅葉の時雨哉　義尚

帝の、

よのつねの紅葉とや見る古へのためしに引ける庭の錦を

(鄙)(仙)庭紅葉たゞの錦に候はず　義種

若菜上の卷、玉葛が光る源氏に子の日の祝ひを奉りて

若葉さす野邊の小松を引つれてもとの岩根を祈るけふ哉

(手)(仙)千代の春小松引つれ祈る哉　濱葛
(鄙)(員)引つれて岩根に結ぶ小松哉　玉葛

光る源氏が返事、

小松原末の齢に引かれてや野邊の若菜も年をつむべき

(手)(仙)小松にや引かれて摘まん野の若菜　氏充
(鄙)(員)年やつめ我が高砂の小松原　輝基

同じ巻朱雀院より女三の宮を賴み思召すとて紫の上へ、

そむきにし此世に殘る心こそ入る山道のほだしなりけれ

(手)(仙)糸遊に猶繋がるゝ心哉　義尚

返事、

そむく世のうしろめたくばさり難きほだしを強てかけな離れそ

(手)(仙)糸遊に繋がるゝこそ心なれ　村さき

同じ巻明石の尼君が女御の御前を去るまじとて、

老の波かひある浦に立出てゝしほたるゝあまを誰れか咎めん

(手)(仙)しほたれてあまもかひあり浦の春　眞紫

女御の、

しほたるゝあまを浪路のしるべにて尋ねも見ばや濱の苫屋を

(手)(仙)しほたるゝあましるべせよ浦の春　明石姫
(鄙)(員)住吉の松はいつこぞ遠干潟　明石姫

明石の上が父入道を思ひて、

世を捨てゝ明石の浦に住む人も心の闇ははるけしもせじ

(鄙)(員)元舟の帆も朝霧や遠干潟　朝霧

又入道より文の末に、

光出ん曉近くなりにけり今ぞ見しよの夢語りする

(手)(仙)春の夜の夢かひあり「て高」「枕」　宗入

同じ巻、右衛門督が女三の宮を戀ひて小侍へ、

よそに見て折らぬ歎きはしけれども名殘戀ひしき花の夕陰

(手)(仙)よそに見て折らぬ歎きや夕櫻　柏之助
(鄙)(仙)みずもあらぬ花懐しや夕霞　柏之助

返事、

今更に色にな出でそ山櫻及ばぬ枝に心かけきと

(手)(仙)色に出づな及ばぬ枝ぞ山櫻　越路

(鄙)(仙)許されぬ物にして置け庭櫻　小榻

若菜下の巻、右衛門督女三の宮に逢ひし朝、

おきて行く空もしられぬあけくれにいづくの露のかゝる袖かも

(手)(仙)冷汗のあと猶濡れつ露の袖　柏之助

女三の宮の

あけくれの空にうき身は消えなゝん夢なりけりと見てもやむべく

(手)(仙)この儘に消えよ夏野の草の露　三會姫

右衛門が北の方を踈みて、

もろかつら落葉を何に拾ひけんなはむつまじき簪なれども

(鄙)(仙)落葉をば何に拾ひて簪草　柏之助

同じ巻、紫の上が病後に、

消えとまるほどやは經べきたまさかに蓮の露のかゝるばかりを

(手)(仙)消えとまるほどやは經べきたまさかに蓮の露　村さき

(鄙)(仙)消えとまるほどやは經べきたまさかに蓮の露　紫

光る源氏の、

契り置かん此世ならでも蓮葉の玉ゐの露の心隔つな

(手)(仙)契り置く心は一つ蓮の露　氏充

(鄙)(仙)いつを限り消えては結ぶ蓮の露　輝基

柏木の巻、右衛門督より女三の宮へ、

今はとて燃えん煙も結ほれ絶えぬ思ひの猶や殘らん

(鄙)(仙)見よや君煙とならば霞とも　柏之助

返事、

立添ひて消えやしなましうき事に思ひ亂るゝ煙競べを

(手)(金)立添ひて煙競べん淺間山　三會姫

(鄙)(仙)立添ひて消えたき空の霞哉　三世姫

右衛門督が再び女三の宮へ、

行衛なき空の煙となりぬとも思ふあたりは立ちも離れじ

(手)(金)ひもすがら煙離れず挿柳　柏之助

（鄙）（仙）思ふあたり立ち離るべき霞かは　柏之助

同じ卷、夕霧の大將が柏木の北の方を訪ひ來て其母宮へ、

時しあればかはらぬ色に匂ひけり片枝枯れにし宿の櫻も

（手）（金）あるじなき宿にも花やもとの花　氏仲

返事、

此春はは柳の芽にぞ玉はぬく咲き散る花の行衛知らねば

（手）（全）散る花の行衛知らずもなりに鬼　母刀自

横笛の卷、光る源氏が薫るの君を見給ひて、

うきふしも忘れずながら呉竹のこは捨てがたき物にぞありける

（手）（金）呉竹の子は捨てがたき浮世哉　氏充

同じ卷、右衛門督が夕霧の大將の夢に現はれて、

笛竹に吹きよる風のごとならば末の世長き音に傳へなん

（手）（金）笛竹や末の世長く傳へてし　柏之助

但「手染の紫」では輝基（最初輝元）を氏充此糸を村さきとして居る、「鄙の面影」ではイツの間にか紫に復し濱萬も玉萬に復して居る。

も訴へて、書中の山名細川北畠大内等の修羅場をば實際眼前に演出することゝなつたので、自然に人心もモー繪雙紙でもあるまいとの考へも起り、加ふるに重もなる得意先の幕府は改革、三百藩の奥向や家中の婦女達も段々藩地へ引取ると云ふ騒ぎ、ソレで遂に前圖に示した篇數限りで、兩書の發兌を見なくなつた、而して原書では夕霧の卷が譯述されつゝあつた處で、「手染の紫」の方は「鄙の面影」より早く止めたにも拘はらず、其筋は先きへ進んで居た。

扨又此以前嘉永三年に方り、別に榮久堂と云ふ書肆が「薄紫宇治の曙」と稱する雙紙を出した。是れは「源氏物語」の宇治の十帖を先づ引き上げ譯述しかけたので、作者は種員である。察するに、仙鶴堂と錦林堂との分裂で、出版は遲延する、滿都の婦女子は待ちに待つて氣を揉んで居る場合だから、機乘ずべしとコンな抜け駈けをしたものらしい。而して種員は間もなく又錦昇堂の方で「鄙の面影」をも引受けたから遂に一身同時に「源氏物語」の二個を譯述せねばならぬことになつたのも一寸奇事だ。其後種員の死去と共に此「宇治の曙」は廢絶してしまつた。

（四）

就いては「此宇治の曙」の内容等をも多少話すべき順序であるが、既に久しき前に見たので失念の事も多く、今度再閲したいと思ひ、尤も手元に書物が無いから、所々心當りを尋ねたれど生憎くと手に入らぬ。僕の記憶では其篇數は八篇限りだと思ふが、或る人は十篇を見たとも云つて居る。兎角作者種員が死去したのは嘉永六年で、其

年此双紙の六七両篇を出したことは、他の双紙に於ける榮久堂の廣告で分つて居る。して見れば既に八篇さへも種員の遺稿か若くは別人の補綴かゞ疑はしい位、況して九篇十篇がありとすれば、是れは最早種員作でなく、得知れぬデモ作者の續尾であらうと思はれる。而して此「宇治の曙」も此の如く中途廢刊したので、原書の宇治十帖は未だ半分も譯されて居ぬのである。

扨十帖中宇治の優婆塞の宮と云ふのは、名さへも敵役めき、且原書の筋でも光る源氏と御中らひ快からずとあるのだから、草双紙では打て付けの謀叛人である。因て此「宇治の曙」に於ては匂ふ宮と薫るの大將とに擬したる某々が其嫁達への戀路を桀りに宇治へ入込み、遂に謀計を挫き、優婆塞某は自殺し、遺族は兩人で保護を加へ、義理と情けの二道を立つると云ふ趣に出來て居たやうだ。又浮舟の入水一件は、原書でも思ひ切つた悲劇的脚色だから、若し種員に年齢を假して此段をも綴らせたなら、如何に得意の手腕を揮つて悲絶慘絶に物し、滿都の婦女を して紅涙を絞らしめたことであらうに、才子短命、遺憾千萬。

扨右に云つた如く「宇治の曙」は書物が手に入らぬので例の和歌譯俳句を擧示することも出來ぬが、種員の俳句は既に「鄙の面影」の方に見えて居て、此人の句風丈は略ぼ分かる。そこで以下聊か「田舍源氏」以下の作者五人が俳句に於ける技倆を批評することゝせう。尤も時が文政乃至元治年間で、滿天下梅室蒼虬輩を仰ぐ俳壇の泰斗として居る折柄だから、戯作者共に左程特色があらう筈もなく、申さばドン栗の背競べではあるか、又一寸の蟲も五分の魂で、多少の異同を示して居るのも面白い。

先づ種彦は如何と云ふに、流石親玉丈に手腕は老練して居る。即ち老練しては居るが、ソレが月並的に老練して居るから困まる。僕が最前擧示した此人の句はマダ幾分か膏の抜けたものを擇んだが、其他になると實に臭氣紛々である。尤も最前の中でも、

光氏が紫を引き取り養ひて、

武藏野に咲けばゆかりか草藤も。

又くれなゐ姫を訪ひし後、

手に摘みて思へば悔やし紅の花

又かつらぎに密會して、

世に知らぬ心地こそすれ水の月

隨分キゴリが浮いて居るではないか。斯く云つて來ると「田舍源氏」の標致までが下がるかも知れぬが、少々婆樣達に御免蒙らう、

次ぎは仙果であるが、此人も双紙の著作に機敏な丈、其れ丈師の箕裘をよく續いで月並化して居る。

柏之助が三會姫の待女へ、

よそに見て折らぬ歎きや夕櫻

返事

色にいづな及ばぬ枝ぞ山櫻

の如きはソレだ。併し時としては、

政尙が髯黑の一色が妻濱蔦にからかひて、

髯野老にがみのうちの味さ哉

義種が輝基の館の宴席にて

庭紅葉たゞの錦には候ず

ドコかに氣力がある。月並家では是れ丈放膽に言ひ放つことが少ない。又此人は頗る達作であつて、最後に同一和歌再度の譯でさへも臆面なく遣つゝけて居る處は兎に角多とすべきだ。

下には此人の他の二名とが同一和歌を譯したのを句合せと見做して批判すること、せう。

濱蔦(玉蔦)が召し具し輝基に祝ひ奉りて、

(手)千代の春小松引きつれて祝ふ哉(仙果)

(鄙)引きつれて岩根に結ぶ小松原(種員)

兩句共小松で小供をほのめかした手段は俗だが、祝ひの心なれば許すとして、前句の祝ふ哉は語尾の掉ひしたけ勝ち。

輝基が返し、

(鄙)年つめや我が高砂の小松原(種員)

前句のにやは例の厭味。後句の我がはよく品致を保持して勝ち。

明石姫が眞柴の尼の古る事物語るを聞きて、

(手)しほたるゝあましるべせよ浦の春(仙果)

(鄙)住吉の松は何處ぞ遠干潟(種員)

前句は句勢も亦しほたれた。後句は格調の一等高き處勝ち。

三會姫(三世姫)が柏之助へ返し、

(手)立ち添ひて煙競べん淺間山(金水)

(鄙)立ち添ひて消えたき空の煙哉(仙果)

後句の添ひて消えたきはナンだか油氣を帶びた煙で鼻が苦む。前句は山容崛然、煙も自ら氣高く見えて勝ち。

柏之助が再び姫へ、

(手)ひもすがら煙離れず挿し柳(金水)

(鄙)思ふあたり立ち離るべき霞かは(仙果)

鄙句は語調娓々、是れでも俳句にや、前句は疎笨ながらも姿態の慥かなる處勝ち。

斯う判定して來ると、双紙の述作上でこそ種員は仙果に一歩を譲り、又金水は其後任を辱しめたれ、句作上は之に反して二人ながら仙果を壓倒して、遙かに種彦の壘を摩して居ると云ふことが知れる。就中種員はよく格調上に意を用ひ、且情を景に寓して趣味を長せしむることの消息に達して居るやうだ。ソレは前掲三句の外にも、

朝霧の方が明石に在る父を思ひて、

元船の帆も朝霧や遠干潟

矢張品致を以て勝ると云ふ句である。前回に於て僕は種員が句數の少ないのを不得手な爲めかのやうに云つたがアレは全く失言、此人は五人中の錚々たる者と稱して好い。

ソレから金水も中々調を解して居る。殊に、

氏仲が柏之助の遺族を訪ひて、

あるじなき宿にも花やもとの花

其母が返し

散る花の行衛知らずもなりにけり

言葉のあやつりが一寸甘まい。要するに此兩人の作句は何れも、平凡の難こそあれ。差たる月並臭氣は見えぬ。月並全盛の世でマダ是れ丈に特色を持つたのは頗る賞揚すべきである。實は僕に於ても今までは氣付かなかつた点の発明をソレを發見したから、江湖諸君へ紹介して置くのである。

ソレから五作者中マダ一筆斧が殘つて居るが、此人の作句は全く素人で、月並か否かを論ずる處へも行つて居ぬやうだ。尤も和歌の方は多少心得があつたかとも思はれるが玆コで言ふ必要もない。

以上批判の結果は第一が種員、次ぎが金水、ソレから仙果種彦一筆斧と云ふ順序であらうか。或は種彦仙果と置き換へても好い。

（五）

「田舍源氏」と其續篇との話しも以上で略ぼ畢はつたが、一體「源氏物語」と云ふものが既に後世の草双紙的趣向に往々出來て居るやうだ。雨夜の品定めに於て夕顔の女や明石の上の事を暗に語る處、夕顔の卷が玉葛の卷の伏線となつて居る處などは申すに及ばず。河原の院の妖怪、葵祭の騒ぎより北の方が生靈の惱み、須磨の左遷、海神の荒らび、明石の入道が須彌山の夢、筑紫の大夫監が横暴、初瀬寺の邂逅、藤袴の露に兄弟と他人とアベコベの情趣、髭黒の戀に北の方が狂亂、柏木の女三の情事に猫の媒、契りし夜の夢にまで啼く聲がしたとは更に怪し冷泉院と薫の君と似寄たる生ひ立ち、笛竹に乾念を殘した亡靈、又滑稽なのは蓬生の姫宮の赤き鼻、源の内侍が年寄りの多情、それを藤の中將が太刀拔きて威どかしたる、空蟬の繼子某が源氏と知らずに忍び寄りたるなどは最々棒腹だ。其他宇治十帖の事は前回にも云つた通りで、此等の類は數へ切れぬ程ある。して見れは種彦が「田舍源氏」を物することになつたのも先づ此點に眼を着けたからではあるまいか。尤も「源氏物語」が草双紙的趣向に似たと云ふよりも、草双紙的趣向は「源氏物語」より來たのだと云ふが適當であらう。兎角古い物語を草双紙と

して譯述することは、此「田舍源氏」が開祖である。其後は段々と眞似をして「伊勢物語」「落窪物語」「竹取物語」など譯述されたが、作者や書中の委細は今一寸記臆して居ぬ。要するに「田舍源氏」の草双紙界に及ぼした影響は非常なもので、双紙の體裁萬端を「田舍源氏」めかしてそれで沽られんことを求むるものさへ出來た。甚しいのは誰れかの作「室町源氏胡蝶の卷」で、左も「田舍源氏」の續篇らしく名までゴマカシて居る。又仙果作の「根源實紫」と云ふは紫式部の一代記で、是れも慥に「田舍源氏」の緣故を利用して居るのだ。

田舍源氏餘論

（一）

扨是から少々一般の草双紙の來歷に就て話さうが、元來此草双紙は黃表紙と云ふものが進化したので、黃表紙には種類の違つたのもあるが、先づ草双紙系の黃表紙は其以前子供の玩びであつた赤本黑本のあどけなき土臺へ、金平本の淨瑠璃段物と古戰物語筋を加味して、それで一種の體裁を成したものかと思はれる。最初は五枚もの一冊、紙は漉き直し紙と限られて居たので、臭氣のある處よりクサ双紙の名が出たとさへ傳へられて居る。今でも臭さ屋の干物と云つて東京人の珍重する者だあるから、クサ双紙の臭氣も其頃の婦女幼童には却てなつかしかつたであらう。然るに田舍源氏等の如き草双紙となつてからは紙も上製本では小菊、下等本でも廣河内紙を用ひた。而して此頃は既に十枚づゝ一冊の所謂合卷となつて、上下二冊を袋に入れたものであるが、其五枚目毎に欄外へ（一）（二）（三）（四）と記して居るのは猶五枚一冊の形見である。

表紙畫も赤本の昔は墨一色の小さき張り付け畫であつたのが、黃表紙となつて稍々緻密なる彩色畫になり、又暫時袋入りと稱して錦畫袋へ入れることもあつたが、遂に袋の錦畫は表紙の全面に移り、袋畫はアッサリした着色で花鳥山水の如きものとなつた。「鄙の面影」の最初、表紙畫は豐國で、袋の方は一筆斎自ら花鳥器具等を描き、小さく英泉と署名して居る處などは一寸面白い。

草双紙の文章が七五調であるのも「田舍源氏」あたりが一定の式を殘したので、黃表紙以上は極めて疎笨幼稚なる散文體であつたのだ。尤も硬表紙の讀本の方では馬琴なども早くより七五調を用ひて居るが、草双紙では種彦以前に恐らく例がなからう。

金平本は淨瑠璃體だから無論七五調を持つて居た。一體芝居の側に傾いたものは七五調を利用するので、文政天保年間芝居全盛の影響は讀本草双紙界にも及び、馬琴の如き博士顏する男さへ「八犬傳」などにも往々芝居めく場面を出す位だから、其以下の草双紙に至ては「田舍源氏」を始め皆芝居的脚色を存して居るのは怪むに足らぬ。而して七五調の歡迎されたのも主として此芝居的脚色との關係から來たものであらう。

當時都會の婦女子は芝居と云へば殆ど狂亂的に騷ぎ立ち良人の前でも役者に關するノロケ噺は公然特許と云ふ次

第だから、彼等を顧客とする草双紙に何條芝居的傾向を持たずに居られう。筋も芝居、場面も芝居、言語文章も芝居化し、書中の人物も往々役者の似顔を借りて媚を沽ることになつた。

種彦作の「正本製」と云ふ草双紙は、名の如く淨瑠璃の正本に擬して幾樣の時代物世話物を書き綴り幕明き幕切りの有樣より舞臺の構成大小道具の位置までを文と畫で夫れ〳〵に現はし、人物の似顔は皆當時名代の菊五郎幸四郎三津五郎半四郎團十郎などを描かせたもので、一讀して身は堺町葺屋町の土間樓敷に在るの感がする、なんでも廿編位までも續いたやうだが、前後に類なき一種の作である。

右の如く讀本草双紙は芝居を利用したが、芝居の方でも亦讀本草双紙を利用し、當時評判で人氣のあるものは往々それを脚本として演することであつた。馬琴の「八犬傳」種員の「白縫物語」笑顔の「兒雷也」などは出る傍らから直き芝居になつた「田舍源氏」は當時如何であつたか聞かぬが、其夕顔の卷右寺の一段は今日でもよく中幕に演じて居る。

又種彦の「淺間ヶ嶽面影双紙」は今日でも中々芝居界に流行つて居る。尤も愛妾時鳥と云ふは腕力も武藝もある勇婦であるに、此頃の芝居では優さ方な弱々しい乙女とし殺し手も奥方撫子姫でなくて後室百合の方となつて居るのは僕甚だ意を得ぬ。アレでは哀れッぽい計りで、平凡な脚色に歸してしまつた。

此「面影双紙」は元と讀本であるが、別に「風俗淺間ヶ嶽」の名を以て草奴紙にも譯述されて居る。編者は誰れであつたか、忘れたが一向つまらぬ本だ。

凡て讀物の如かつた讀本は必ず後人が草双紙として譯したもので、馬琴の作は大小の差違數ある草双紙にもなつて居る。就中八犬傳は二種となつて、一は「假名讀八犬傳」と云つて春水の譯、一は「雪梅芳藹犬の双紙」と云つて仙果の譯だ。いづれも馬琴の論説や講義めいたクダ〳〵しい條を省いて居るのは頗る好いが、春水の一意原書の筋を守つて居るのに反し、仙果は最初少々改竄を加へた處がある。姓名も少々更へて居る。アンナ事はせずもがなだ。尤も毎篇仙果作と署して居るから其申譯かも知らぬが、個樣な著名な書に向つて其功を奪はんとするのは仙果の不所存で、且十目の視る所到底駄目だ。

少し話しの端が改まるが、黄表紙は勿論後の草双紙となつてからも篇數の續いた作は少なかつたので、大抵十枚づゝの二冊讀切り、それへ後篇として更に二冊を添へた位なもの、又一冊を十五枚づゝとして、三十枚二冊のもあつた。處が世の嗜好に連れて著作の內容が段々豐富となり、篇數も之に伴つて增加に傾きつゝある際、彼の「田舍源氏」が現れ出でゝ、五十四帖の原書を悉く譯し了はらうと云ふ意氣込みで、嘖々たる世の評判に乘じて年々續けざまに餘多の篇數を發兌した。是に於て篇數の多寡と双紙の價値とは必ず關係するものゝ如くなり、ソコでもコヽでも大作長物語を發行し、其篇數の多きを加ふるを以て作者と書肆との勢力名譽としたことである。此弊は遂に作意の散漫を致し、跡から跡からと人物や事件を追加して、首尾照應なく、筋の一貫せぬ作を出すに至つた。

のみならず、此弊は爾來長物語に滿尾を告げた双紙を見ぬことゝなつて、「釋迦八相倭文庫」「白縫物語」「兒雷也

豪傑物語」「時代加賀見」などは最も世の好評を得たものであるが、いづれにも尻がない。(「倭文庫」は滿尾して居ると云ふ人もあるが、果して草双紙式の十分なる滿尾であるや否、疑はし、)殊に斯く永續する時は最初の作者は死去して、微力の門人輩が跡を綴るやうなことにもなるから、遂に名許りのエセ双紙と化し畢るのである。

(二)

尙右「倭文庫」に付ても少々話しがある。此双紙は以前に「釋尊一代記」とか云ふやうな硬表紙の讀本が二種ばかりもあつて、それを敷演したものではあるが、更に多くの佛典を渉獵して材料を取つた處は驚くべき力である。尤も。作者萬亭應賀に實際此力があつたもの歟、或は別に道樂和尙などの黒頭巾があつた歟、其は兎も角も前後無類の一大奇書である。殊に天竺は熱帶地方で、人間が婬猥殘酷、且つ奇怪不思議を貴ぶ風習で、釋迦一代の事蹟も亦個裏の產物に外ならぬのであるから、若し其儘に譯述した時は本邦の人情殊に婦女子の讀み物として如何はしきふしもあるのだが、ソコを旨く脫化せしめて草双紙的脚色に入れた處は慥に作者の技倆である。就中提婆達多は一方の大敵役、それに附隨せる阿闍世太子の不孝暴虐、惡婆には南花女、後に悔悟して鬼子母善神、忠臣には迦毘羅城の儕陀夷と光明、名醫には王舍城の耆婆、勇士には右梵士、又憍曇彌の妬嫉は「源氏物語」での弘徽殿役、摩耶の薄福にして且書中主人公の母たる位地は恰も桐壺の更衣に同じ、須達月蓋兩長者の豪富、韋提希夫人の慈悲、槃特の痴鈍、優樓頻螺迦葉の惡にも强く善にも强き、其他十大弟子の性質境遇等、それ〳〵によく脫化されて草双紙舞臺の上に活動して居る。又右の如く人名地名は原書天竺の儘だが、畫樣に於ては家屋器具服裝も

方便だ。而して釋迦の如きは悉達太子時分を光氏とも云ふべき美視公子に描いて居るのは勿論既に成道出山後と雖も矢張撫でつけ髪の若やいた形に描き、彼の狩野畫などの痩せさらばうてサモ穢なげなる出山釋迦とは大違ひである。コヽが作者の別して考へた點で、一篇の大主人公たる釋迦牟尼佛はいつまでもみづ〳〵と色ッぽくなくては婦女子の同情を引かぬからである。されば迦毘羅城の入來に耶輸陀羅女が思はず駈けより衣の袖を引く一段も容貌が容貌だから甚だ調和が好い。是れが墨々たる禿頭の痩坊主では滑稽に落ちたであらう。右の如く萬事拔目なく出來た双紙であるから世上の評判も非常であつて、先づ「田舍源氏」に亞ぐ賣れ行きであつた。此影響から追々佛家の傳紀を草双紙に物することも段々と始まり、「硯の海四國の聞書」と云つて弘法の傳、「假名反古一休草紙」と云つて一休の傳、「高祖旭の衣」と云つて日蓮の傳も出た。而して日蓮傳は是れも應賀の作である。尙役の小角や西行法師の傳なども出たが書名を忘れた。

草双紙の特色あるものと云へば今一つ山東京山の著作を紹介せねばならぬ。此人は京傳の弟で、最初は時々の流行物も遣つて居たが、八十以上まで長生して絕えず著作した結果、一種灰汁拔けのして妙言ふべからざる一家の作風を成した。殊に晩年の作「敎草女房形氣」の如きは其醇の醇なるもので、自己創體の言文一致的文章を以て當時の武家町家に於ける表面裏面の事情を遺憾なく叙寫し、而かも其筋の變化あつて面白く、且草双紙式を離れて居らぬ處は何人にも眞似の出來ぬ無類老練の作である。書中所々敎訓めいた言もあれど、馬琴の講義的口調と違

ひ少しも耳に立たず、酸いも甘いも知り拔いた爺さんの孫子を集めて物語りするを聞くが如く、嘻々の笑ひ、藹々の情、何とも云へぬ興味がある。「田舍源氏」を始め其他の双紙は屢々讀めば饜きもすれど、此「女房形氣」ばかりは讀む程津々として味の增すやうな感がする。是れ一つは舊德川時代の人情風俗を僕がなつかしく思ふからでもあらうが、單にそれのみでない。慥に特色ある草双紙、否古今に誇るべき最良小説と云つて好い。

此「女房形氣」はおりつの傳、おかね及おかつの傳、おへみ及小糸の傳までが最好く出來て居る。其以後は作者衰耄の故歟少々だれ氣味である。京山死後他人の續篇も若干あつたやうだが無論觀るに足らぬ。

又此人の作に「曉月猫の草紙」と云ふがあつて、猫同士の交りや猫が人に對する心持等を人間風に叙寫し、畫樣は猫の顔に人の衣裳を着せ、且起ち居も人の如くさせて居て、一寸可笑い双紙である。因て思ふに近日大評判の歌石氏が「吾輩は猫である」の作も其種子は既に六十年の昔に蒔かれて居るので、賴朝の覇業は實に欽仰すべきだが賴政首倡の功も亦沒すべきでない。

支那小説で所謂四大奇書の「三國志」「西遊記」「水滸傳」はいづれも硬表紙の讀本に譯されて居るが、「金瓶梅」のみはそれが無いかと思ふ。書中往々婬猥に渉る條があるからでもあらう歟。尤も人物萬端を日本風に脫化し草双紙式とした譯本には「新編金瓶梅」と云ふがある。尙此樣式の譯本では「傾城水滸傳」の名を以て「水滸傳」「金毘羅舟利生の纜」の名を以て「西遊記」もある。而して「水滸傳」の男は變生して女となり、「西遊記」の猿は進化して天狗となつて居る。いづれも馬琴の飜譯で、「田舍源氏」以前に於ける長篇の草双紙だ。又「三國志」は黃表紙の初年に鳥居清長で五枚ゝ一册の續き物として居るのも見たが、極めて幼い本で、文章はホンの畫解きのみであるから未だ譯本とするに足らぬ。「遊仙窟」は「遊仙窟春雨草紙」と云ふ草双紙式の譯本がある。種彦の「七ッ組入子枕」も支那小説の短篇を集めて飜譯したものらしい。個樣の類は尙餘多あるであらう。

處で右「三國志」が畫解きのみをして居ると云ふことであるが、是はれ赤本以來因襲したる當時一般の黃表紙式であつて、「三國志」に限り斯くしたものでない。元々此頃の双紙は畫が主なので、筋書きはホンの副へ物、作者も讀者もそれ等の作意や文章には全く注意を拂はなかつたのである。其證據は卷中に畫工の署名はあつても作者の署名がない。是れ多く畫作兼ねて居たからでもあるが、去迚畫名を存して作名を略するは作は畫よりも輕視されて居た證據だ。畢竟此頃の顧客が兒童に止まつたからであらう。然るに爾後黃表紙の別系が專ら大人の通客運を顧客とし、諧謔諷刺を以て世事人情の鑿ちを競ふことになつては、作者も必ず署名して各々技倆に誇つた。三馬が「稗史年代記」に揭げた「金々先生」以下二十三種の如きは此系黃表紙の巨擘である。而して右作者署名の風は漸く畫双紙系にも移り、隨て作意や文章にも多少注意することになつたれど、其顧客は幼童のそれが聊か進んで大人の婦女となり、大人の婦女も今日の蝦茶式部達とは違ひ思想も狹く文字にも暗いのであるから、どこまでも畫を以て解に代へ趣味を補つて行かねばならぬ。矢張畫は第一作意文章は第二であり、此傾向は合卷草双紙となつても同樣で、作意や文章が好ければ好い程表紙畫口畫本文の畫も之に準じて益々美を盡くさねばならず、爲めに各書肆は人氣ある畫工を爭ひ雇つてそれを描かせたものである。而して婦女子の眼には豐腴艶麗にして曲線多き

歌川二代豐國の筆が最も適應し、「田舍源氏」の盛行に依つて一層聲價が加はり、遂に草双紙と云へば豐國、豐國と云へば草双紙と、殆ど兩々相離れざるもの丶如く成り行いた。就ては必ず重もなる双紙發行の最初は必ず全部を豐國に描かせ、や丶篇を重ねて地盤が堅まるに及んで、表紙畫と口畫は豐國、本文の畫は二代國貞と云ふやうにした。是れは豐國の繁忙なると其筆の高價なる爲めた書肆も專らに彼を使用し得なかつたのである。隨て微力な書肆や賣れ行き少なき双紙は最初より豐國々貞以外の畫工に托するの已むを得ぬものも多かつた。

然るに玆に一人二代豐國と對立して草双紙界に位地を有した畫工がある。それは歌川國芳で、此人は豐國と同じく初代豐國を師としたのだが、武者畫に於て自已の創意が成功し、此側では二代豐國よりも世にもて囃されて、遂に草双紙中の武者畫物は此一門の手に歸する傾向となつた。されど師の衣鉢たる役者畫や其他の風俗畫となると人氣は遙かに二代豐國に及ばず、此側の草双畫は彼れ一門に多分を占領されたのである。のみならず、二代豐國が天保年間より漸次師の畫風を變更した際、國芳も其役者畫と風俗畫に於ては暗に彼れに模擬した痕跡が見える不見識と云はゞ云へ、是れも世の生存上是非がない。兎角此國芳と豐國は歌川派の兩大關で、蕉門で云はゞ其角嵐雪の坐だ。

尙武者畫に付ては玉蘭齋貞秀と云ふがある。是れは二代豐國が五渡亭國貞と云つた時分の弟子だが、多少見識のあつた人で、師の畫風變更の際も敢て之に泥まず矢張五渡亭時分の風卽ち初代豐國風を守つて居て、コ丶は一方の大關國芳をして慙色あらしむる所だ。而して右は重に風俗畫の側の話しだが、尙武者畫の側になると、自已創

造の感覺は國芳に劣らず、漸次一家の風を成し、殊に甲冑武器類の歷史的考證は他の浮世畫々工の知らぬ所を知つて居る。此人の畫で最も評判を得たのは五代川柳が弘化二年に物した「英雄百人一首」で、勿論其編纂方が世の嗜好に投じた譯もあらうが、貞秀の名も是より一層揚り、爾後此種の本には槪ね此人が關係することゝなつた又「英雄三十六歌仙」「古今武勇歌仙」の如きは自已一手で編纂と畫とを兼ねて居る。以上三書は硬表紙の中形本だが、更に甲越軍記と云ふやうな名の草双紙にも此人の畫作がある、慥に武者畫界に於ける國芳一門の勁敵であつたのだ。

右「英雄百人一首」と云ふ本は從來有つた百將傳の如きもの(卽ち武將武士の肖像に略傳を附したもの)へ、更に各々の詠み歌を加へ、口畫の部にも種々な傳記を挿み、女の小倉百人一首に對する百人一首と云つたやうなものであるから、兒童は勿論大人にも非常に愛讀されて賣れ行きも盛んであつた爲め、版木は間もなく磨滅して再刻をさへ出すことゝなつた。そこで書肆も編者も大得意となり、此種の本を尙續けさまに發兌して、「續英雄百人一首」を始め、「列女「秀雅」「義烈」「畸人」「贈答」の各百人一首が世に出た。以上皆川柳編錦耕堂梓であるが、他の書肆(書肆名逸)も之に倣つて種員編「新編百人撰」金水編「武藝百人一首」を發兌した。又川柳編甘泉堂梓の「俳人百家撰」と云ふも此頃出たのだが、是れが後年子規居士の爲めに俳學の手ほどきとなつたことは居士自身の話しに聞いた。

右等の諸書に至つては書肆が一層觀客を引くの考へから、最初の「英雄百人一首」の如く貞秀一筆であるに滿足せ

す、一書中を五六畫工に分擔して描かしめたものが多い。其畫工は北齋萬老人、歌川豐國、國芳、國貞、貞秀、芳虎、國輝、溪齋英泉、柳川重信等である。

浮世畫で歌川派ほど全盛を極めたものは無いが、其同派中が何時も左右對立の人氣家を出す例となつて居るのも面白い。先づ元祖豐春の弟子では豐國と豐廣、豐國は似顔の役者畫を以て鳴り、豐廣は合卷の敵打物語等を以て廣く行はれた。豐廣が筆の緻密は感ずべきだが、人物の態度や位置の工合は豐國に如かぬ。豐廣の門に出た廣重は名所畫を以て名を揚げ、此側の技倆は豐國派に一人も似たものが無い。又豐國の弟子では二代豐國と國芳、此兩人の事は既に云つた通りで各々長所があるが、世の人氣の國芳よりも二代豐國が遙に勝つて、國芳も或る側では暗に同化せねばならぬ程に立ち到つた。然るに此國芳の門に出た芳年は明治の初年より外國畫の骨相を學び、一種の畫風を自得して維新社會に嘖々たる評判を博し、二代豐國系の國周が相傳の役者畫を以て僅に門戸を保つて居るのに較べて、其聲價は非常の懸隔となり、天保嘉永年間に於ける二代豐國と國芳とのそれどころでなかつた。輓近は國周門の周延と芳年門の年方とが又對立して居て、其技倆の差は其師同士ほどにこそなけれ、周延の年方に讓ることは爭はれぬ所だ。

序に云ふ、前條に二代豐國々々々々と云つたが、アレは世間の通言に倣つたので、其實は三代である。二代は暫時ながら繼いだ人があつて、是れは豐重とも云つた人だ。初代豐國張りで中々の筆力がある。何故此人を世代に數へぬのである歟、畏けれども日本書記に於ける大友皇子の閏位にふはすのと似て居て痛はしい。因て一番水戸

（三）

歌川派より以前に人氣を得た畫工は先つ喜多川歌麻呂であらう。是れは初代豐國と時を同くして而かもやゝ先輩である。黄表紙や繪畫でも多く賣れたが就中女の風俗畫が得意で、其婀娜たる丰神冶艶なる情趣は優かに豐國に勝つて居る。併し人物の身體骨格となると頗る釣合を失して且崩れたのが多い。例へば上半身は風靡く柳に似たるも下半身殊に膝の厚みなどは角力取も宜しくと云ふやうなのがある。此人の技倆意匠で此缺點あるは不審だ。マサカ今日の所謂衛生的とかを豫知した譯でもあるまいが、輓近外國人が此人の畫を賞玩して續々買ひ込んで居るのは事實である。呵々。

黄表紙の畫を澤山描いたのは北尾重政一門に若くものない。重政は筆力縱横自在且穩健で、何を寫しても一種の品致がある。隨て喜多川歌川等の如く色ッポイ趣には乏しい。山東庵京傳も畫では政演の名を以てこの人の弟子で其畫作の黄表紙も間々あるが、多くは京傳作重政畫である。而して重政の畫は署名のないのも少なからぬ。重政の門で流行つた人は蕙齋政美である。此人の黄表紙畫は頗る多いが就中武者畫が味まい。又一筆畫と云ふを工夫して一時喝采を博した。「百人一首」の如き百人の人物が草體文字見たやうな線で輪廓のみを描かれて居るのだが、ソレで人々の俤が十分表はれて居る處が妙だ。

「百人一首」と云へば勝川春章が畫の「百人一首」の如きは前後に類がない。其人物はイツもの人丸は反り身で仰向

ぎ、猿丸大夫は俯向きかゝつて右手を内に曲け、法性寺入道は横顔で裾を波の如く曳き、式子内親王は几帳に半身の後ろ姿、といふ舊套を襲はず、或は立像或は坐像、服裝萬端も種々に變化せしめ、就中天智天皇に御簾御座のみを描きて御姿を略し、前大僧正行尊を兜巾篠懸の山伏出立に粧はしたるなど、如何にも意匠が斬新である。のみならず、百人が百人顔が異なつて居て似たのがないのは最々苦心の處だ。且皆彩色が加へてあつて色の配合も甚だ好い。其後は賣れ行きの好かつた爲め再版が出たが、此方は人物も小さく筆致も振はぬやうに思はれる。

春章は風俗畫の外武者畫本もある。畫風は歌麻呂より軟ならず重政政美より硬ならずと云ふ邊であらう。此人及ひ門人春好等は役者の似顔畫も大分描いたものだ。此頃は芝居場の繪本も鳥居派の外此勝川派のが往々見える。

鳥居派の畫は黄表紙の初時に隨分多かつたが、合卷ものとなつては既に跡を絶つた。獨り四代目清花は家風以外の筆致を兼ねて居たから、猶後にも名が見える。然るに誰れも知る如く、芝居の看版や番附繪本となると一切鳥居一門に歸してしまつたので、今日と雖も尙同樣だ。尤も輓近新劇が始まつてから其看版や又歌舞伎座の一枚看版などは他の畫家に描かすことゝなつたが、僕は閑亭流の文字と共に鳥居畫でなくてはドコまでも芝居らしく思はぬ。新劇の如きは看版を見たばかりでモー沮喪する。鳥居畫の人物は而も身體も袖も裾も何も蚊も圓形盡しで、只團子幾個をつくねた樣ではあるが、此中一種無邪氣な處と又雄渾なる力が見えて、暗に武門時代の舊劇と一致する所がある樣だ。

十返舍一九は京傳の政演と同じく畫も描いたから畫作を兼ねた双紙も少くない。其畫は重演より拙いやうたが、慧遠法師の致の見ゆる處は矢張一九だ。一九の畫作を兼ねた「心學時計草」と云ふ黄表紙がある。是れは或る時石川雅望から吉原の晝夜の景況を書いて見ぬかと勸められ、因て物したのであるが、雅望の意に滿たず、遂に雅望自ら筆を執つて書き更へたと云ふことである。一九のは淺薄な滑稽で、眼や指や又簪や、箒が人の如く衣服を着てあるいて居ると云ふやうな戯畫もあつて、つまり穿ち駄洒落に過ぎぬ。雅望のに至つては事柄は當時の情況だけれども、文は專ら雅言を用ひ昔めかして書いたので、恰も吉原五街が平安朝の下に開かれてあるが如く、華美で、高尙で妙言ふべからざる著作である。此標準を以て一九に望んだものとせば最初より雅望が無理だ。雅望の著は「吉原十二時」と名づけて畫は北齋の弟子魚屋北溪が描いて居る。

一九の作で有名な「膝栗毛」の以前に同人作で「何々(忘れた)金の草鞋」と云ふがある。毎丁畫入の合卷で數篇續いて居るが、是れが脚色を一新して彌次郎兵衛北八の滑稽道中記と生まれ替つて來たのだ。一九は旅行好きで、膝栗毛の失錯事件も往々自分で遣つた實際談だと云ふ人もあるが、此人の旅行日記「馬士の歌袋」の類を見ても、隨分サウかと思はれる。

葛飾北齋は日本浮世畫の巨擘として西洋人にも久しく識認せられ、春章歌麻呂廣重などの畫よりも、一層彼の地にもて囃さる、樣子だが、此人は初年に「時太郎可候」の名を以て洒落た黄表紙も作つて居る。畫風も春章門で春朗と稱した時分は極めて拙く、是れが他日の北齋かと訝るやうなのがある。然るに漸次自家の風を立てゝ進歩し成功した事實は、黄表紙合卷讀本と其年を追ふて觀て行く中に分かる。兎角九十歳の高齡まで筆を捨てなかつた根

氣は驚くべきで、歌川派全盛の時になつても此翁のみは超然として其上に位し、恰も浮世畫の總後見と云ふ姿であつた。就中支那人物を描くことは此人の特得で、此種の讀本類は概ね此人の手に歸した。卽ち「水滸傳」「三國志」は勿論、「西遊記」も最初の一部分を除けば此人の畫だ。「弓張月」も此人だから、琉球國の事蹟風俗の處へ行くと一層得意が見える。

此人の描く人物はイツも長身長面で、目と口とが一文字に引かれて居るから、品致は如何にも好い。が、顏つきの變化に春章の「百人一首」の如き工夫がないから、百人が百人盡く兄弟かと思はれる。又日本人を描いてもドコかに支那臭い。殊に此人の癖は人物が必ず身をひねつて居ることで、或は反り或る屈み、或は左右いづれかに傾斜を取り、一も平容直立と云ふ風がない。斯くせねば其精神情趣が表はれぬと云はゞ、此人の老技倆として餘りに不活用なのを怪む。今一つ云ふと、筆が緻密で、イツも楷書的で洒脫奔放を缺き、結局韵致に乏しい。併しコヽが却て西洋的なので彼地に重んぜらるゝ所以かも知れぬ。又多少西洋畫に私淑した點も見えるから其れも一因であらう。

北齋の門では「吉原十二時」を書いた北溪と二代戴斗がよく衣鉢を受けて居る。柳川重信も北齋に學んだのだが、別に一家の畫風を成就てし居て、筆力もあり、人物畫が總て味まい。馬琴は常に此人の畫が氣に入つて居たとかで、八犬傳は主として重信に描かせて居る。此人の死後重山と云ふが二代を繼で、前回云つた各百人一首集畫中に柳川重信とあるは此二代の方だ。二代重信も可也出來るが、イツも人物の顏を斜めて向かせて、鼻を凸起し半面が墨の陰に隱くれと云ふ一種の筆癖がある。

金平本時代は菱川師宣が重にも挿畫を描いたもので、筆力の勁健なる前後及ぶものがない。之に對するものは鳥居の初代淸信が遒拔の筆蹟で、共に人物の眼が非常に大きく而して鳥居の諸物皆圓形なるに反して菱川のは兎角方形だ。又當時は芝居で市川家の荒事が人氣を取つて居たから、自然ソレに感化せられたるものであるか、金平本は勿論赤本黑本及黃表紙初時の人物畫は概ね荒事的で、身體聳立衣袂掀飜、活潑の氣が紙面に溢れて居る。之を後世歌川流が豐艶柔軟的の筆致を以て殆ど畫界を統一したのと見合はすと、畫況が自ら剛より柔に變化し來つて居る是れ一は泰平無事の日の長く續いた反響で、世道人心の推移は此畫双紙のものに於ても一斑を窺はるゝのである此話しも段々と長くなつたから先づ以て是れで止める。尙殘つたことは老梅居雜話の方で折りに觸れて云ふことにせう。

老梅居雜著終

明治四十年五月十五日印刷
明治四十年五月十八日發行

定價金四拾五錢

著作者　內藤素行

發行者　東京市日本橋區小舟町二丁目五番地　籾山仁三郎

印刷者　東京市京橋區宗十郎町十五番地　山口竹次郎

印刷所　東京市京橋區宗十郎町十五番地　東京國文社

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十五番地　俳書堂

¥1.20

（老梅居雜著）

正岡子規著
俳諧叢書第一篇 **俳諧大要** 第八版 定價金廿五錢 郵税金四錢

正岡子規著
俳諧叢書第二篇 **俳人蕪村** 第三版 定價金二十錢 郵税金二錢

高濱虚子編
俳諧叢書第三篇 **俳諧三佳書** 第五版 定價金三十錢 郵税金四錢

高濱虚子編
俳諧叢書第四篇 **太祇全集** 第五版 定價金二十錢 郵税金四錢

高濱虚子編
俳諧叢書第五篇 **几董全集** 第三版 定價金二十錢 郵税金四錢

高濱虚子編
俳諧叢書第六篇 **召波樗良全集** 第三版 定價金二十錢 郵税金四錢

正岡子規選類題
俳諧叢書第七篇 **句集春夏秋冬（春）** 第六版 定價金廿五錢 郵税金四錢

碧梧桐、虛子選 類題句集 **春夏秋冬** (夏) 第五版 定價金廿五錢 郵稅金四錢
俳諧叢書第八篇

碧梧桐、虛子選 類題句集 **春夏秋冬** (秋) 第五版 定價金廿五錢 郵稅金四錢
俳諧叢書第九篇

碧梧桐、虛子選 類題句集 **春夏秋冬** (冬) 第五版 定價金廿五錢 郵稅金四錢
俳諧叢書第十篇

正岡子規著 **俳句問答** (上) 第四版 定價金廿五錢 郵稅金四錢
俳諧叢書第十一篇

正岡子規著 **俳句問答** (下) 第三版 定價金廿五錢 郵稅金四錢
俳諧叢書第十二篇

正岡子規著 **俳句界四年間** 定價金三十錢 郵稅金四錢
俳諧叢書第十三篇

河東碧梧桐編 **元祿俳家々集** 定價金二十錢 郵稅金四錢
俳諧叢書第十四篇

河東碧梧桐選 **續春夏秋冬** (春) 定價金廿五錢 郵稅金四錢
俳諧叢書第十五篇

河東碧梧桐選 **續春夏秋冬** (夏) 定價金廿五錢 郵稅金四錢
俳諧叢書第十六篇

河東碧梧桐選 **續春夏秋冬** (秋) 第二版 定價金廿五錢 郵稅金四錢
俳諧叢書第十七篇

河東碧梧桐選 **續春夏秋冬** (冬) 第二版 定價金廿五錢 郵稅金四錢
俳諧叢書第十八篇

內藤鳴雪著 老梅居 **俳句問答** (上) 定價金二十錢 郵稅金四錢
俳諧叢書第十九篇

內藤鳴雪著 老梅居 **俳句問答** (下) 定價金二十錢 郵稅金四錢
俳諧叢書第二十篇

子規、鳴雪、碧梧桐、虚子輪講 **蕪村句集講義** 春之部 第六版 定價金卅五錢 郵税金六錢

子規、鳴雪、碧梧桐、虚子輪講 **蕪村句集講義** 夏之部 第四版 定價金卅五錢 郵税金六錢

子規、鳴雪、碧梧桐、虚子輪講 **蕪村句集講義** 秋之部 第四版 定價金卅五錢 郵税金六錢

子規、鳴雪、碧梧桐、虚子輪講 **蕪村句集講義** 冬之部 第六版 定價金卅五錢 郵税金六錢

鳴雪、虚子、碧梧桐輪講 **蕪村遺稿講義** 春之部 定價金卅五錢 郵税金四錢

鳴雪、虚子、碧梧桐輪講 **蕪村遺稿講義** 夏之部 定價金卅五錢 郵税金四錢

鳴雪、虚子、碧梧桐輪講 **蕪村遺稿講義** 秋之部 定價金卅五錢 郵税金四錢

鳴雪、虚子、碧梧桐輪講 **蕪村遺稿講義** 冬之部 定價金卅五錢 郵税金四錢

内藤鳴雪著 **元祿廿家俳句講義** 第二版 定價金廿五錢 郵税金四錢

河東碧梧桐著 俳話 **蚊帳釣草** 定價金卅八錢 郵税金六錢

内藤鳴雪著 **老梅居雜著** 定價金四十五錢 郵税金六錢

高濱虚子著 **俳諧馬の糞** 第二版 定價金八十錢 郵税金八錢

高濱虚子著 **俳諧羊の糞**

俳書堂編 **俳句の研究**

内藤鳴雪著 **鳴雪句集** 定價金二十錢 郵税金四錢

岡本癖三醉著 **癖三醉句集** 定價金十錢 郵税金二錢

高濱虛子編 袖珍 **俳句季寄せ** 第六版 定價十二錢 郵税金二錢

俳書堂編 季寄兼用 **俳諧手帳** 第二版 定價十二錢 郵税金二錢

坂本四方太 高濱虛子著 寫生文集 **帆立貝** 定價金一圓 郵税金八錢

坂本四方太編著 **續寫生文集** 附四方太寫生文話 定價金六十五錢 郵税金八錢

正岡子規序 中村樂天著 **徒歩旅行** 第二版 定價金卅五錢 郵税金六錢

正岡子規編著 高濱虛子編著 短文集 **寸紅集** 定價金卅五錢 郵税金四錢

鈴木三重吉作 小說 **千代紙** 定價金七十錢 郵税金六錢

子規遺稿

子規歌集 竹の里歌 第三版 定價金廿五錢 郵稅金四錢

子規小品文集 第三版 定價金三十錢 郵稅金四錢

子規小說集 第二版 定價金廿五錢 郵稅金四錢

子規書簡集

俳句分類

俳家全集